

Lagado
川鵜鶏肋
Fukapon
春屋アロツ

mnfikmyhk

まにふいくみやはかくりーちゃーみきしんぐよん

CREATURE MIXING 4

故に手段は問わぬ

Contents

私の特権	春屋アロツ	02
Mile-end	Lagado	11
Red Cross Black Maiden	川鵜鶏肋	15
一つの世界、だから——	Fukapon	75
難解辛苦		90

mnfikmyhk
Creature Mixing 4

ば い し ゅ う
買収

私の特権

春屋アロツ

衣替えの直後は恨めしかった長袖の制服が段々と苦でなくなってきたある日のこと。昼休みに美紀がトイレに立ったのを見送って雅は佳奈と綾乃に尋ねた。

「二人とも、今週末は空いてるか？」

「うん」

「なんにもないけど？」

「美紀がライブをやるんだ。聴きに行くんだが、一緒に来ないか？」

雅が少しばかり声を潜めて言うと、二人は目を丸くした。

「出番は土曜日の午後らしい。時間と場所は後で言う」

「行きたい！」

いつもは控えめな綾乃が珍しく、雅の言葉尻にかぶせるように言った。佳奈も「私も！」とすぐに手を挙げた。

「よし。本人は恥ずかしがってるから、本人の前ではこの話はないようにしてくれ」

「ドッキリね？」

佳奈はにやりと笑った。この手の悪戯は大好物。綾乃は、黙ってていいのかな、と少し迷っている様子だったが、雅が一言「大丈夫だ」と言うと、こちらも頷いてくれた。

美紀が教室のドアをがらりと開けた時には、佳奈が最近はまっている携帯ゲームの話をしていて、綾乃が面白そうに相づちを打ち、雅は無表情で静かに聞いている、といういつもの光景に戻っていた。

その日の夜。雅が二人に集合場所と時間をメールで伝えると、すぐに佳奈から電話がかかってきた。

「もしもし」

『もしもし、あたしー。今もらったライブのことだけどさ、東青大ってどゆこと？』

「東青大の文化祭でやるんだ。去年もそうだった」

『なんで大学？』

「美紀のお兄さんが行ってる大学だ」

『美紀のお兄ちゃん？』

「バンドのリーダーが美紀のお兄さんなんだ。他のメンバーも大学生」

『へー……なんか意外だわ』

そう言っている佳奈の表情が目には浮かぶ。

「かなりうまいと思う。去年も聴いたが、他のバンドとは少し違う感じがした」

『それって美紀も含めて？』

『もちろん』

実際、雅は自分の意見に若干のひいき目があることは自覚している。佳奈にそれが伝わっているかどうかはわからないが、宣伝だと思えば少しくらいいいだろう。

『結構すごいんだ。でもその割に話聞いたことないよね。軽音部とかにも入ってないみたいだし』

入ってないよね？と確かめるように訊かれて、雅はわずかに言葉に詰まった。

「入ってないよ。中学の時はしばらくやってたみたいだけど、私と仲良くなった頃にはもう止めてたな」

『ふーん……そっか。まあいいや。教えてくれてありがとね。また明日！』

「ああ。おやすみ」

電話を切って、雅はわずかに溜息をついた。

土曜日の正午を少し回った頃。雅はやや肌寒いくらいの風を楽しみながら、のんびりと駅に向かう。電車に乗って二駅、一旦降りて階段を降りていく。綾乃は改札の内側で待っていた。白いハイネックのセーターに赤いチェックのスカートの綾乃は、他の乗降客の中から黒一色の雅をすぐに見つけて、嬉しそうに駆け寄ってきた。

「ミヤちゃん、こんにちは」

「こんにちは。ずいぶん早いな。待つつもりで来たんだが」

駅の時計は約束の時間の十五分前を指している。

「うん、本当はもう少し後に着くくらいに出ようと思ってたんだけどね。なんだか楽しみで気が急いちゃって」

そう言うてはにかんだ綾乃が妙にかわいくて、思わず綾乃の頭に手が伸びた。綾乃も美紀のところ構わないスキンシップを半年受けて慣れたのか、同級生に撫でられても嫌そうな素振りはない。むしろなんとなく嬉しそうに見えた。

綾乃と二人同じホームへの階段を上りきった時に、ちょうど発車ベルが鳴った。反射的に駆け込んでしまったから、わずかに苦笑する。

「来てるってつい走っちゃうね」

「予定より早いんだし、慌てる必要はないのにな」

いつも降りる学校の最寄り駅を通り過ぎてさらに三つ。ここで

直交する別の路線に乗り換えて二つ。ここから東青大のキャンパスまでは歩いて十分ほどだ。

雅は去年のステージも見に来たし、美紀にくっついて練習を見に来たこともあるから行き方は知っているが、綾乃は初めてだ。道案内を、と先に立って歩いたが、その必要がないことはすぐにわかった。あちこちにチラシと案内板が出ているし、周りの人も大半が同じところを目指して歩いているらしい。

「すごい人だね……」

「うん。やっぱり高校の文化祭とは違うな」

よく晴れているのも手伝っているんだろうが、つい一ヶ月前に終わったばかりの雅たちの高校の文化祭とは様子が全然違う。

人の流れに乗って歩いていくと、校門が見えてきた。そのすぐそばに、一人だけ中に入らずに立っている人がある。

「あ、カナちゃん。もういる」

「速いな。さっきメールしたのに」

佳奈の家はさっき二人が乗り換えた駅から自転車ですばらく行ったところにある。駅に出るよりもずっと早く来た方が速い、ということで、自転車であって校門で落ち合うことにしていたのだ。

「はよー。すごい人だねー」

「おはよー。混んでるよねー」

校門に入ってすぐに受付があるのは高校も大学も変わらない。雅は二人を待たせて、パンフレットを一冊だけ買った。二人のところに戻ると、綾乃がパンフレットを受け取って、バラバラとめくった。

「綾乃、ステージステージ」

「うん。えーと、あ、あった」

「雅、これ？ こっち？」

佳奈が指さしているのは、ステージのタイムテーブル。屋内と屋外で二箇所あるらしく、それぞれのタイムテーブルが並んでいるのだ。雅は屋外の方を指さした。

「こっちだ。一時四十分からのカルマ式」

「変な名前。あと十五分か……あたしちよっとお腹減ったんだけど」

「途中で適当に買って食べながら行こう。五分前には来るから、始まる前に声をかけてもいい」

「んじゃとりあえずステージの方に行こっか」

頷き合って、三人はまた人の流れに乗った。校門から続く道の両側に屋台が点々と軒を連ね、その合間に看板があったり校舎の入り口があったりする。佳奈がさっそくたこ焼きの屋台に食いつき、綾乃もタコさんウィンナーひとすくい二百円、という屋台で大量のおまけをもらって、三人で食べながらステージに向かう。

ステージでは別のバンドが演奏していて、近くには人だかりができていた。人気のロックバンドのコピーらしく、雅の耳には興味を惹かれるところは何もない。他の二人にしても似たようなものだった。

「いる？」

佳奈の質問に雅が首を伸ばして眺めると、ステージの上手に人が集まっている。その中に見覚えのある顔が見えた。美紀の顔は見えないが、こちらに背中を向けているのがそうだろう。背格好からして間違いない。

「うん、いる。たぶんあれだ」

「よし、行こ行こ！」

三人は雅を先頭に立てて、人混みを避けてステージ脇に近寄っていた。それとおぼしき一団がはつきり見えるところまで来て、後ろの二人は思わず足を止めた。雅が気付いて振り返ると、二人ともそちらを見て唾然としていた。

「……ホントにあれ？」

「そうだ。あのタキシードの人が美紀のお兄さんだ」

「ミキちゃんは……あのフードかぶってる黒いコートの人？」

「うん」

袖には何人かいたが、出番を待っている四人は明らかに他の人とは見た目が違っていた。美紀の兄はドラキュラ伯爵のような、タキシードにマントという姿。その隣には足首まであるロングスカートにフリルたっぷりのエプロン、おまけにフリルのついたカチューシャまでつけたロングヘアの女性が立っていた。

反対側の隣には蝶ネクタイに白いワイシャツ、黒いスラックスという、比較的大人しい格好の大柄な男性が美紀らしき人と話している。らしき、というのは、フード付きの長いローブを着ていて、しかもフードをしっかりとかぶっているのだ、後ろからではよくわからないのだ。

「……お兄さんはともかくとして、あれが美紀だってよくわかるわね」

「長い付き合いだ。他の三人とも知り合いだしな。浩太さん！」

まだ回復しきらない佳奈に答えてから声をかけると、タキシードの男が振り返った。

「おう、雅。時間びったりだな」

「あ、雅ちゃん。こんにちは。毎回来てくれてありがとう」

「こんにちは、寛美さん。カルマ式の演奏、好きですから。今回

は絶対来るなって言われましたけど」

ちらりと視線を向けると、顔だけ振り返った美紀がフードの奥から射殺さんばかりの視線を向けていた。だが、それくらいでひるむ雅ではない。いつものように挨拶して、美紀と話していた蝶ネクタイの人にも頭を下げた。寛美、と呼ばれたメイド服の女性が雅の後ろに目を向けた。

「後ろの二人は友だち？」

「はい。同じクラスの——」

「んなっ!？」

美紀が変な声を上げて、今度こそ全身で振り返った。

「あ、ミキちゃん。こんにちは」

「美紀? こんな面白いこと黙ってるって、どーいうことかなあ?」

綾乃はおずおずと、佳奈はしてやったりという風に笑っている。

美紀の反応を見て、さっきの衝撃は吹っ飛んだらしい。

美紀はしばし硬直して、ぱっと浩太の方を見た。

「兄貴、オレこれ脱がねえ」

「アホぬかせ」

浩太が即答すると、寛美も「却下」と冷たく告げた。

「そもそも何を着てるんだ?」

「最高の衣装だよ」

雅の質問に蝶ネクタイの男性が答えると、他の二人も深く頷いた。

「金田も太鼓判のクオリティーだ。本人がこの格好で人前に出るの嫌がるからこんなもん羽織ってるけどな。ステージにはちゃんと出すから、楽しみにしてなよ」

「帰れ! 三人とも! 今すぐ!」

美紀がこっちに駆け寄ってくるのを、雅は正面から抱き留めた。美紀も長身だが、雅にしっかりと抱きしめられると動けない。しばらくうーうー言っていたが、やがて大人しくなった。

「ステージ衣装だと思えば恥ずかしいんじゃないの?」

「お前もこれ着てから言いやがれちくしょう」

佳奈への憎まれ口も勢いが無い。浩太が苦笑した。

「ホント美紀は雅に弱いな。寛美じゃ止まりやしねえのに」

「ね」

とんとんと背中を優しく叩いてから腕をほどくと、美紀はぶいとそっぽを向いてしまった。

「じゃあ私たちはそろそろ向こうに行ってます」

「お、前終わってるじゃねえか。んじゃまた後で」

「あの、頑張ってください!」

雅の後ろから顔を赤くして言った綾乃に、美紀以外の三人は一斉に頬と尻を同時に緩ませた。

前のバンドがステージを下りると、最前列は一緒に動いたが、その後ろは空いたスペースを埋めるように前に動いたくらいで、この場から離れようとはしなかった。三人はステージ全体がある程度見えるように、と少し離れたところに陣取った。真ん中よりも上手寄りにしたのは、美紀が一番よく見えるようにだ。

「しかし、あれはびっくりだわ。どういうバンドなの?」

「一応ロックからポップスならコピーもオリジナルもやるバンドなんだが、ここでは必ずアニメ・ゲーム系の音楽をやるんだ。普段も結構その辺の曲が多いかな。美紀曰く、浩太さんと寛美さんがオタクラしい」

雅の答えに、佳奈は納得したという顔で何度も頷いた。

「それであそこまで気合い入ってるんじゃ、付き合わされる方は大変だわ」

「美紀もバンド自体は好きでやってるんだけどな。自分もやりたい曲言ったりしてるし」

「ミキちゃんもゲームとか好きなの？」

「うん。浩太さんの影響だろうな。あの二人すごく仲がいいから」

「……そうなの？」

佳奈は少し引き気味に言った。雅はフォローの必要性を感じて付け加えた。

「そうは言っても、美紀はいわゆるオタクじゃないぞ。男子なら大抵あんなものだろう」

「男子なら、ね」

「あ、上ってきたよ」

綾乃の言葉に、二人もステージに目を向ける。まずはドラムの金田がステージに上り、すぐにドラムセットに座った。続いて、メイド服姿の寛美が上ってきたのを見て、観客が一斉にどよめいた。さっきは楽器を持っていなかったが、ギターを抱えていた。続いて上ってきたのは浩太。こちらもギターを抱えている。最後に上ってきた美紀の服装を見て、三人は揃って固まった。

赤と黒のドレス。それも赤地に黒のフリルが幾重にも巻き付いた膝丈のスカート、胸元は黒一色だが緩く膨らんだ短い袖も赤、と、いかにも少女らしい格好だ。オーバーニーの黒いソックスのてっぺんに赤のフリルがあしらわれている。二の腕までを覆う黒の手袋は、演奏上の理由だろう、手の甲までを覆っているが指先はすべて出ている。

ドラムのカウントに続いて、何の前置きもなしに演奏が始まった。短い前奏の後、最初に歌い始めたのは美紀だった。力強い歌声に、ワンフレーズでハモリが加わる。それに気付いてようやく雅が他の三人の方をうかがうと、浩太は他の二人よりも後ろに引いてギターに集中し、寛美がリズムを刻みながら、美紀の声にハーモニーを重ねていた。

どよめきはやがて歓声に変わる。美紀の声はベースを弾きながらもサビに向かってますます力強く響き、寛美の透き通った高音は弾いているギターの歪んだ音とは真逆の美しさで美紀の歌声を彩っていく。それを片方は軽やかに、片方はどしりと、男性陣の演奏が支える。カルマ式の音はステージの前の観客だけでなく、そばにいた人をも引きつけていった。

だが雅たち三人はそれどころではない。いつも制服でスカートをはいているのだから女の格好は見慣れないということはないはずなのに、私服ではスカートを一枚も持っていない美紀に、よりによって女性らしさ、それもどちらかというと少女らしさを際立たせる服を選ぶなんて、想像もしていなかった。

「どうもありがとー！ カルマ式です！」

曲が終わって叫んだ声は、いつもの美紀の声だ。それにハッと我に返って、ばらばらと拍手を送った。

「あれは……来させなかった理由わかるわ……確かに美紀にとっちゃ恥ずかしいなんてもんじゃないわよね」

「うん……でもミキちゃん、すごい似合ってるね」

佳奈は綾乃の感想に頷いた。確かに、常に男性みたいな言動をする、ベリーショートで長身の美紀が不思議と違和感なく着ているのである。

二人がそれ以上の言葉を交わす前に、二曲目が始まった。今度はステージ中央の浩太がギターから手を離さないままメインボーカルを取った。美紀と寛美は演奏しながらコーラスで彩りを添える。歌いながらもほとんど乱れない演奏に、誰かがぼそりと感嘆の呟きを漏らした。

寸劇でも始まりそうな見た目に反して、曲名を挟むくらいで次々に演奏が始まる。金田以外の三人が代わる代わるメインボーカルを取り、歌っていない二人はコーラスをしながらスピーディーなフレーズを軽々と決めてみせる。美紀の二曲目は最初の曲よりもポップで、高い音は裏声も混ぜながら堂々と歌っていく。

「すごいまいね」

「うん。なんか服と声のギャップが気になるけど」

「ま、まあ、ね……」

最後の二曲はインスト、浩太のボーカルと高速のロックを続けた。最後の曲では曲調にまるで合わない歌詞を浩太が大真面目に歌い、美紀がコーラスに加えて所々で美少女戦士なキメ台詞を叫ぶものだから、佳奈も綾乃も笑いながら聴いていたが、四人がステージを下りる時には、周りの拍手に負けじと、手の痛みも感じないくらいに手を叩いた。

全員がステージを下りて、周囲の観客が三々五々散り始めてもまだ音の余韻が残っているように思えた。

「すごいね、ミキちゃんこんなことやってたんだあ」

「なんであたしたちには黙ってたのかしらねえ？ ……って、あれ？ 雅？」

「ミヤちゃん？ ミーヤちゃん」

「ん、ああ、何だ？」

二人の会話も耳に入らぬ様子でぼーっとしていた雅は、綾乃に肩を叩かれてようやく我に返った。

「どしたの？ ぼーっとしてて……」

「いや、聴くのに集中してた」

雅はぼそぼそと言うと、ごまかすようについとステージの方に歩き始めた。二人も慌ててついていく。

「雅、もしかして誰かに見とれてた？」

背中から投げかけられた質問とニヤニヤ笑いには答えず、聞かえた印に一度だけ振り返って、そのまま歩を進める。

「お兄さん？」

重ねて訊かれる。雅は答えたものか黙殺したものか、わずかに迷った。その間に美紀たちが見えたので、黙殺することにした。

手を大きく挙げると、寛美が応えた。

「……何やってるんだ？」

美紀は何故か浩太にはがいじめにされている。尋ねると、美紀は暴れるのを止めて雅に訴えた。

「ロープ！ ステージに置いてきたの持ってこようって言ったらいきなりこれだぞ！ ひどくね!？」

「何言ってるのよ。当然の処置でしょ？ 金田君が取りに行ったから」

寛美の言葉にステージを見ると、金田がステージの上で脱ぎっぱなしだったロープを回収して戻ってくるところだった。

「井上、どうするこれ」

「そのまま持ってる」

「だからオレが着るっての！ 金やんパス!」

美紀の叫びはさすがにいいほどに無視され、金田は悠然とロー

ブを広げ、ぱんと埃を払った。

「雅、あれ取ってこい！」

「悪いがそれはできない」

「なんでだよ」

「もうしばらくその格好でいてほしい。よく似合ってるからな」
ストリートな雅の言葉に美紀は言葉を失い、浩太も目を丸くした。寛美は得たりと頷いた。

「なあんだ、雅が見とれてたのって美紀だったの？　つまんないのー」

佳奈が言うのに、雅は少し間をおいて頷いた。美紀は自分の頬が赤くなったのに気付いて、慌てて言った。

「じゃあ雅、次泊まりに行った時にこの服着てやるから！」

一同が何を言い出したんだ？　といぶかったが、雅はきっかり五秒迷った末にぱっと身を翻すと、ロープを畳もうとしていた金田の手からさっとロープを奪った。続いて浩太の腕から美紀を解放して自分の方に抱き寄せ、勝利の笑みを浮かべる美紀にロープを渡した。

「雅ちゃん、ずるい」

「私の特権です」

いつもの真面目な顔で言われてしまい、寛美は仕方なさそうに溜息をついた。美紀は周りの気が変わらないうちに、と急いでロープを羽織った。フードまでしっかりかぶる。

「サンキュー、雅」

「約束を守ってくれば易いものだ」

美紀に逃げられた浩太は思わず呟いた。

「そうだ。雅も美紀に弱いんだった」

「仲いいんですね」

「よすぎるくらいにね」

浩太は綾乃の言葉に苦笑で応じた。

四人は衣装から解放されて晴れやかな顔の美紀を先頭に大学中の出店を見て回った。たっぷり満喫して解散することにしたのは、そろそろ本格的に日が傾いてきた頃だ。

「あー、今日は楽しかった。大学祭も結構いいんだねー」
「ったく、来るなつてのに雅がバラしたりすっから……」

不満そうに雅を睨む美紀に、佳奈は少し間をおいて付け加えた。
「予想以上の晴れ姿も見れたけどー」

「忘れろ！　即忘れろ！」

「無理」

ニヤニヤ笑う佳奈を全力で睨んでも、雅と同じく平然としたものだ。そこに綾乃がにこにこしながら追い打ちをかけた。

「ミキちゃん、ごめんね。でもすっごくこよかったし、かわいかったよ」

愛らしい微笑みに、美紀はうっと詰まった。

「また見たいよね？」

「うん」

後ろから余計なことを言った佳奈はともかく、綾乃の視線は賞賛に満ちている。美紀は怒るに怒れず、目を反らした。

校門で佳奈と別れ、三人で電車に乗る。美紀は自分の降りる駅を通り過ぎてそのまま乗っていた。

「あれ、ミキちゃん、まっすぐ帰るんじゃないの？」

「いんや、綾乃の見送り」

「え？」

「私もだ。改札までな」

雅も当然のような顔で頷く。本当に美紀も雅も綾乃の最寄り駅で一旦電車を降りたので、綾乃は嬉しいような不思議なような顔で改札を抜けていった。小さな背中が見えなくなるまで見送って、二人はまたホームに並んだ。

「んで？」

改めて訊かれる。美紀が自分の駅で降りなかったのは、雅が綾乃に見えないように服の裾を引いたからなのだ。

「いや、例の服を先に預かるうかと思ってな。どうせ外では着ないだろうし、わざわざ持ってくるのも面倒だろうと思ってな」

「いや……明日も着るから、今日は持って帰るわ……」

美紀はげんなりした口調で言った。が、雅には予想どおりの答えだ。

「なら明日、帰りに預かるか」

「明日も来る気かよ!？」

「もちろんだ」

当たり前のように言うのと、滑り込んできた電車に乗った。美紀も乗る。

「今日はカメラを持ってこなかったからな」

美紀が思わず叫ぼうとして、ギリギリで我慢したのがわかった。二つ先の駅で降りて、あかね色に染まった住宅街を五分ほど歩いて、マンションに入る。郵便受けの中を確かめて、エレベーターで四階へ。

「ただいま」

「お邪魔します」

二人で挨拶をしたが、ここには雅しか住んでいない。雅の両親は転勤で海外にいる。

「美紀、何飲む？」

「冷たい烏龍茶」

「残念ながら冷たいのはほうじ茶しかない」

「ほうじ茶？」

雅がグラスを二つ出して冷えたお茶を注いでいると、荷物を置いた美紀が横からお茶瓶をのぞき込んできた。

「これがほうじ茶？」

「うん。スーパーに置いてたから試しに買ってみた」

「味は？」

「あまりクセがない。格別いい、ということもないけどな」

グラスを片方渡してリビングに。ソファーに並んで腰を下ろすと、美紀はグラスのお茶をぐいっと飲むと、ほうっと深く息をついた。

「疲れたか？」

いたわるように言ったが、美紀は首を振った。

「あのカッコでやったのがキツかった」

心底きつそうに言うものだから、雅は思わず頬を緩めた。

「笑いごとじゃねえっての。あれだけの人数の前でスカートはいて演奏したんだぞ？ のぞかれんのやだから下着の上にホットパンツでも履こうとしたんだけどさ、寛美さんが着替え中ずっと監視して止められるし」

人目がないからぐちぐちこぼす。雅は昼間綾乃にしたように、優しく撫でてやった。

「中は見えてなかったから安心しろ。それに変に照れたりしてな

かったから、特におかしくはなかったぞ?」

「あー、うん。それは金やんに言われてそうしてた。あの人は真人間だから」

雅は初めてカルマ式のライブに行った時のことを思い出した。全員真っ黒なスーツ姿で、黒のルージュを付けていた四人を見てさすがに言葉を失った雅に、金田が悟ったような顔で同じことを言っていたのだ。

「明日」

「ん?」

「マジで来る気か?」

「当然だろう。明日は浩太さんとのデュオもあるし、寛美さんも浩太さんと演奏するんじゃないか?」

「いや、それ見るのやめた方がいいと思うけど。今回の衣装選びの時に一緒に話してたけどさ、寛美さん今日兄貴が着てたマントと水着だって」

「……」

「それも名前でっかく書いたスクール水着。オレと兄貴が見てんのにすっごい笑顔で着てた」

「それは……誰が考えたんだ?」

「寛美さん。兄貴ももう一人も寛美さんチョイスで今日より変態な格好してる」

雅はもう二年近くカルマ式のライブをずっと見てきているが、寛美の発案でその格好、というのはさすがに予想の範疇を超えていた。

「……そもそも、だ。明日があると思っていたから今日はカメラ持っていないかったんだ」

強引に話を戻す。美紀はお茶を置いて雅の肩にすがりついた。「頼むから写真はやめようぜ? それこそあの服ここに置いとく気なんだろ」

「それはそうだが、演奏している時の表情はその時でないと見られないし、そもそも四人揃っていることに意味がある」

雅はできるだけ柔らかな口調でそう言い、背中をそっとさすった。

「オレは死ぬほど恥ずかしいんだけど。女装写真だぞ?」

「なに、これまでのライブの写真はすべて残っているんだ。気にするな」

「気にするわ!」

美紀は雅のそばにいと、あまり大声を出したり強引なことを言ったりしない。

雅の経験則どおり、美紀の反論はすねたようなそれだった。

「ああいう服を着るとお前はかわいいんだ。綾乃の言っていたとおりな」

「嬉しくねえ」

「そうだろうが、私は見たいんだ」

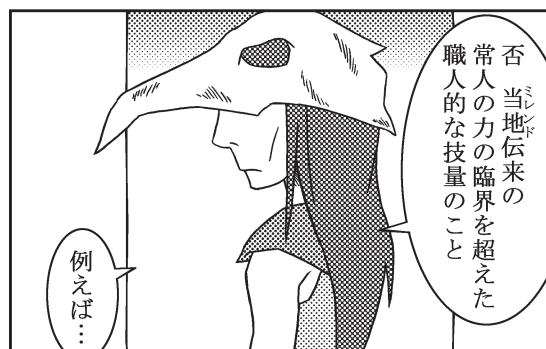
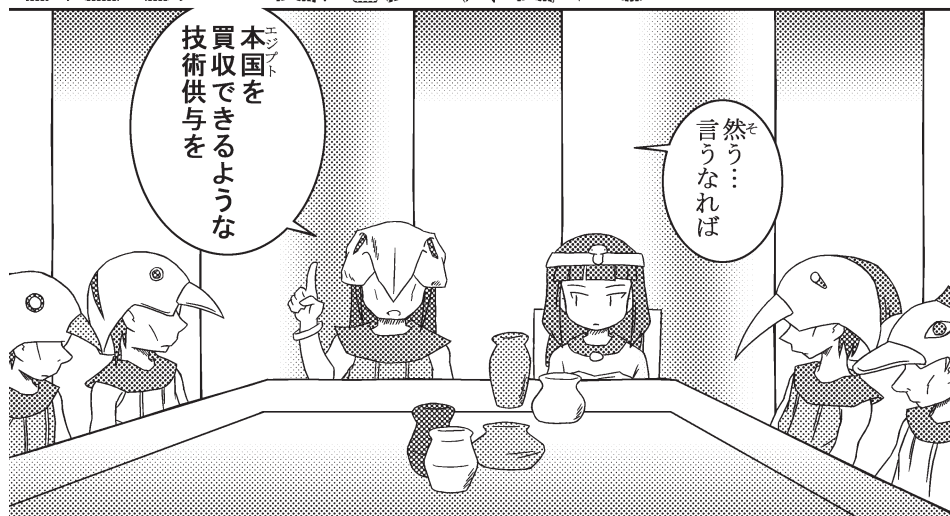
しばらく、時計の針の音だけが部屋に響いた。窓の外が濃紺の闇に塗りつぶされる頃になって、美紀がぼつりと言った。

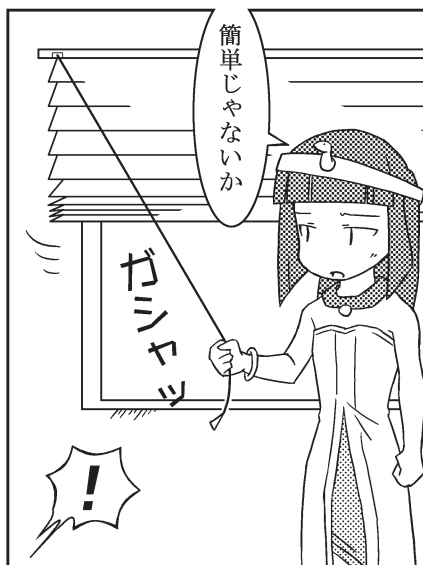
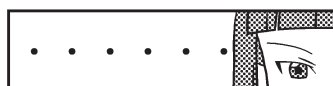
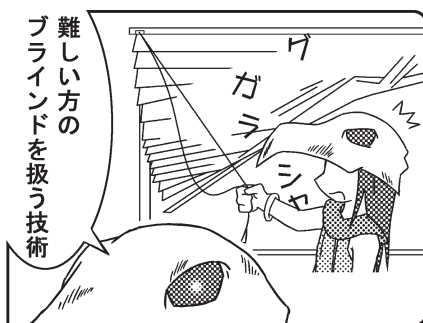
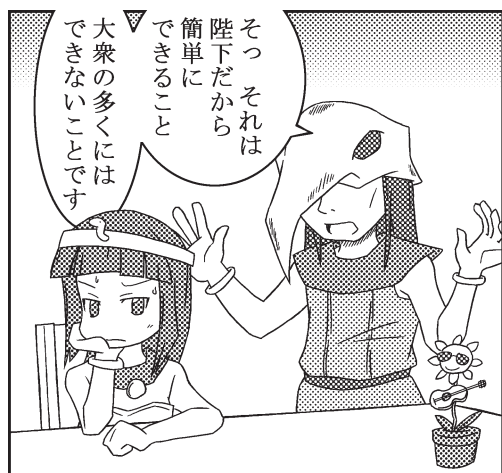
「絶っ対人に見せるなよ」

「私が持っている分は私しか見ない」

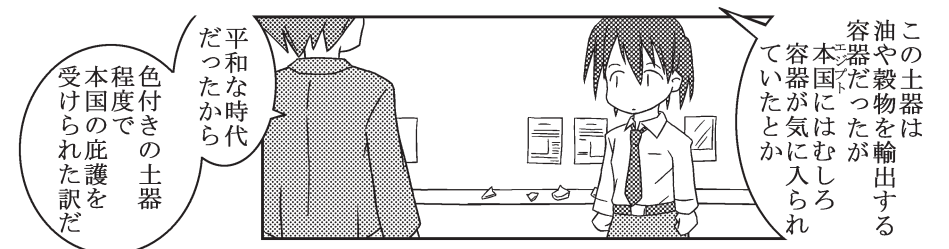
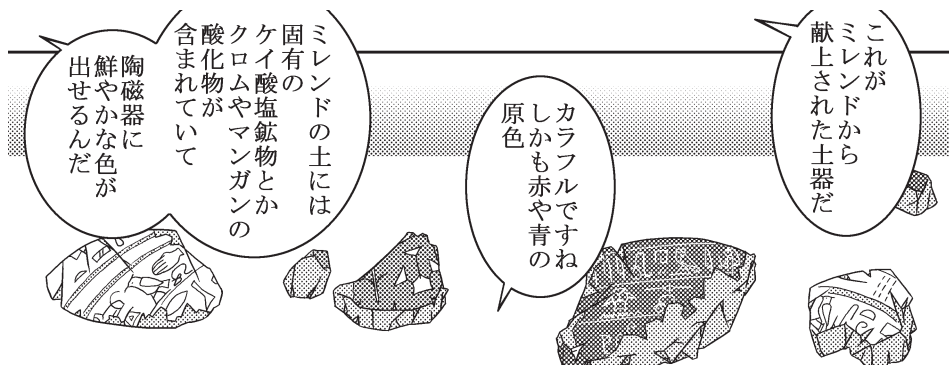
「お前が持ってる分ってなんだよ」

「浩太さんからもらったものは、少なくとも浩太さんがオリジナルを持ってる。余人には見せないように毎回頼んではいるけどな」
美紀は力尽きたように、雅の膝に倒れ込んだ。









Red Cross Black Maiden

川鶴鷄助

戸口から身を乗り出した立派な髭の男性教師は生徒会室をひとしきり見回してから、質問を發した、

「^{おうぎど}扇戸だけか。書記の佐倉はどうした？」

生徒会長席に座る男子生徒は一礼して。

「彼女なら補習中です。担当生徒の成績の把握ぐらいいは期待させていたいただきたいところですね」

「点が辛いなあ。新米なりに精一杯やってるんだから、まけてくれよ」

態度も口調も至って丁寧だが、実に齒に衣着せない。

「担任が新米であろうとベテランであろうと、我々の高校生活に二度目はありません。狩谷教諭」

「うっ、それを言われると痛い」

大仰に左胸を押さえてみせると、生徒会長は露骨に鼻白む。

「いや、担任が少々力不足でも、よい友人関係はそれを補って余りあるんじゃないか？」

「何を仰りたいんです？」

意向を概ね理解しつつも、あくまでもこちらの口から聞き出す事にこだわってくる。

やりにくい。

^{おうぎどじょうじ}扇戸丈司。二年生。

狩谷はこの生徒会長を苦手としていたが、浅葱谷高の教師の中でも得意な人間の方が少ないだろう。学生らしからぬ貫禄というか迫力の持ち主で、こうして話していると警察・法曹関係者でも相手にしているような気分させられる。

長身瘦軀にして頑強壮健。

墨ではいたような青みがかった黒髪。染めるどころか整髪料も使っていない。地味な黒縁の眼鏡は、整ってはいるがきつめの容貌を和らげている。

必要以上に目立たずしかし清潔感がある容姿は、初見の相手に悪感情を抱かせがたい。

優れた学業成績は言うに及ばず（珠附紫城でも十分以上に通用するはずの彼がどうしてわざわざ浅葱谷を選んだのかは、教師間でたびたび話題となる）、目端が利いて頭が切れ、交渉能力にも長ける彼はまさに生徒代表にびつたりの逸材と言えた。

実際、生徒会長としては確実に実績を積み重ねており、何より公正無私という点で生徒間での信頼も厚い。

時折見せる慇懃無礼で嫌みな態度にしても、基本的に力量を認めた相手の時のみに限られており、下級生や女生徒に対しては、ごく一部の問題のある相手のをぞき紳士的な態度を貫いている。

強引なやり口や相手にぐうの音も言わせぬ脅迫じみた交渉術も、生徒会長という立場上は必要悪であり、彼は力を示すべき場合とそのやり方というものは必要悪でしかと心得ている。だからこそ蛇蝎のように嫌うものは少なくないが品位を攻撃される事はなく、畏怖は

されても軽んじられる事はない。

しかも弁が立つだけでなく腕も立つ。立場上部活動には籍を置いていない彼だが、なんとかいう剣術の流派の達人であり、實際格技の授業では剣道部員（地方では強豪の一角だ）を寄せ付けず圧勝を続けている。

少なくとも教師サイドからは文句のつけようがない、絵に描いたような完璧超人。

それが丈司という少年だった。

話を戻そう。

「……普段生徒会で世話になってる仲間なんだから、勉強の少しぐらい見てやったらどうだ。お前ならそのぐらいの余裕はあるだろう？」

「むしろこちらが世話してますよ」

肩をすくめ、お手上げ、の仕草が返ってきた。

「一人でやれば必要時間は三分の一ですね。仕事を台無しにする事に関しては天才的です。悪気がないのが救いです」

普段であれば無駄な陰口などに時間を費やす男じゃないのだが、話題の彼女は、彼をしてそうした行為にかりたててしまう数少ない例外だった。

「いや、まあ、あいつなりに真剣に頑張ってるんだから、そのところは分かってやれよ」

狩谷の目から見ても、すくなくともその点については間違いない。

「それは存じますかね。世の中を立ち回る要領に欠けるばかりか、天運にまで完全に見放された人間ってのが厳然として存在す

る事を確信していますよ、僕は」

「言う言う」

狩谷はそう言ったものの、丈司の言うことは正しい。

「不人気ボストの自薦を蹴るわけにもいかず書記に採用した時には誰がやっても大差ないと思ってましたが。まさかマイナス工数になるとは想定外です。後半がごっそり欠けた誤字脱字だらけの議事録を補填するためにずいぶんと短期記憶が鍛えられましたよ。最近じゃICレコーダ隠し持って、帰宅後に議事録の手直しします」

ボロカスに言ってるが、そこでこっそりやってしまうところが実に紳士的で彼らしい。

「うーん、嬉々としてやってるように見えるんだがな」

「下手の横好きとはよく言ったものですよ」

と、容赦ない。

「頼むからクビにだけはしてくれるなよ。むしろ俺のが危ない」

男性教師は自分の首をなでてみせた。

「佐倉理事はおおらかな方だけど、さすがに娘さんが補習常連じゃこっちの形見も狭くてね」

「同じ授業を理解できない生徒にわざわざ補習をするのはむしろサービスでしょう。テスト前の段階で特別扱いする方がよほどまづいのと違いますか？」

これまた見事に優等生の意見。

「そりゃ確かに正論だがね。こりゃ感情論だからな」

「で、そちらで露骨に特別扱いするわけにはいかなから、個人的にこっそりやれと」

しかも、勧奨からからお願ひへとニュアンスが変わってきてい

るところを鋭くついてくる。

「勉強を教える程度はやぶさかではありませんがね、なにぶんにも」

この少年相手に妙な駆け引きは無意味だ。いきなりスピードのエースを切る事にする。

「まあ、お前さんも兼任が多くて多忙だろう。成績さえ落ちなければ多少の出席日数は融通できないこともないが」

そう来るだろうと思った、と言わんばかりの顔。やりにくい。

「それには及びません。むしろ、我々の年代の男女が二人きりで過ごす事を勧める事の方に問題がありませんか？」

「はっはっは」

普通にこういう発言をするのだから、笑うしかない。

「それを自分で言うような奴なら心配ないさ。まあ、おまえならくつついてくれても一向にかまわん」

生徒会長は眉を持ち上げた。ちょっと意外だったらしい。してやったりという気になる。

「生徒指導の山科先生は渋い顔をするだろうが、俺としてはむしろ歓迎だ。何しろ『聖者』と『姫様』だ。見栄えも態度も、高校生として理想的なカップル像になるだろうしな」

ある意味ものすごく高校生離れしてるとも言えるが。

「不用意に抑圧して暴発させるよりは、適度にガス抜きしてコントロールする方が容易いと。大人の立場から見た理想と生徒の立場から見た理想の交点を突いて、生徒会をショールームに仕立てようというわけですね」

「その言い方はちょっと語弊があるが、まあそんなところだ」
一を聞いて十どころか、こっちは感覚的にしか考えてなかった

ことを言葉にして返してくる。末恐ろしい。

「相変わらず理解が速くて助かるよ。おまえらいかにも爽やかに見えるしな。それで佐倉の成績が上がって俺のクビがつかねれば言うことなしだ」

「分かりました。生徒側の立場としても校の評価が低下する事は望ましくない。今日にでも結婚を前提とした交際を申し込むとしましょう」

おいこら。

「……少しは考えろ。いや、お前の事だから考えたんだろうが、そいつはちょっと飛躍しすぎじゃないか」

「佐倉君は誰かに頼らずには生きていけないタイプです。頼る相手には事欠かないでしょうが……頼るべき相手かは別問題です。一度情けをかけたからには最後まで面倒を見るのが筋というものでしょうよ」

さらっと言ってるのける。これが大言壮語にならない人間はそうそういないだろうが、この少年は数少ない例外だ。

「わかった。任せる。いいようにしてくれ」

退出しようとした符合は扉の前で立ち止まると、振り返らずに尋ねた。

「なあ。あれを生徒会に置き続けてるのは、目の届く範囲においてためだったのか？　ずいぶんとフォローして回ってるようにじやないか、うん？」

丈司は質問には答えず、こう返す。

「先生が教師をなさっているのは案外天職かもしれませんね。年度の途中で担任が替わるというのめさすがに後味悪いので、一肌脱がせていただきます」

「手間をかければ綺麗な花が咲くとは限らんがね。期末テストを楽しみにしてるよ」

男性教諭が消えてからたつぷり三十秒はおいてから、丈司は小さくため息をついた。

「負けておいてから手持ちのジョーカーをちらつかせるとは。食えないお人だ」

丈司を上回る上背。立派なガタイにこれまた立派な顎髭、見た目からは二十代後半と言われても説得力がないが、実際新任に毛の生えたようなものはずだ。

しかし、あの狩谷大はこの学校の教師の中では一番物事が見えている人物である。少なくとも丈司はそう評している。

こんな若造に鋭く突っ込まれても感情的にならない。プライドよりも実をとる事に躊躇無い。とにかくこちらの調子に引っ張り込みにくいという点で、実にやりにくい相手だった。校長よりよほど手強い。

あんな人物がどうしてこんなところで高校教師などやっているのやら。

まあ、お互い様だろうが。

つまらない感慨にふけていても時間の無駄というもの。

胸ポケットからシックな黒の携帯電話を取り出して短文のメールを打ち終えると、丈司は再び事務仕事に没頭を始めた。

二時間後。

「失礼します」

生徒会室の引き戸がわずかに引かれる。

「入りたまえ」

入室してきたのは一人の少女。

女子としてはかなり高い身長。すっと伸びた背筋。

控えめで楚楚とした振る舞いに、丁寧かつ流麗な所作。

修道服をモチーフにした黒主体のワンピースの制服がまた、清廉さを強調している。

完璧に整った容姿は凜然として冷たささえ帯びて見え、それこそ天使か何かを彷彿させる。

「お疲れさまです、先輩」

澄んだ明るい声。

丈司の姿を認めた途端、少女はふにゃと相好を崩した。安堵の笑みと言ってもいい。

と同時に、冷たい印象は急激に影を潜め、明るく快活そうな印象が浮かび上がる。

「そういう君は相変わらずツヤツヤしてるな、佐倉君。とても連日の補習中とは思えないぞ」

普通の神経の持ち主であれば、すこしぐらいは堪えるはずだ。

精神的なストレスは肉体に影響を及ぼすもの。

しかし彼女、佐倉明日香はやつれるどころか、その容姿に一筋の衰えもない。

肌の色つやも良く、大きな赤のリボンでポニーテールに結った漆黒の長髪もまた艶やか。コンディションは絶好調に見える。

もっとも、彼女はいつでも絶好調で、不調になるのは回りにい

る者ばかりなのだが。

「今日も二時間みっちりです。ちょっとくたびれました」

長テーブル上に鞆を置くと、パイプ椅子にべたんと腰掛ける。

「そう来ると思ったよ」

かわって丈司の方が席を立った。

「あ、申し訳ありません。お茶なら私が、きゃっ！」

佐倉君は慌てて立ち上がろうとした拍子にパイプ椅子をひっくり返した。

まあこの程度なら日常茶飯事。むしろこれで済んだのは幸運だった。

「落ち着いて。ゆっくり優雅に、を心がけたまえ。お茶は僕がやった方がいいだろう」

その方が早いし安全だ。しかも飲用にたえる紅茶になるだろう。彼女は相手に不器用だ。

オブラートに包んでさらに衣を着せてみてもこの辺が限度だろう。箸にも棒にもかからない、と言った方が真実に近い。

「生徒会長に雑用をさせてしまうなんて」

と、佐倉君は恐縮するが、一挙手一投足が危なっかしい彼女を見守るよりは、全部自分でやる方がはるかに気が楽なのだ。

ティーポットは前もって温めておき、熱湯を注ぎ、さらに蓋をして温度低下を防ぐ。カップに茶を注いでテーブルに運ぶ。

熱湯、そして割れ物の関与、十分に複雑な工程。これを彼女に任せるなど、考えるだに恐ろしい。

猫舌の佐倉君の分には前もってミルクを入れておく。角砂糖を二つ入れてティースプーンでかき混ぜる。

自分の分はストレートで楽しむことにする。

安物のティーバッグでも正しいやり方を守って煎ればそこその味になるものだ。逆にいくら高い茶葉でも誰かさんの手にかかるのと到底紅茶とは言えないものになってしまう。

「今日は羊羹しかないが、食べるかい？」

頭を使った後にはブドウ糖の補給が必要だ。低血糖でまともに脳が働くはずもない。

「はい、いただきます」

こういうとき素直なのは彼女の美点だ。副会長あたりなら「何企んでるんです？ そんなに私を太らせたいんですか？」とか言い出しかねない。

それを実際、佐倉君は見た目にそぐわず結構よく食べる。学生会室のロッカーや冷蔵庫には彼女持参のお菓子が入っていることが多い（転倒とかされると面倒なのでケーキ類の持参は禁止したが）。それでなおプロポーションを維持できているのは、無駄な動きの多さと脳細胞の無駄なアイドリングの結果なのかもしれない。

丁寧羊羹を切っては口に運んでいるが、切ろうとしては何度もやり直している割には平行になっていないし、厚みもバラバラで切り口も歪んでいる。時折羊羹ナイフで自分の口元をつつついてはびくつとする。失敗に気づかれていないかとこっそり様子をうかがったりもする。

彼女の行動は一見優雅だが、子細に見るといかにも小動物チックなところが散見される。もしかして平熱がやたら高くて脈も速かったりするかもしれない。

「どうなさったんですか？」

思わず苦笑を漏らしてしまっていたようだ。

19

「ははあ、分かりました、苦かったんですね？　ちゃんと砂糖入れないから」

一見クールな美人系で仕草も洗練されているように見えるが、性格は明朗快活、不器用で隙が多くてかなり子供っぽい。こういうところが同性からの点が辛くならない原因なのかもしれない。彼女が困っていると大抵はすぐに助けが入るし、その助け主は上級生の女生徒である事が多い気がする。

「ああ、失敗した。僕も君に習って砂糖を入れる事にしよう」

「会長さんでも失敗するんですね、ふふふ」

普通なら少しは気分を害するところだが、彼女に掛かると、そういうことにしておこうという気にさせられる。

紅茶を飲み終えた佐倉君が席を立て流し台に向かったので、すかさず斜め後ろに続く

「あら？」

慌てず騒がずずっと手を伸ばし、彼女の左手を離れたソーサーを空中でキャッチ。

「次からは湯飲みを用意しておくでしょう。君には両手持ちの方が向いていそうだ」

ここは優雅さより安全性を優先すべきだろう。

「まあ、素早いですね」

「起こりうる状況を予測さえしていれば瞬間的に反応できるものだよ」

「私、そういうの苦手で。予定とか、未来とか。今この瞬間を生きるだけでいいじゃないですか」

と、見事な浮世離れっぷり。それでこそサクラ姫。

「否定はしないが、自分で言わないように」

「真実から目を背けてもしようがないです。人間には向き不向きというものがありますから、出来ないことはできる人にお任せするようにしているんです」

出来ること、ほとんど無いようだが。

とは思っても口にしない。

「ですから本当に感謝してなんですよ。いつもいつもフォローしていただいて。おかげさまで平和に楽しく過ごしていられます」

彼女はそう言うが、この学校でならまあまあ上手いことやれていたのではなからうかと丈司は思う。

浅葱谷あさぎがたにを選んだのは良い選択だ。彼女の父親が自らの力の及ぶ範囲においたというだけではないだろう。

キリスト教系だからといって信心深い生徒が揃っているというわけではないが、いい意味でのんびりした雰囲気この高校である。人なつっこく穏和な彼女に悪印象を覚える者は少なく、事実お姫様呼ばわりされて親しまれているわけで。佐倉君の天然っぷりをカバーこそすれ、つけ込んで害を為そうなどと考える不埒者はそうそう居ないだろう。

だが校外では別だ。佐倉君の恵まれた家庭環境や容姿にあの無防備さが加われば、犯罪者（含予備軍）の食指を刺激するに十分すぎる。

こうしてのほんとと微笑んでのを見ると、先入観抜きで見てもいかに隙だらけだ。

「君は悩みとか少なそうだな」

つい口から出てしまった。まったく、この娘は他人の緊張感まで削いでくれる。

「そんなことはありません」

と、さも心外そうにぷくーとふくれてみせる。

「再来年のことを考えると不安で不安で。会長さんが卒業なさってしまったら、どうやって生活していけばいいのかと」

「それはまた極端な」

ここまで依存されているというのはある意味光栄とも言えるが、しかし彼女にとって最良であったかどうかはわからない。

「あ、一つ提案があるのですけど」

佐倉君がとびっきりのいい顔で、ぽんと手を打つ。何か突拍子もない事を思いついたとみえる。

「念のため言うておくが、留年するつもりはない」

「そうですか」

先回りしての反撃に、たちまちしおれる。この娘は見た目の落ち着いた印象より遙かに浮き沈みが大きい。

「すっかり忘れているようだが一応僕は苦学生だ。留年して奨学金をカットされてしまうわけにはいくまいよ」

「そうですね、失礼しました、でも、困りますね」

本気で困っている様子の彼女を前に、丈司もまたらしくもなく困惑していた。

これまでであえて意識しないようにはしていたが、狩谷教諭の指摘のように、過保護すぎたのだろうか。

才能にあふれ困難らしい困難を感じたことがない反面、生きることにまるで興味を持てなかった彼に対し、師は行動規範を他に求めよと宣わった。

丈司が選んだのは、同じ立場の学生として最も近くから彼女を保護すること。実にシンプルであり当面の行動規範として申し分なかった。

すなわち、今の彼女は丈司が生きている意味そのものであり。この任務を成し遂げることは同時に、目的を与えてくれた彼女に報いる方法でもある。

だがその彼の存在こそが、彼女の自立心をとことん阻害し、わずか半年かそこで彼なくして立ちゆかないところまで追い込んでしまった可能性がある。

ならば、やはり方法の一つだ。

「では、結婚するというのはどうだろうか？」

単刀直入に口にしてみた。

「既婚だと留年しても奨学金が出るんですか？」

……彼女相手でも話が飛びすぎたか。

「僕と佐倉君の話だ。そうすれば君をフォローするのになんの遠慮もあるまい」

さすがにこれは笑いとばされるだろうなとは予想していたが、「それは、会長さんにもらっていただけのなら願ったり叶ったりですけれど」

こくこくと頷く。ものすごくあっさり承諾された。

これは何も考えてないな。幼稚園児の結婚の約束と大差ない。

「でも、本当によろしいんですか？」

一拍おいて、佐倉君は小首をかしげ、言った。

少しは普通に頭をつかってくれていた事にほっとする。

「私、全然役に立ちませんよ。きっと会長さんの足引っ張ります。間違いありません」

なんたる危うさ。

一瞬たりとも冗談である可能性を疑わないんだな、この娘は。「いや、使えないのがいいんだ」

我ながら酷いことを言ってる気がするが。

「それはつまり、間違いない自分を必要としてくれるという事だろう。あなたなしでは生きていけない、と言うのは十分な殺し文句だと思うがね」

「その使えないダメ娘を少しでも哀れに思ってくださいるのなら、ぜひとも。私なんかをお嫁さんにしてくれる奇特な方が会長さんの他にいるとは思えません」

後になってみれば、意外にそうでもない事が発覚するまでにはそれほど時間は掛からないのだが。

「では今後ともよろしく頼む」

と、右手を差し出すと、

「こちらこそっ！」

彼女は両手で丈司の手を取り、力強く何度もぶんぶん振った。

「契約成立だな」

「はい、ふふふ」

安心したのか、いっそうゆるんでるな。にへらーという擬音まで聞こえてきそう。これは彼女のシンパには見せられまい。

「よろしい。ならば特訓だ」

「なんて仰いました？」

ぼーっとしていてもさすがにこれは引かかるとだ。

「考えてもみたまえ。未成年の婚姻には両親の許可が必要だ。うちの後見人は何とでもなるが、佐倉君のご両親の説得は簡単とは言えないだろう。成功したとしてもちゃんと卒業してからにしろと条件をつけられるのは想像に難くない」

「はあ」

察しが悪い。

「このままの成績だと進級も危ないと思うが、それでも留年を続けて二十歳まで粘ったとしよう。さて、水泳の授業を想像してみるといい」

クラスで一番大人っぽい（というか法的に大人でしかも人妻）しっとりした美人が、大きな名札を縫いつけた紺のスクール水着を身につけて、一人で大かき&居残り。

「いささか厳しくはないかな。せめてともに泳げるようになっていれば何だが」

「そ、それは、ちょっと」

さすがの佐倉君も眉をひそめる。

「わかりました。頑張ります。でも今日は水着持ってきてませんよ」

「そういう特訓じゃない」

前向きなのか後ろ向きなのか。

「水泳、教えていただけなのですか？」

しゅんとしおれる。

「古式で良ければ教えられる事もないがね、対症療法よりは根本的解決だろう。まずは成績を何とかしないか」

ぼむ、と手を打つ佐倉君。

「なるほど。それで繋がりました。だから特訓なんですな」

本当に察しが悪い。

「申し訳ありません、鈍くて。でも一生懸命頑張りますから見捨てないでくださいね」

さっきまでへばっていたのに、その気になっている。

「では最初に一つだけ教えておこうか。ペーパーテストなんてのは半分以上がコミュニケーション能力で決まる。最小限の公式を

覚えているなら、出題者の意図が分かれば八割は解けたようなものだ。何をテストするために作られた問題かを考えてみるといい」

「はいっ！」

返事はいいのだ。

自覚もやる気もある。ただ、壊滅的に要領が悪い。

前途多難であった。

「ローラ」

澄んだ柔らかい声とともに、優しく肩を揺すられる。

狸寝入りを決め込んだが、遠慮がちな調子とは裏腹に、声の主にはあきらめようという気配まるでない。

「ローラ、ローラ」

ゆさゆさ。

「ローラ、ローラ、ローラっ」

「あーもう、ヒデキがおまえは!？」

タイミングをはかり、はじけるような勢いで上体を起こす。

「いいえ、もしかして人違いしていらっしやいませんか？」

完璧に狙って放った筈の頭突きを最低限のスウェーで軽々かわしておいて、慌てず騒がず落ち着いたもの。

「あのな……」

「寝ていたかしら？ ごめんね？」

こいつ、絶対悪いと思ってない。

ふてくされている、という意思表示をくみ取ってくれようという意思が感じられない。

頭の回転の速いこいつのこと。きっと分かかって無視している

のだろう。

保健室のベッドにあぐらをかき、手強いクラスメイトと対峙した。

気合い負けしないようにきつと眉間に力を込めて相手を見据える。

手近に鏡はないが、さぞや機嫌が悪そうに見えるに違いない(実際そうなのだが)。

同年代の平均より頭半分以上高い身長。彫りの深い顔立ちも、細かくウェーブの掛かった淡い栗色の髪も日本人離れしており、そこにいるだけで相手を気後れさせてしまうような外見だ。両親によれば曾祖母がヨーロッパの貴族の血をひいていて何とかで、いわゆる隔世遺伝とかいうやつだろう。

正直自分の容姿は好きじゃないし、名乗ったら名乗ったで「変わってるけどお似合い」と反応される事がほとんどだ。

狩谷楼蘭かりやろうらんというぶつとんだ名前の由来は意外に単純。

脳天気な母親が近所に住む親友の娘の名前とおそろいにしてみたとかだが(セーラにローラとはおふざけも甚だしい)、向こう

は紫城の生徒会長という才媛でこっちは落ちこぼれ一歩手前。

一方、目の前のなれなれしいのは三条樹菜さんじょうじゅな・リン・ダーナというやたら長い名前の持ち主。親しい者相手には「じゅら」と名乗っているが、これまたよく分からないセンスだ。

生徒会長秘書(書記だっけ？ どうでもいいけど)のお姫様とも遜色ないしとりとした美しさを備えた、線の細い小柄な少女。

実は母親がフランス人だとかいうから釈然としない。

こっちはちょっと混ざってるだけでクドさばかりが目立った軽

薄な容姿だったのに、片やハーフのくせに端麗和風、清純可憐、かつミステリアスな雰囲気まで備えている。顔小さいわウエスト細いわ、黒の直毛で見た目いかにも大和撫子なのに深緑の瞳なんて反則じゃないかと。

こころへんねたましく感じてしまうのは年頃の女子にとっては自然なことだから、神様（私見だが中年男性に一〇〇〇ソマリアシリング）は寛容な心で許してほしいところ。

実際、こころも悪目立ちしてしまうと生活上も不便だ。パーマ髪いだの脱色疑いだのと、山科のオヤジに何度しょつ引かれたことか。いっぺん家系図まで引つ張り出してきて徹底的に説明したってのに、あの生徒指導教師には学習能力が無いのかと。挙げ句が天パー証明書不携帯呼ばわりだから失礼極まる。

「なあに、どうしたの？」

のほほんと尋ねてくるじゅら、

生徒指導室常連のあたしと対照的に、こいつは不思議と目をつけれられない。

たとえば真つ赤な蝶のバレッタ、あたしがつけていれば間違いない校則違反と判断されるだろうが、じゅらの場合は完全にスルーされている。

容姿も成績も完璧なくせに、必要とあらば目立たず行動できるしとやかな立ち居振る舞いもある意味でうまく注目をかわす術なのだろうか。教師にとってみれば何の変哲もない優等生。つまりは安全牌だから、必要以上に彼らの興味を引くこともない。

性格には幾分以上に問題があるが、クラスメイトとのつきあいは少なくとも表面上無難にこなしているようだ。

態度が露骨におかしいのはあたしに対してだけ。

いちいちあたしの事情にくちばしを突っ込んで、状況をぐちゃぐちゃにしてくれる。そのくせ責任はこっちに押しつけて素知らぬ顔。

そう、今日もまた。

「せっかく、せっかくいい感じで微妙に体調が悪かったのに。古生くんと一緒にいられるまたとない機会を！」

自分で言っておかしな表現だが、まさにそれぐらい貴重なチャンスだった。

古生燕雨君はクラスの保健委員。本来なら付き添いは彼の仕事だったはずなのだ。

それを、じゅらの奴めが余計なお節介を。

儂げな美少女に包み込むように両手を握られ、上目遣いで「おねがい」されては、男子に断れるはずもない。どころか、古生くんは二つ返事でオーケーだ。認めたくはないが、彼はじゅらに気があるのかもしれないとの疑惑が膨らむ。

自分の容姿に関心を持たなくせに、影響力を知悉した上でこそぞという時に利用するというのは、同性からしてみると面白くないものだ。

それでも、異性の気を引くこと自体に興味を持っているわけなし、金品をねだるわけなし、教師にこびを売って成績に手心を加えてもらおうとするでなし。目的不明で気合いの入れどころがどこかずれているってところが、他の女子からの悪意の対象とならない理由かもしれない。

「だって私、ローラの親友だもの」

「親友名乗るなら気ぐらい利かせろ」

つかみかかるが、これまた紙一重でかわされる。

「♪」

部活動にこそ入っていないものの運動神経では人後に落ちない自信があるあたしだが、じゅらに対してだけは分が悪い事に加え、現在は本調子にほど遠い。

「にゃろ！」

すばしこいのなんの。

つかまるどころか易々とは身体に触れさせない。

あたしが動くときしぎしばたばたと布団やベッドが鳴るというのに、じゅらは音も立てない。その身のこなしは近所の性悪黒猫を彷彿させる。

こっちは結構本気になってきているというのに、彼女は腰掛けた体勢のままで巧みに攻撃をかわし、反らし、余裕どころか嬉しそうな表情を浮かべていたり。

「頭きた！」

ばったんばったん。すいすいひょいひょい。

「千載一遇のチャンスだったのに！」

「そこで仮病を使ったりできないのがローラのいいところだね」

「やかましいー！」

そんな器用で大胆な真似が出来るようならとうの昔に告白している。

「はいーそこまで」

カーテン越しに手を叩く音。

「ローラちゃん、できたらもう少しお静かにね」

間延びした声のお姉さん。

「サチ姉!？」

やべ。騒ぎすぎた。

カーテンの隙間からひょいと顔を出したのは、白衣のお姉さん。叱っている立場のはずなのに、目を細めてにこにこしている。

「残念ながら保健室はそういう施設ではありませんよ。禁断の関係も結構ですけど、もう少し人目をばかってくださいね？」

「きっ!？」

むしろ同性愛容認発言。仮にもキリスト教系高校の養護教諭の発言としては問題ある気がする。

「ちっ、違います! そういうんじゃなくて!」

「お言葉ですが、私は至ってノーマルです。攻め受けかけ算の世界には興味ありません」

しっかり語ってるぞおい。

でもちょっと安心した。

あんまりにもまとわりついてくるので、もしやそっち系の人ではないかと密かに恐れていたりもしたのだ。

同性から見てもあれだけ綺麗だし、たまに(本当にたまに!)ふらっといきそうになったりもするので、その可能性についてはあえて考えないようにしていた。取り越し苦労(自意識過剰ともいうか)で大変結構。

「確かにローラのこととは好きですが、わたしがそういう意味で愛してるのは兄さんだけですから」

前言撤回。ちっともノーマルじゃない!

どこまで本気かわからんな、この娘は。

「なあんだ。ローラちゃんはきつと受けだと思ってたのに」

この人は……きつと全部本気なんだろうな。

生徒会のサクラ姫なみに浮世離れた言動のこの養護教諭。顔

立ちも表情も柔らかく、色白で胸おっきくて、栗色の髪はふっくらとカール。性格だけでなく見た目もふわんふわんの綿菓子のように。ただ居るだけで周囲の時間を減速させてしまうような幸せ、という言葉を実感したような人物。

その名もずばり幸子さんという、楼蘭の親戚筋である狩谷教論（ヒゲジャンボ）の奥さんに当たる。いかにもアンバランスな組み合わせだと思うが、やたらと懐の広いサチ姉なら最初に告白してきた相手を問答無用で受け入れたとしても不思議はない気がする。

「それ、分かる気がします。ローラって見た目によらず鶏さんな性格だものね」

「……あんたらなあ」

お嬢風のわりに口の悪い生き物と、名が体を表しまくっているハッピーゴーラッキー生物が好き勝手なことを言っている。

確かにその通りなのが余計に腹立つのだ。

どう言い返せばこいつらをぎゃふんと言わせられるのだろう、と考えていたところに、

「サチコさまいらっしやいますか？ 一年A組クラス委員の折部です。でこぼこコンビ引き取りにきました」

「まあ、いらっしやい。最近ご無沙汰ね」

その挨拶は保健室の主的にありなのだろうか？

また別の失礼なのが顔を出した。

「なんだ、織絵か」

体格は高一女子としてはごく平均的。飾り気のないヘアピンで前髪を上げたショートカットといいつつ甲縁の眼鏡といい、地味

というより正直渋い。

「ナンダでもガイラでもない。しゃべる元気があんならいつまでもベッド占拠しないで、ちゃんと帰って寝なさいよ」

彼女言うところのガイラの正体はさておき。

この愛想の無いデコメガネは折部織絵^{おりべおりえ}。うちのクラス委員にしてわびさびクイーン。うちの生徒らしからぬ（禿蕈）熱心な切支丹でもあり、茶道部員、B級映画マニアでアニメマニアでラノベ好きという顔もある。

「大丈夫、心配ないわ。私がきてからこの方、一度もベッドが埋まった試しはないから」

「それは主のお恵みとサチコさまの御仁徳の賜でしょう。でも、百年兵を養うは一日のため、という言葉もあります。病人用のベッドは空けておくものです」

確かに、サチ姉のしやわせ光線に中てられるとちょっとぐらいの体調不良なら楽になった気がするというのは皆が言っていること。

気がするだけでうちに帰るとむしろ悪化するパターンが多いんだが。

しかし織絵さんや、それは女子高生の引く言葉じゃないだろう。「ではローラは私が送りますね」

じゅらはさも当然のように言い出す。

おいおい。

「逆方向だろ」

「不許可です。若い娘が日が落ちてから一人で帰るなんて軽率よ」さすが織絵、言うことが堅い。しかも偉そう。

「こう見えても私、結構強いんですよ。不埒な輩には必殺自然石

割りをお見舞いして差し上げますから」

と、じゅらはフロントダブルバイセプスのポーズをとってみせるが、当然力こぶなんぞミミリたりとも盛り上がらないわけで。説得力皆無。

すばしこいのは知ってるが、さすがに現役ラグビー選手な変態とかに追っかけられたらまずかるう。いや、別にラグビーに含むところがあるわけじゃないけどね。

ああ、そういえば、

「なら兄貴に迎えに来てもらおうというのはどうだ？ 溺愛されてるんだろ？」

「それはだめ。受け持ち患者はっぼり出してでも来ちゃうんだもの」

あー、珠大病院の研修医だっけか。それにしても嬉しそうに言うな、ブラコンめ。

「わかった、仕方ない。小暮さんをお願いするわ」

とか言ってる内に織絵は勝手に自己完結。まさに独善的委員長体質だな。

小暮といえばフェンシング部のエースの小暮潔のことだろう。

「ああ小暮さん、折部です。ええ、エスコート任務」

携帯電話口でぶっきらぼうに話す直角女。

今でも信じられない、いや、認めたくないが、あのすかっとなやか少年がこの偏屈女の彼氏だったりするから世の中という奴はわからないもんだ。

「護衛対象は淑女一名とあばずれ一名」

むかつ#

わざとらしくこちらに聞こえるように話しているが、電話の会

話に突っ込むわけにも行かない。織絵はこういう手の込んだ方法であたしをいじってくれる。

「では部活終了次第保健室までお願い。一八〇時以降は会合点を校門に変更しますから。復唱よろしいですか？ ではよろしく」しかし色気ねえ会話だねえ。

そもそも、彼氏呼びつけて友達の足代わりに使うってのはアリなのかね？

いやあ、生真面目な織絵のことだから、人前ではわざとそっけない態度をとってるのかもしれないな。

これで意外と二人つきりだとデレまくりだったり。と言っておいてなんだが、到底想像できん。

「サチコ様、申し訳ありません。六時にはお暇しますので」

「ええ、私も大さん待ちだし大丈夫……って、ええと？ 大さんに何か言われてたような……」

サチ姉はあたし達三人の顔を順に見回し、

「あーっ、そうそう、思い出した」

ぼん。と手を打つ。

「いつのまにか三人揃ってるじゃない。探さなくて済んじゃった。ついてるわ、私」

しょっちゅうこんな事言ってるんだよな。サチ姉の半分はラッキーで出ています。

「で、今日は何を思い出されたんです」

いつも忘れてる、と言外に言ってるじゅら。かわいい顔して結構きつい。

そこらへんは気にもせず（気付かず？）、サチ姉は手を合わせたまま何度もうなずく。

「ええとね、貴女たちにお願ひがあるの。生徒会長さんと書記さんが上手くいくように手を貸してあげていただけませんか？」

これまた予想の斜め上を行く依頼内容。

会長と書記っていうと、

アレ（聖者様）、と

アレ（サクラ姫）、か。

「上手く行っていないのか、あいつら」

あたしが見る限りは、少なくとも佐倉お嬢は会長べったりに見えるし、さしもの冷血会長もあの頼りなさを見て見ぬふりはできなかったと見え、ずいぶんと気にかけてる節がある。

校内で一、二を争うノーブル系のお二人さんがこのままお似合いカップル一直線かと、半ば微笑ましく半ば腹立たしく思ってたものだが。

「今のところうまくいってるから、もっと上手くいってもらいたいの」

「うーん、教師がそんなんけしかけていいのかよ」

サチ姉的にはOKの範疇か。正直言っちゃっても先生ぼくないしなこの人。

「大さ^{おかし}んからの伝言だから、詳しくはわからないのだけど。私も上手く行ったらいいなって思うわ」

ほらなんも考えてない。

「うーん」

一方織絵は腕組みして唸っている。やっぱ直角女的にはNGか。

「なるほど、それナイスです」

「構成無私の完璧超人と、綺麗でおしとやかでしかも頼りないお

嬢様。実に健全かつ燃える展開です。アリです」

一見冷静に話してるように見えるが、眼鏡の奥の目がうっとりしてる。

確かにいかにも出来過ぎで物語的で織絵好みだ。

「じゃあ、あたしたちや二人を応援すればいいのか？」

「応援じゃなくて、支援かしら」

と、サチ姉は微妙なことを言う。

「出来れば、目立たないように陰からひっそりと。会長さんにも秘密で」

「それって陰謀ですね？」

そこでなぜ喜ぶ、じゅら。

「こちらからぜひお願いします」

直角女はサチ姉の手をがっしり握っている。あー完全にやる気だ。

あたしの意見はついに尋ねられもしなかったが、でもどうせ参加させられるのだ。

見た目の迫力で勘違いされがちだが、あたしや見た目にそぐわず気弱のヘタレなのだ。ひーん。

娘が「会っていただきたい方がいるんです！」なんて言い出したときには、一瞬で目の前が暗転した。

「生徒会でいつもお世話になってる会長さんをご招待したいんです」

で、胸をなで下ろし。

結果、この状況だ。

期せずして、娘の彼氏と差し向かい。

胃に穴が開きそうなシチュエーション。

しかも。

「コーヒーと紅茶、どちらをお持ちしましょうか」

何だこれは。

「紅茶を。もしあればディンブラをお願いしたい」

「かしこまりました」

先ほどから目の前に座ってえらい存在感を放っているこいつは一体何者だ。

ところどころ赤のポイントの入った詰め襟はうちの学校の制服そのものだが。着こなしに一分の崩しも隙もない。

上背と清潔感を感じさせる容姿が相まってまるで学生服のモデルか何かに見えるが、それにしても表情に愛想がなさ過ぎる。

とはいえ緊張しているわけではない。萎縮するどころか、あっさりと屋敷にとけ込み、いとも自然にメイドを使っている。

「さすがは佐倉理事のお宅です。ティーセットも茶葉も申し分ない。この扇戸丈司、存分に堪能させていただきました」

「あ、ああ、そりゃ結構だな」

彼女の父親に会う少年ってのはこういうものか？

態度は立派を遙かに通り越して威風堂々。

学生らしからぬ貫禄にながされたか、気がつけば自然と差し向かい状態での会話になっていた。

「本日お時間をいただきました用向きは他でもありません」

「う、うむ、続けたまえ」

来た。ついに来るべきものが来た。

一度言ってみたかったお約束の台詞を脳内でリハーサルしつつ、お約束の台詞を聞き流す。

「詳細な経緯については割愛申し上げますが、先日来断続的に継続しておりましたご息女との直接協議の結果、主として物理的精神的安全保障の観点から恒久的契約への強化を前提とした安定した両者間関係の構築をはかる方向で最終合意に達した事を報告させていただきます」

「帰りましたまへ、貴様のようなこの馬の骨ともしれぬ男に娘はやれん！」

努めて激昂した表情をつくり、立ち上がったてテーブルを両手で叩いてから、首をかしげる羽目になった。

「……ちょっと待て、今なんと？」

「お父様……」

娘の視線が痛い。

「ちゃんと話を聞きもしないで適当に答えないでください。わたしの一生が掛かった一大事なんですから」

「すまん」

「会長さんも、宇宙語は使わずに私にも分かるように話してくださいませんか？」

「全部立派な日本語なのだがね」

指で眼鏡のフレームを押し上げ、少年は今度はさらりと要旨だけを語った。

「ぶっちゃけますと、『お嬢さんと話し合って、結婚を前提にお付き合いますことにしましたのでよろしく』、となります。これでいいかな、佐倉くん？」

「はいばっちりです。今度はお父様もお解りですよね？」

「あー、ああ」

ということは、さっきのでリアクションで正解ではないか。

しかし一度緊張感を削がれてしまっている上に、タイミングを逸してしまった。今更興奮してみせるには無理があるだろう。

機先を制するのには失敗した。あとは素で接するしかあるまい。先ほどの台詞が計算ずくなら、私はまんまと一杯食わされたという事になる。彼は門前払いを決めていた相手を冷静な交渉のテーブルに着かせる事に成功したわけだ。

「報告は確かに聞かせてもらった。それで、私に何を望む？ 私が反対したらどうするね？」

「円満解決を」

「ほう？」

高校生の口から出るにはそぐわぬ単語に興味をそそられる。

「反対されたところで無茶をしでかすつもりはありません。何年か待つだけです。ただ、今の彼女を形作る一部は間違いないくご両親でしょうし、家を捨てさせてしまつては彼女は彼女でなくなるでしょう。ですから、理事にはただ祝福をいただきたいのです」脅迫だなこれは。

彼の言はある意味逆説でもある。

自分は既に明日香の一部となっており、自分を遠ざければ明日香は家族を捨てると同等の傷を負う、という自負だ。

「ここまで彼女と関わってしまった今となつては、自分に係累がないのは幸いでした。身の振り方は一存で決められます」

彼は学内では有名人だ。おそろしく優秀な孤児の奨学生が生徒会長を務めているという話は理事の耳にも届いている。

「ふむ、君を受け入れるとして、佐倉家側に何かメリットがある

かね？ 明日香なら引く手数多だ。今後、我が社の利になる相手と縁を繋ぐことも出来よう」

少しかへこむかと思いきや、少年は肩をすくめた。

「これは、彼女のお父上に対する侮辱を訂正していただく必要がありますね」

「何だと？」

それは私のことだ。

何が言いたい？

「お子さんの前で悪ぶられるのはお控えいただきたい。理事が娘の幸せより会社を優先するような方であれば、こんなお嬢さんには育ちませんよ」

なるほど違うない。

さすがに明日香のことを良く理解しているようだ。

「では、娘が高校に入っても一向に成長せんのは君のせいかね？」

「肯定です。期せずしてその機会を奪ってしまった以上、彼女を見捨てて知らぬ存ぜぬを決め込むには忍びない」

「あくまでも責任のためと？」

「そうそう、肝心なことを言い忘れておりました。佐倉さんに好意を抱かない人間はそうは居ません。意外ではありますが、自分も例外ではなかったという事でしよう」

と、優しい眼差しで娘を見やりながらも、台詞はまるで他人事だ。

対する娘の方は少年のそばに立ってなんとも嬉しそうに笑っている。

見た目のバランスは確かにお似合いだが、娘と少年の醸し出す雰囲気は正直恋人同士にはとても見えない。まるで保護者と幼い

少女だ。

実際、精神年齢で言えばそんなところかもしれない。

「なるほど。な」

実に興味深い少年だった。

娘もまた面白い男に興味を持ったものだ。私の娘だけあって、いかにもあぶなっかしくても人を見る目はあったということか。

冷静で利発でユーモアも解し、紳士的な態度と大人びた責任感も備えている。さらに、成績も優秀で腕も立つというから、教師であれば将来性について太鼓判を与えるだろう。

しかし、父親が娘の一生を託す相手としてはどうだろうか。優秀な学生イコール優秀な社会人とは言えないし、二十歳過ぎたらただの人という言葉もある。

「立派な男だ。高校生の娘の交際相手としては申し分ない」

「恐縮です」

ちっとも恐縮していない表情でいけしゃあしゃあと言う。こういうところも弱気よりもよっぽど好ましい。

個人的には大変気に入った。ぜひうちの会社で働いてもらいたいとも思うし、そのように働きかける心づもりだ。

それでもやはり、父親という立場としては、そう簡単に全面肯定するわけにはいかない。

「しかしだ。娘を託す相手には、わずかな不安要素もあってはならないのだよ」

「自分も同意見です。だからこそ名乗りを上げたとも言えるのですが」

他人任せには出来ない、と言う純粹さはやはり好ましいとは思えるのだが。

「現時点で君に賭けるのは拙速に過ぎる、と考えるのも分かってもらえるな」

「当然ですね」

切り札を持ち出す事にする。

「これの未来が心配というのは私も同じでな。私なりにこれを託せる相手を探していたのだよ。これはという青年を見つけて、いい返事をもらったところだ。卒業次第、結婚と言うことで話がっている」

「ええ？ そんなの聞いてませんよ!？」

それはそうだろう。最初から言っていない。

「お前に恋愛なんて器用な真似が出来るとは想定外だったからな」

「賢明ですね」

深々と頷いて同意を示す。

「ひどいですよ、会長さんまで」

これ、本当に娘の彼氏なのか？

「珠坂大学医学部に籍を置きながらIT系ベンチャーを起こして二年で上場まで持っていた俊才でな。野心と才能にあふれる人物で、会社は急成長中。既に相当の人脈も築いている」

「なるほど」

そこまで聞いても動じた様子はない。現実感がないのか、それとも、自信があるのか。

「ああ、言っておくがいい男だぞ。私には劣るが君とはいいい勝負だろう」

「見た目で会長さんを選んだ訳じゃありませんもの。お気を落とされないでくださいね」

「そりやどうも、光栄だ」

それはフォローになってないぞ、娘よ。

「それはさておき、父親としては実績を示している者を選ばざるを得ない。特に経済力という要素は不可欠だね。さてどうするね、扇戸君？」

おそらくは、進んでいる話を保留にして時間をくれ、と言ってくるだろう。

明日香の卒業までの勝負、というリミットには説得力があるし、それまでなら何とか引き延ばせぬでもない。

現時点では嘉納君への対抗としてはまだまだ弱い、今現実には娘のそばにいる人間であることは確かであり、ある程度の脅威を感じさせることはできるはずだ。

それに、この若者がどう答え、どう動くか、個人的に興味があった。

器量として嘉納君に大きく劣るようには見えない。数年あればそれなりの将来性を示すことも出来るだろう。最終的にどこまで嘉納君に迫れるか見物だ。

しかしまあ、今は見せ金としての役割さえ果たしてくれればいい。

優秀な若者が競い合う切磋琢磨する。利こそあれ損にはならない。彼にとっても、娘にとっても。

「会長さんも実績を示してくださいすよ、ね？」

「ではそのようにしましょう、お姫様」

扇戸少年は立ち上がると、不適に笑ってみせた。

「三ヶ月いただければ証を立ててご覧に入れますよ。ではお暇します」

「何だあ？」

「どうした、嘉納」

夕方のカンファレンス終了後、研修医室にて。

メールを確認した嘉納君があきた調子でぼやくと、三条くんが相変わらず興味なさそうな調子で一応話を合わせた。

「セレブ様の気まぐれにも困ったもんだ」

「お前もその一員だろうに」

嘉納くんの貴族的なハンサム顔がちまちま野獣めいた表情へと変貌する。

「俺なぞ成り上がりの端くれにすぎんよ。いかに金を稼いでも目障りになれば潰される。本当の意味でこの国の中枢に食い込むには、それなりの血統との血の繋がりが必須なのさ」

「それではどこぞのマフィアと大差ないな」

対する三条君は淡々と。

「その通りだ、三条。この国の支配層は限られた身内以外を真に責任ある立場から遠ざける。才覚と努力だけでは中央に至らせてはもらえん」

「軽蔑しつつ羨んでいるように聞こえるが」

「まったく、身も蓋もない奴だな」

プライドの高い嘉納くんにとっては、ずけずけものを言う三条くんはさぞや煙たいと思いきや……不思議なほど彼に信頼を置き、相談相手にしているのだから不思議だ。

そういう私にしてもこんな無愛想シスコン男のどこらへんがそんなに好きなのか説明できないんだから、同じようなものかも

しれないけど。

「で、何をそんなに騒いでる」

「とある旧家のお嬢と縁談が進んでたんだが、突然保留にされちゃってな」

「ほう」

同級生の一大事を軽く流すなあ、三条君。

「その父親ってのが浅葱谷の理事の一人なんだが、ついこの間まで大乗り気だったくせに、もう一人有望な男を見つけたからそっちにもチャンスをやりたいとぬかしやがった。そして今日、本人が挑戦状を叩きつけてきたってわけさ」

「挑戦状？ また古風だな」

「例えだ例え。うちの株を一株だけ買って、ご丁寧に事務所に顔出して挨拶してったそうさ」

「何者なの？ ちょっと想像つかないんだけど」

主観的には三条君一択なんだけど、客観的にみると嘉納くんは相当にハイスペックだ。イケメンで会社持ち、インテリで頭が切れるのにワイルドさもある。同年代で対抗できる相手がそうそういるとは思えない。

たとえば大金持ちのお坊ちゃん……を有望とはあまり言わないか。

「それが笑わせる。お嬢の生徒会の先輩だよ」

「ちょっと待って。生徒会って？ なに、お相手って学生なの？」

「今浅葱谷高の一年だ」

ええ？

「妹の同級生じゃないか。なんだ、ロリコンか」

じゃあうちの弟ともタメか。

「うーん、三条君は人のこと言えないと思う」

「よその子供に色目を使う変態と一緒にしないでくれ。兄が妹を大切に思うのは当然だ」

「あー、それは、そうなんだけどね」

彼の場合いささか度が過ぎてると思う。

一時間ごとに安否確認メールってのはいくら何でも過保護すぎ。私のメールには一言しか返事返さなくせに。しかもパターン三つぐらいしかない。

彼女の私より妹さんの方を大事に思ってるのは間違いないだろう。儂げなイメージの超絶美少女だしね（中身はけっこうアレだけど）。

そもそも私が割り込んだようなものだし、私自身があの娘を好きだし、さらに結構借りもあるから、特に含むものはないんだけど。ねえ。

そんな人だから、こうして相手にしてもらえただけでも儲けものと思うべきなのだろう。

「なんにしても高一はちょっと無理があると思うよ、結婚なんてせめて卒業してからの話でしょ」

「今は婚約という看板だけで十分だ。反故にさえならなければ何年経けていてもかまわない」

「看板で」

そういうドライというか人を人とも思わない考え方はいかにも嘉納君らしい。

「向こうの懐事情的に話が進めやすかった相手だが、ほかに当てがない訳じゃない、と思っていたんだがな。気が変わった。ここまでやられて黙っているわけにはいくまいよ」

「相当老獪な人物のようだな。人の動かし方をよく心得ている」
直接は言わないが、これは三条君なりの忠告なんだろう。

プライドを刺激されてうまいこと退けないように追い込まれてしまったんじゃないだろうか。

「焚きつけられてるのは承知の上。存分に踊ってやるさ」

「弱った男だ」

「……そこまでして好きでもない相手と結婚したからなくても」

同級生ながらひどい男だとおもう。相手の父親ともども地獄に墮ちるべきだ。

うちの親父殿みたいに、いっぺんギッタンギッタンにとつちめてもらえないだろうか。

「好きでないと誰が言った」

「好きなのか？」

この単語にこれほど感情のこもらない二人も珍しい。

「言っておくが、家のことを知るより彼女に目をつけた方が先だ。どうせなら可愛い方がいいだろう？ 見た目は古生といい勝負だと思うぞ。確か写真が……」

古生は私のこと。フルネームは古生雁^{こしょうかり}観。本職のくせに町のヤンキーじみたセンスだが、きつと親父殿がたまたま手札見て思いついた名前だろうと確信している。弟は燕雨だったりするから、やっтерることに進歩がない。三条君はいい名前だと言ってくれたので結果オーライだけだ。

写真の方は見るまでもない。呼吸でもするように無意識に女の子をヨイショしてしまう嘉納君をして、「いい勝負」と言わせてしまう。つまり、美容に手間暇かけた上で可愛い方に入る、ってレベルの私じゃ及ばないのは明らかだ。

ほれ、とパスケースを突き出される。

「うわ」

そら見たことか。

すらっとした八頭身に大人っぽい雰囲気、ポニーテールの少女。赤いリボンが黒髪によく映えている。

登校中の隠し撮りくさい下手な写真だけど（どうやって手に入れたかは聞くまい）、おっそろしく綺麗な少女だというのは十分にわかる。

っていうか写真でこれって、実物ならひいき目なしに見てじゃちやんと甲乙つけがたい気がする。

もう何年かしてすっかり着飾ったらそれこそ傾国級じゃないかしら。二人とも同系の純和風美少女だし、さぞや見応えのある好一對になりそうだ。

「そうだな。妹には劣るが」

「おまえもたいがいひどい男だな」

三条君的には「妹さん」と「それ以外」の間には超えられない壁があるようで、彼はそれを隠そうともしない。ということ、この娘基準でいいところ行つてると認めてくれたのなら、相当の予断を含めてくれると解釈できるわけだ。

「ま、古生が幸せそうだから俺の出る幕じゃないが」

「え、にやけてた？」

「おまえらは絶対にくまいくよ」

「ありがと。出任せでもうれしい」

加納君は、ふんと鼻を鳴らして胸を張る。

「俺には未来を読んで会社をここまでした人間だぜ。だからこれは絶対だ」

結構いい人かもしれない。

「そうか」

三条くんは淡々と頷いている。こういうときは少しぐらいうれしそうにしてほしい、と思ったりもするが、嫌がらないということは脈があると考えていいんだろう。

「ありがと。代わりといっちゃなんだけど、嘉納君が本気なら友人として応援ぐらいはしてあげる」

「感謝の極みです、マドモワゼル」

白衣姿で仰々しくお辞儀してみせる嘉納君。決まっではいるが、らしくはない。

「そういう台詞はそっちのお姫様に言っただけなさいよ」

「会長が動いたわ。ファンドだそうよ」

「フィギュア作って売るとか？」

放課後の教室にて悪巧み、もとい作戦会議。

織絵のおそろしく簡潔な報告を受け、じゅらが開口一番ボケをします。

「あのなあ」

アホか。

「いや、一概に無理ともいえないんじゃないんですか？」

小暮くん、期待のフェンサーにしてなぜか織絵の彼氏がちょっと考えてからそんな事を言い出す。

「一流の原型師の作品であれば国際市場で美術品に匹敵する取り扱いを受けることもありますから」

「当てるの？ 一流作家へのツテとか」

突っ込み役のはずの織絵が食いついた。こいつは時々よく分からないところでスイッチが入り、普段のありあまる理性をかなり捨てる事がある。

「珠坂居住の巨匠というのは確かに多いのですが、そのジャンルでは寡聞にして聞いたことがありませんね」

「だろうな」

そもそも、短期間でお金を儲けてみせる方法としちゃ常識的に考えてハイリスク過ぎだろう、それ。

「ふっふっふ」

そこで止まるかと思っただ話題を、じゅらが引き継ぐ。

「兄さんはとっても器用なことから、フィギュアでもドールでもぬいぐるみでも作っちゃうもの」

あの総白髪のクールガイが？ 想像できん。

「ジャンルは？ スケールは？ 可動派？」

織絵の目が爛々と。食いつきいいなあ。

「んー、私の人形限定」

「「あー」」

じゅらをのぞく三人の声がハモった。

「毎年誕生日に、その時の私の姿の人形をプレゼントしてくれるの」

「「うーん」」

それを、本当に、健全な兄妹愛と言っているのか。いささか疑問に感じるが。

「そういうタイプの作家は一見多芸に見えて実際はモチーフ特化型だから、きつとじゅら以外作れないわね。さ、話をファンドに戻すわよ」

率先して脱線しておいて興味がなくなったら強引に進路修正か。織絵様は。

「要するに、会長氏は出資者を募ってる。学生相手に。元本保証なしで有限責任」

「投資ですか、それは思い切ったものです」

小暮君は、そんな手もあったかと言わんばかりに感心し、何度も何度もうなずいている。

「ああ、凍え死ぬ事じゃないから念のため」

そこでなんであたしを見るの？

「んなことは分かっている」

「じゃあ簡潔に説明してみなさい」

「うっ」

織絵ってのはこういう奴なのだ。

「資金それ自体を直接利益を生み出すために利用すること。この場合は言外に、株価や相場の変動を利用して取引時の価格差から利益を上げる手法に対する投入を意味してるね。会長さんがやろうとしているのは、託された少額の資金をまとめて基金として利用する事で大規模な投資を行ってより大きな利益を得る方法」

「じゅら、あんた……」

こいつらむちゃくちゃ悪質だ。

これじゃあたしがお馬鹿みたいに聞こえる。うろ覚え程度の間が理路整然と説明できるかっての。じゅらは明らかに異常だから参考にならんし、あたしみたい方が普通だと思うのだが。

「相棒をフォローするのは当たり前だから、気にしないで」

一見まぶしいじゅらの微笑みだが、その実カラスの濡れ羽よりも真っ黒い気がする。

それにしても、

なんとまあ無茶なことを考えたものだ。

大まかな話はヒゲ兄とサチ姉経由で聞かされている。ずいぶんとダイナミックな状況の展開に一同仰天させられるとともに、こりや応援せざるを得まいと意見が一致していたところまでいい。オーソドックスに署名活動、なんてのも基本的には悪くはないが。最初から負けを認めてお情けにすがろう的で、私的にも、きつと会長的にもなしだろうとも考えていた。

かといって、賭博開帳だの禁止物品の取引で大金を稼いでみせるなんてやばい方法までは（会長の性格的にも、現実的にも）とらないとしても、一円資本金会社を立ち上げて名目だけでも経営者の立場を手に入れるぐらいの事はやるかと思っていたが、これはさすがに予想外だった。

「いきなり投信会社を作るなんてわけにも行かないから、某投信会社に学生資本の取りまとめを持ちかけた、って事らしいわ。実際のところは」

「なるほど。ある意味で信用を換金するようなところがあります。が、そこは思い切った施策で信頼を勝ち取ってきた有言実行の聖者様だ。彼が信用したのであれば宝くじよりは余程分のいい賭だと判断する生徒はかなりの数に上るでしょう。相当の資金が集まるのでは？」

小暮君の意見には賛成できる。

でも、その方法には致命的な欠陥がないか？ 確かに動く金は

大きいかもしれないが。

「でも大して儲からないね。きつと」

じゅらの言うとおり。

上手くいったとして主に儲かるのは会社と学生だ。

約束が固定か歩合はともかく、失敗した場合のリスクに見合った金額であれば学生のアルバイトとしては破格な額になるだろうが……理事に突きつけるには弱いんじゃないだろうか。

あ、そうか。

「既に得ている信頼度と器を金額に換算して見せつける、って意味だけじゃないのか？」

「僕も符合さんと同意見です。会社を儲けさせられる事が示せるなら、何も自分が儲ける必要はありません」

「つまり、私たちのやるべき事は決まったようね」

なんで織絵が仕切ってるんだらう。

「さ、暗躍しましょう」

じゅらは嬉々として言うが、人聞き悪いなあ。

野球部部屋にて。

「IT株に投資して一儲け、って話があるんだって。胴元は生徒会長らしいよ」

「聞いた聞いた。マジか？ 詐欺でねえの？」

「信頼できる話。折部情報だもん。折部本人はしらんけど、彼氏の小暮は十万任せるってさ」

「会長ギャンブルに目覚めたんか？ 上手くいつて何割かにしかならないのに、下手すると一円も返ってこないんだろ？」

「あの人が成算のない賭に手を出すかっての。うちの姉貴とか株やってるけど、ちゃんと分かる人がやれば宝くじ買うよりよっぽ

ど率は高いだろ」

「一万やそこら詐欺られたとしても、あの会長にはそれ以上の借りがあるしな」

「んだな。部室棟の整備とか一気にやっちゃったもん。エアコンついたのもあの人ののおかげじゃん」

「一口いくら？ 千円？ なら全員参加できるだろ。うちの部でいくら集められる？」

文芸部部屋にて。

「会長の扇戸さんが、彼女のお父さんに無理難題をふっかけられて困ってるんだって」

「ええ？ あのまじめ会長に彼女なんていたの？」

世事に疎いものがいれば、

「あんた相変わらず節穴ねえ。人間観察が足りないわよ。四月の入学式直後から書記の佐倉さんという雰囲気じゃない」

訳知り顔で言うものもある。すべてが正しいとは限らないが。

「それでね、うちの娘に相応しい男であることを証明して見せて言われたとか言われないとか」

「どっちなのよ」

「実はお明日香ちゃんには親が決めた若社長な婚約者がいて、だから会長さんお金集めに奔走してるらしいよ」

「立派な指輪でも贈る気かね？」

「まずはIT株買うんだって。株が上がったら儲かるから色をつけて返してくれるとかなんだか」

「伝聞推定ばかりだなあんた」

「そんな投資とか言わずに素直にカンパ募ればいいのに。みんな

あの人には相当恩をうけてるんだから、結構集まると思うんだけどな」

「他人に全面的に頼っちゃうの許せないのかなあ。それとも頼り方がわからないのかも。両親いないのに一人で生きてきた人だもんね」

「初耳！ そうなの？ うわあ、なんか感情移入しちゃうよ。きつとアルバイト先のハンサムな店長に身体を要求されたりしたんだろなあ。きつと今度の若社長も明日香ちゃんに近づいたのはカモフラージュで、本当のねらいは扇戸君だったり……」

「はいそこまで！ ストップザ妄想！」

「とにかく、文芸部としては二人を応援するしかないわね。お金はあんまり無いけど、ペンの力で明日香ちゃんを幸せにしてあげましょ」

「若社長の魔の手から会長を守らないとね！」

「それはもういいから」

遠澤学園高等部校舎裏で。

「ここだけの話、切れ者で名の通ってる浅葱谷の生徒会長がＩＴ株で一発当てようとひそかに金を集めてる。書記の婚約者がそっち系の社長だとかで、間違いなく儲かるらしい。何でも教師までこっそり金を預けてるんだとよ」

「……それが本当なら俺らものせて欲しいもんだ」

「ああ、それならうちの従兄弟が浅葱谷に通ってるから、頼めば代理で話してくれると思うぜ」

同校屋上で。

「絵莉華は信用できる話だと思う？ 麻鈴は『個人的な感情は別にして、ここは黙って有り金はたくべきです』とか極端なこと言ってるけど」

「その会長さんのことは知らないけど、私はその書記さんの立場で麻鈴が会長さんだったら、辛いと思うな」

「いやー、その仮定はどうかと」

「だから私は、最初からあげちゃうつもりで参加しようと思う」

「ふーん。あたし的にはその会長ってどうも虫が好かないんだけど、そのお姫様は気の毒だと思うし、たしかに燃える展開だとは思うけどね……そうだ！」

麻緒は眼鏡を光らせ、にやっと笑った。

「なら再来週の即売会でやっちゃうか。その話をさらに脚色して短編コピー誌に仕立てて、寄付金付きとかにするわけよ」

「それナイスアイデア。私も手伝うから、間に合うようにがんばろう」

珠附紫城高でも。

「篤史に結香は『祭りキター』『他人事と思えません』とかで参加。宮藤姉妹は篤史たちにあわせて参加。で、うちの女神様的には何と？」

「美紀ちゃん的には応援一押し、詩紀ちゃん的には利敵行為ＮＧで、意志統一不能だそうです。『だから七夏に一任。さおり姉さんの許可はとってあるから斗流十家の全資産でも動員可能』と」「そりゃ責任重大だが、人外生命体の考えることはわからない。さおりはノーコメントを決め込んでるし」

「そういう十悟兄さんはどうするんです？」

「参加しろとゴーストが囁くんだ」

「それきつと別のものですよ。巻き舌で角が生えてるやつ」

「残念ながらいい漢詩は見つからなかったが、七夏はIT株が上がりそうな和歌を探しておくようにな」

「あるはず無いでしょそんなの」

かくして丈司は、ほんの二週間ほどで当初の目標に数倍する額を集めてしまった。

「ちょっと勘違いしてる連中もいる気がするが、同情的な志はありがたく受け取っておくとして……間接的に出所の怪しげな金が相当流入してきていないか？」

そう言うのは狩谷教諭。最初に焚きつけた手前もあり、さすがに捨て置けない規模になってきたのを心配して釘を刺してきたと見える。

「高校生が個人的に自由にできるお金以外は対象にしない、と宣言していますから。あくまでも高校生らしい紳士的な信用契約なので、こちらに調べのつかない方法で何をやっていようが関知しようがありません。僕は善意の第三者ですよ」

「おまえ、刺されるぞ。下手に損失を出して変なのの不興を買ったらどうする。少し頭の回る奴なら中間でピンハネしておいて末端がお前を恨むようにし向けたりもしかねん」

「そのぐらいのリスクは覚悟の上ですよ」

「しかしなあ」

「時の人である僕らには警察を含めた衆目が集中しているわけですし、簡単には手出しできません。それに、僕らを失いたくない

勢力が勝手に護衛してくれますよ」

「彼女の親父さんも含めてか」

「先生やそのお友達方も含めて、です。個人的なツテもそれなりにありますので別に頼るつもりはありませんが、バックアップは多いにこした事はありませんから」

狩谷の顔色が変わる。

「おまえ、どこまで知ってる？」

「どこまで、とは、夜間限定の私的な市内二輪ツーリンググループを主催してらっしゃった時代のお話ですか？ 奥様とのなれそめまでお話ししましょうか？」

そこまで聞いて、狩谷はがっくりと肩を落とした。

「何が、関知しようない、だ。どこで何が動いてるのかきっちり把握してるだろう」

「どうにも分からないところもありますがね。紫城の中枢部なんて伏魔殿バンデニウムもいところだ」

「そこまで分かっているのならもう何も言わん。こんなんの担任になったのも何かの縁だ。尻ぬぐいはしてやるから、行けるところまで行ってみせろ」

パソコンに向かい、

「感謝しますよ。さて、次の段階に進むとしましょう」

そう言うのと、丈司は金融会社にもメールを送り、口座に集まった金のすべてを中堅どころの一家に投入させてしまった。

「レビコン一点買いいか。確かに最近少し上げ傾向にはあるけどな、実績に対して不相応に低く見積もられてるわけじゃないだろう。」

一・二ヶ月で劇的に上がる可能性は低いんじゃないか？」

わざとらしく説明口調でそんなことを言ってるが、

「格闘トーナメントものの漫画の読み過ぎですよ、先生。もう分かってるんでしょ？」

「ああもう、やりにくいなてめえは」

とうとう教師としての態度を守るのをあきらめたようだ。バリバリと頭をかきむしるや、口調が伝法なものになる。

その間にも丈司は短文のメールを打ち、中間報告としてレビコン株を買ったことを主要なクライアントに伝えた。

「なあ扇戸よ。こういうのって『風説の流布』にならんのか？」

株の変動を決める大きな要因として、投資家達の期待と予想と、そして想像がある。

価値の上がる株とは、皆が「上がる」と思う株ではなく、皆が「皆が『上がると思っている』であろう」と思う株だ。自身の趣味はおいておいて、見知らぬ誰かの感性をどれだけ理解できるか、

という点では、流行を先読みする商売に近い。これには冷徹な観察眼と同時に、協調性や同情のセンスを要する。

が、流行に仕掛け人がいるように、共同幻想というものはある程度なら作り出す事も可能というわけだ。

確かに、株価の上下を目的として噂を流すことは禁じられているが、

「僕は『買う』としか言っていない。勝手に背びれ尾びれがつくのは誰の責任でもないでしょう」

ここまで目立つように大々的に動いたのだ。扱う額も大きい。レビコンの株が上がることを望み、強く期待する者が大勢。彼らを集める段階で利用したように、噂は今も広がり続けている。

嗅覚に優れた連中がこれを見逃すはずはなく、自らレビコン株を購入する者も増えるだろう。暴力団がらみの闇ファンドとかの

怪しい仕手筋も含めて。

こと経済に関しては大勢の強い期待は確信に変わる。祭りに乗り遅れてはいけない。というわけだ。

「シーラカンスみたいなごっつい尾ひれがついてるじゃねえか。狙ってやってりゃ灰色もいいところだろうぜ……本当に手段選ばんな、お前は」

「心外ですね。手段はちゃんと選んでいます」

「保健室は喫茶店じゃない」

入室するやいなや委員長長氣質が開口一番（確かにクラス委員長だ）。

「保健室だけどちゃんと喫茶店の機能も兼ね備えているのよ」

サチねえが開いたデスクの引き出しには茶葉がぎっしり。明らかに消毒の臭いに勝っている。

主がそう言ってるのだからあたしが文句言われる筋合いはないのだ。

「んじゃ織絵、報告たのむわ」

しゃべりやすいように水を向けると、

「口を開くのはクッキー食べ終わってからにしないさい。女の子はエレガントに」

「それじゃ、さしずめ男の子はエレファントかな？」

織絵が突然優しい声色をつくって言う（なにかのネタなんだろう）、じゅらがそれを受けた。

なんで象？ 何言ってる？

ちよびつと考えた。

海外で外人さんに微妙な日本語で話しかけられたようなもので（そんな経験ないけど）、予想外の状況では頭が回らないもんだ。……あー。

勘弁してくれい。

あたしゃまだこいつのことが分かってないようだ。

「エレガントにっ！」

遅ればせながら意味がわかったのか、織絵が半ギレになってる。……兄貴が泣くぞ、おい」

あたしも泣きたくなってきた。あたしみたいケバいいタイプならともかく、見た目繊細な美少女がカップとソーサーを手にさらっと下ネタとは。

「兄さんは都合の悪いことは理解できないから。というより認識しないのかな？」

無意識の検閲とかいうやつか。ディープなアイドルファンみたいもんだな。シスコンも相当重症と見た。

「その兄上氏とは面識がありませんが……『そうだな。象は力強くて男性的だな』とでも反応しそうですね」

「マイペースだなお前も」

女の子に囲まれて下ネタ振られた状態で、ちょっとぐらい居つらそうにしたらどうかね。

「なに、折部さんで耐性が出来てますから」

「小暮くん……」

ああ、どす黒いオーラが。

「美少女が近くにいるのには慣れてますよ」
お、引っ込んだ。

上手いなあ。これが直角ヲタ女と仲良くやっていくコツか。

「どうして象さんなのかしら？」

約一名、最年長のくせに全然分かってない人がいるが、置いていくことにする。

「話戻せ。織絵、報告」

「どうしてあなたが仕切ってるの？」

「話が進まないからだっ！」

ほっとくと延々と脱線しそうだ。仕切りたがるなら責任持つてちゃんと仕切れっつての。このキーパーソン病め。

「全体的に下げが続く中で、聖者様ファンドの投資先たるレビコンの株価は鰻登り。ITでは一人勝ち中よ。こんなの私に報告させるまでもないでしょ、株価欄ぐらい確認しなさい」

「んー、カリフラワー株？」

「それを思い出させないでっ！」

じゅらはどうも痛いところを突いたらしい。やっぱこいつ黒い。……ってことはそろそろ売り時か？」

「聖者様はブログでまだ動かないって宣言してる。専用BBSも押せ押せムード。一部慎重論もあるけど勢いにかき消されてるわね」

危ないなあ。

「あとはチキンレースだろう？ 儲けること自体が目的じゃないのなら、ここらでもう降りるべきじゃないのか？」

祭りにのっかって追従する投資家達がどこで降り始めるかだな。読み違おうと怪我じゃすまない。

って、ここであたしが言っただうなることでもないんだが。

「それが出来ればね。本当に会長自身にその決定権があるのかも微妙よ」

「そもそも会社が高校生の弁で簡単に動くとは思えません。ぎりぎりまで譲って、例え損失が出てても会社には累が及ばず、彼だけが全責任を負うような無茶な条件をのまされている可能性もあります」

小暮君の意見ももっともだ。私が会社の人間でもそうする。

「そう考えてみると、あの堅実な会長らしからぬ暴挙だよなあ」正直、もううちの出る幕じゃないのだけは確かだった。

レビコン株が値下がり転じたのはその翌日だった。

「大口の売りを切つ掛けに大暴落。半日で相応のレベルに戻った」昼休み、ヒゲジャンボがあたしら応援団を呼び集め、それを伝えてきた。

あそこまで不相応に株価が高騰してたんだから、いつか下がるのは想定内。

「で、売りは間に合ったのでしょうか？」

織絵が問う。まさにそれが問題だ。

「間に合ってなければ、今頃コンクリ抱いて港に」

「じゅら……あんたってやつは」

あたしが退くのかってわざと言ってるんだろなあ。

「滑り込みで儲けは出たそうさ。手数料引いて五〇パー前後は増えて戻ってくるよ」

「それでも大したものさ。これなら出資者も満足でしょう」

そういう小暮君も結構出資してたっぽいからな。あたしもうちちょっと奮発しとけばよかったかも。

「正規ルートはな」

小暮君は感心しているが（あたしも結構してる）、狩谷教諭様の言には含みがある。

便乗組の中には売りが間に合わなかった連中が出てくるだろうし、正規ルートについても中間でどれだけピンハネがあるかわかったもんじゃない（そもそも聖者様は間接取引の存在を公的に認めていない）わけで、原価割れもありうるだろう。

「やっぱりコンクリ決定？」

「だからそれやめられて」

「そして来年当たりなぜかシャコほか底物が豊漁に」

「勘弁してくれ、頼むから」

なんでそんなに嬉しそうなんだか。

「私たちは、『間違いなく五割ましで返ってきてる』、という噂を広めればいいのですかね？」

好きなジャンルの脱線要因がなかったのだろ。今日の織絵は実に冷静だな。

「ああ。話が早くて助かる。正規ルートに関してはそれで問題ないだろう」

「ピンはねしすぎた連中がシメられるのは勝手だしな」

「勝手ですめばいいんだけどな。いい大人が逆ギレしたりするんだよ」

ヒゲジャンボ氏にはいやな思い出がありそうさ。確かに便乗組は余計にタチ悪そうだし。

「そういう輩にはもれなく主の鉄槌が下ります。いえ、主のお手を煩わすには及ばないわ、むしろ私たちが率先して！」

ヤーさんの事務所にでも殴り込むつもりかこの直角女は。

小暮君はフェンシングの構えをとって見せる。爽やか系は絵に

なるのお。

「その時はお付き合いします」

まったく、ノリも仲もおよろしいことで。
念のため、あたしはパスだからな。

「ああ、念のため俺も腕の立つ連中に声かけとくわ。でも早まるなよ、派手にやられるともみ消しが面倒だ」

このヒゲ兄ちゃんも我が親戚ながら実に謎が多い。

学生時代はいかにも不良だったのに成績は良かったらしいし、さくっと大学受かって、教員試験受かって、就職して、綺麗な嫁さんもらって。好き放題してるわりにうまいことやってる気がする。あたしと違って、何だかんだ言って器用なのだ。

交友関係もやたら広いけど、さすがに今のは吹きすぎだな。

「お前ら、ヒゲ兄の冗談を本気にしないように」

「そうだな、くれぐれもこっちは手を出すなよ。庇うにも限界があるんだからな」

その場合むしろ命の心配をすべきかと思う。

「なら、二人と一緒にいるのがいいんじゃないかな？」

じゅらの意見はもっともだった。人数は犯罪への抑止力として作用する。

「嘉納君はどうした？」

定例の回診を開始しようとした矢先、禿頭の教授が質問を發した。

あ、やっぱり気づいたか。普段は存在感ありすぎだしね。

「珍しいな。あの彼が寝坊かね？」

「病欠です。伝言を失念しておりました。昨夜から発熱して夜間診療所で診てもらったところインフルエンザだったそうで」

三条君にしては珍しい長台詞にびっくり。内容にはもっとびっくり。

「そうか、このご時世だからな。今週いっぱい休んでもらうしかなからうね。上級医^{オピニオン}は新庄先生だったね、病棟のカバーを頼むよ」

「はい教授」

「では嘉納には自分から伝えておきます」

「ああ、頼むよ三条君」

そんなこんなで教授回診は彼抜きで滞りなく進んだのだが。嘉納君の担当患者（お年寄り含め）は一人の例外もなく彼の安否を気にしていたあたり、いかにも人誑しの彼らしい。

しかし三条君にこんな腹芸ができるとは正直驚いた。これで意外と友情に厚い事は知ってたつもりだけど。じゅらちゃんが絡まなければまともなんだよね。

それとも、直接頼まれてたのかな？

回診後に尋ねてみると、

「奴の会社、まさに乗っ取りを仕掛けられてるらしい」

「へえ」

株を半分以上集められたらジェンド。そうでなくても大口の株主として居座られれば経営に口を出される事になる。

「これで金策の時間は稼いだし、友人としての義理は果たした」

「そうね。でも大丈夫なのかな」

「奴には悪いが、これからは敵だ」

「はい？」

聞き捨てならないことをさらっと。

「妹が乗っ取り側を応援している」
うわ。

「まさか……浅葱谷の生徒会長？」

嘉納君、調子に乗って手を出しちゃいけない相手を相手にしちゃったんじゃないかな。

まさにその頃、

「おかしいでしょう、どうなってるんです？ これでは話が違う」

嘉納龍介は携帯電話の相手にくっつかかっていた。

「揺り返しはまだ先だと仰ったはずだ。それまでに確固たる実績を固めてしまえば凌ぎきれるとも」

『いいえ。今の君は三つまでの祝福を得ているはずですが』

電話の相手は深いバリトンでゆっくりと囁んで含めるように話す。

「では何故こうも食い違う？ たかだか高校生相手にここまで追い詰められなきゃならない!? 今にも会社を乗っ取られ、婚約者までかっさらわれそうなんだ。このままでは今後の計画がすべて瓦解しかねない!」

こつこつと床を叩くつま先が苛立ちを隠そうとしない。

『ほう、今の君を凌ぐとは……』

相手の声に少し面白がるような調子が混じる。

「嘉納殿はもととずば抜けた才能をお持ちだ。さらに、ほぼ最高の未来を選び出す力と一生分の知識と技能を味方になっている。それでなお及ばないのなら、ただただ相手が悪かったとしか言い

ようがありません」

事実上の見殺し宣告を受け取ったにもかかわらず、嘉納は口の端をゆるめた。

『「ほぼ最高」と仰いましたね、昂様』

『ふむ、確かに』

昂、と呼びかけられた男は肯定する。

「先ほどは『三つまで』とも」

『その通りですな』

今度こそ、嘉納は凄みを帯びた本物の笑みを浮かべた。

「つまりまだ上がある。あいつを蹴散らせるだけの能力を引き出す、四段階目以上の奥の手がある。違いますか!」

『無いわけはありませんが、お勧めは出来ません』

「うけた祝福に見合っただけの貢献はしてきたはずだ。あいつのためにもこんなところでは終われない! ここが踏ん張りどころだ、とにかくあいつに会わせてくれないか? お願いする、この通りだ!」

「狩谷楼蘭君、三条樹菜君、折部織絵君、それに小暮潔君か。君たち名義の配当は既に分配した筈だが」

生徒会室のドアをノックするやいなや、素早く入り口に立ちふさがった会長に一人一人の顔と名を確認された。

「僕は今忙しいのだが、何用かな?」

うひゃ、木刀持ってるし。警戒してるなあ。

「あ、こんにちは、狩谷さん」

奥の席に腰掛けたサクラ姫が小さく手を振ってる。ああいう仕

草が可愛いんだよなあ。

「血迷った馬鹿者が何をしでかさないともしれないのでね」
愛されてるなあ。

でも分かる気はする。

既に学校の回りはどこの勢力ともわからないコワモテだらけ。
お互い知らない振りを決め込んではいても、いかにも一触即発状態。警備員が通りかかると退散するが、またすぐに戻ってくる。

幸いうちは警備がやたらしっかりしてるから、校内までそうそう多人数が乱入してくるのは難しい。登下校時についてもヒゲ兄も手を回してくれてるはずだし、個人的な逆恨みとしての襲撃なら、木刀をもった会長なら凌げるだろう（達人らしいし）。

でも……在校生や教師を抱き込んでくるようなタイプならどうだろう。

ライバルが会長とか織絵みたいな性格ならやりかねん。一発逆転を狙って彼と理事にまとめて手を引かせようとするなら、あの娘を確保して脅すのが一番確実だし。

考えすぎの取り越し苦労ならそれはそれでいいけど、完璧主義の会長としては警戒するのは当然だろうな。

とか思っていると織絵がずいっと進み出て、頭一つ大きい会長を見上げた。

「生徒会役員はどうしたんです？」

「帰した。巻き込むわけにはいかなからな」

おお、メガネ頂上対決か。実にいやな組み合わせだ。
ガラス越しの視線が火花を散らしてる。

「賢明だわ。どこにスパイがいなくても限らないしね」
やっぱりそういう思考なんだ、こいつら。

「ならば僕の疑念もわかるだろう」

「義によって助太刀すると言ってるんです。立てこもるつもりならこいつらと小暮君を貸しますから」

自分は何もしないつもりですか？ 織絵さん。

「身体をはって友人を守るのは主の御心にも叶う事だと思うけど」

自分も参加すればな。

「騒ぎを大きくすればするほど、警察の目も向くし手を出しにくくなる、とお考えでしょう？」

会長は少し考えていたが、

「わかった。申し出を受けよう」

と、握手を求めてきた。

敵対国同士の首脳会談ばいな、この雰囲気。微妙にぎすぎすしてて。

会長的には誰も信用できないって気持ちも分からなくもないけどね。

「オーケー、協定成立ね」

「あくまでも抑止効果としての人数確保のつもりだがね。ただし、君もしくは君の友人がとらえられあるいは殺されても僕は一切関知しないから念のため」

あ、じゅらが反応した。

「なおこの学校は自動的に消滅する。健闘を祈る」

「消滅しないっての！」

あたしやツッコミ係が確立してきたなー。

「あ、お茶菓子も結構揃っていますね？」

「会長さんが手配してくれたんですよ。ここに立てこもることになるかもしれないからって」

サクラ姫と小暮君が紅茶を入れて回っている。

爽やかなだけでなくフットワークも軽いな、彼。ほんと直角女の彼氏には勿体ない。

「会長さんのお役に立てて光栄の至りです」

「なるほどな。狩谷騎士団の増援か、実に心強い」

織絵と会長氏の会話はいかにも心にもない台詞にあふれている。メガネ同盟はいかにも上っ面だけだな。

ああ、一つだけ聞いておかないと。

「会長、恋敵の会社を買収を仕掛けてるんだって？ ヒゲ兄、もとい狩谷センセが言ってたんだけど」

「情報が早いな」

なんで意外そうな顔をするんだ。

ほんと、見た目で損してるな、あたし。

「どこから持ってきたんです、その資金。今回の件で会長個人がそれほど儲かったとは思えないんだけど」

「師匠から金を借りて前もってレビコン株を買ひ集めておいただけだ」

「……なるほど」

……つまり、あの大騒ぎは、株価を上げるためだけの空騒ぎとその騒ぎはある意味現在進行中なわけだが。

しかし、恋敵に少しでも近づくために金を儲けてみせようというのとはともかく、それを使って相手を積極的に引きずり降ろそうってのはやり方がえげつない。

あたしが相手ならここまでやられたら絶対に逆襲を考えるぞ。

「まあ、授業中はあたしに任せてくれてOKだから。サクラ姫とは体育は合同授業だし知らない仲でもないしね。せいぜい目を離さないように気をつけるよ」

「その、サクラ姫、つての、ちょっと恥ずかしいんですけど」

「お、さんきゅー」

頬を染めながら湯飲みを渡してくれる。

新鮮だなあ。見た目も中身も本当に可愛らしい娘。横にいる見た目だけ美少女とは大違いだ。

「皆さんも明日香って呼んでくださいまし。議長さんもね」

議長？ 会長でなくて？

「では鉄塊さんともい明日香さんも、わたしのことはじゅらと」
はあ？

いかにも自然な感じで話しているが、どう考えても不自然な単語がいくつも含まれてたぞ。

おおよそ女の子向けのあだ名じゃないな。

「なあ、あんたら仲いいのか？ もしかして親戚だったとか」
こうやって並ぶと、同系統の端麗系の顔立ちだし、量の多い黒髪も同じような見事な色艶だ（うらやましい……）。

かたやあたしと大差ない長身でモデル体型、かたや華奢なちび子だが、姉妹と言われれば十人に九人までが納得するだろう。

「いいえ、お顔は存じてましたが、こうしてお話するのは初めてです」

「右に同じだけ」

「じゃあなんで議長、なんで鉄塊？ それどういう由来？」
尋ねてみると、

「……うーん、第一印象、でしょうか？」

「ですよえ」

どういう感性してやがるんだこの美少女様方は。

「なあ明日香さん、その第一印象だとあたしはどんな名前に？」

後学のために聞いてみた。

「……対空ミサイル、でしょうか」

「そんなところですよえ」

おおよそ女子高生の口から出てくるとは思えない単語を即答されてしまった。

微塵も分かん。じゅらがなんで同意してるのかも分かん。

あれが議長であれが鉄塊であたしが対空ミサイル、ねえ。

その間もうさんくさげにあたしらを監視していた会長氏だが、ひとつ大きなため息をつくとき、木刀を椅子に立てかけ、腕を腰に当てて苦笑した。

「佐倉くんと同レベルで会話できるとはね。警戒するのも馬鹿馬鹿しくなってきた」

これ、本当に彼氏の発言かね。

まさか、その中にあたしは含まれてないよな？

「大したもてなしも出来ないが、食べ物だけは豊富に用意してある。あとは、そうだな、手慰み程度だが音楽でも楽しんでいくてくれれば幸いだ」

会長氏がロッカーから持ち出してきたのは、なんとバイオリン。無造作に演奏を始めてしまった。

いや、何が出来ても驚かないけど。あの会長なら。

最初は陰気なメロディーなのにいつしかやたらノリノリになってくる。

「音楽の授業で聞いたことがあるような、ないような……」

「うむ、あれは確かボド○ザー閣下のスヴ○ール・サ○ン」

「激しく違うからね、それ。ていうか詳しいわね、あなた」

じゅらに織絵がツッコむ。ってことは今の意味不明な台詞の意味が分かったって事か？ まったくヲタって連中ときたら。

あたしや全力で置いて行かれてるな。ついていく気もないけど。

「正しくはドヴォルザークのスラブ舞曲第二番ですね。なるほど会長さんらしい」

どの辺が会長氏らしいのかはさっぱりだが、小暮君は一人で納得してやる。

ドヴォルザークか。教科書にあった写真を思い出してみる……ノーベルとかレントゲンと一緒にくたになってる気がするけど、ヒゲ兄が老けたらちようどあんな感じになりそうだ。どうでもいいが。

あ、ヒゲ兄といえば。

「あ、もう一つ狩谷先生からの伝言があったのを忘れてたよ。『部活の泊まり込みの申請を通して家にも連絡しておいた。嫁さんともども宿直室にいるから何かあったら声をかけろ』、だって」

「了解した」

「気が回る方ですね、あの先生は」

「ああ、その通りだな」

男性連はごく短い会話で意思を疎通している。確かに、合法的に立てこもりできるお膳立てを整えてくれたわけだから、これはヒゲ兄グジョブと言いたい。

しかし楽器弾きながら会話する余裕がよくあるな。

「では合宿ですね♥」

守られているお姫様が一番緊張感がなかった。

珠坂市内の小さな神社。

いや、神社というのは正確ではない。ある宗教法人が住宅地のうちに取り残された小さな森を買い取り、ちょっとした研修施設を作ったものだ。

その名を「星の御光教」という。

御光の神官の衣装や拝殿の造りや飾り類は一見して神道のものに近いが、神聖に対する崇拝ではなく徹底的な現世利益を説いている。

嘉納龍介が御光教を知ったのは高校三年生の時分だった。

彼は近道をしようと鎮守の森（しつこいが正確には違う）に入ったのだが……

首筋にぞくつとする冷気を覚えた。立ち止まって辺りを見回すと、拝殿裏の小屋に目がとまった。ちょうどそちらの方から風が吹いてきているようだ。

怖いもの見たさで、歩を進める。ああいうところには秘密があるものだ。中には井戸があって脱出用の抜け穴に繋がっていたりとか、そういうやつだ。

子供の頃の探検ごっこを思い出す。適度な恐怖心が高揚感を増幅させる。

意外に頑丈そうな戸口の目の前まで近づいたちょうどそのとき、突風が落ち葉を舞い上げた。

「もしもし」

目を開いたとき、目の前には見たこともないような美しい少女

が立っていた。

いつの間に近づいたのだろうか、落ち葉を踏む音さえなかったというのに。

年齢は中学生ぐらいであろうか。

が、涼しげな目元にも形の良い口元にも物憂げな表情が浮かんでおり、同年代の少女達が放っているような澁刺としたところがまるで感じられない。

身につけた衣装はと言えば、形こそ巫女装束に似ているが色使いが決定的に違う。

墨染めの衣に緋袴。長い黒髪は胸元に回して緋色の布でくくられている。それはまさに黒い巫女だった。

「これより近づくことはなりません。さあさ、疾くお行きなさい。主様のお目にとまる前に」

相変わらずの無表情と平板な口調であったが、黒い巫女は意外なほど饒舌にそう言うのと、ぴっと立てた人差し指を唇に当ててみせた。

そのちょっとした仕草のなんと蠱惑的であったことか。

先ほどまでの冷気とは比べものにならない、背骨に沿って突いた水を突き刺されたような衝撃が走った。

ああ、これは世の常のものではない。彼女の言うとおり、関わってはならないものだ。

世慣れない高校生男子にさえ容易くそれが分かった。

半ばすくみ上がりつつも異常な高揚を感じながら、ああ、森のくまさんってのはこういう状況か。とか、頭のすみっこの妙に冷静な部分が考えていた。

そのときの嘉納はこくこく頷く事しかできず、いわば這々の体

で逃げ帰ってきたのだが。

学生証をなくした事に気づいたとき、嘉納の気持ちは浮き足立った。またあそこへ行つて彼女と対峙せねばならない、という恐怖心の一方で、もう一度会えるのを楽しみにしている自分を否定できなかった。

翌日。

森に入った嘉納は昨日と同じ場所へと向かった。

つばを飲み、身体の震えと高鳴る胸を押さえ込み、例の小屋に向かつて、一步一步、そろそろと。

そして突風。

黒い巫女は、またも目を閉じている一呼吸の間に姿を見せた。

「あ、あのっ！」

彼に皆まで言わせず、少女は見覚えのあるベルトタイプの手帳をふわりと放つて寄越すと、

「これをお探でしょう。受け取られましたらお行きなさいまし」

相変わらず気だるげな調子で言った。

まただ。ただ彼女がそこにいるだけで、そのテンションとは正反対の異常な興奮が沸き上がってくる。

会話を成立させるため、それを無理矢理押さえ込む。

「……中、中は見た？」

彼女に触れたいという衝動とは別に。自分を知ってもらいたい、一期一会の侵入者としてではなく、個人嘉納龍介として認識されたい、という気持ちがある。

「興味ありません」

少女はすげなく言った。

手帳のボタンを外して儀式的に巻末を確かめる。名前も写真も間違いなく彼のものだ。

「ありがとう、助かったよ、ええと……」

暗に名前を尋ねたつもりであったが、

「よかったわね。なら、お家にもどつてゆっくりとお眠りなさいまし。ここで見たものはお忘れになることです」

分かってか分からずか、どこぞの猿のごとく両掌で両目をふさぐ仕草をしてみせる。

「俺は嘉納龍介だ。君は？ 君の名前を聞かせてほしいんだが」

「忘れなければならぬ名前をわざわざお尋ねに？ おかしな方」

自分のおかしさを棚に上げてそんな事を言う。

「ああ、聞きたいね」

「そう」

黒い巫女は無愛想にそう言うや、踵をかえし小屋の扉を引き明けた。

暗い小屋の内に身体を滑り込ませる直前、少しだけ、くすりと笑ったようだった。

興奮とは異なる別の何かが嘉納の頬を瞬時に熱くする。

「垂氷」

扉が閉じられる寸前に残された三つの音。

それはつらの異名。彼女のイメージ通りの名だった。

三度目の訪問。

黒い巫女、鶴居垂氷はこの日もやはりやる気ななげで。

「懲りない方」

第一声から冷たい。名前の通りだ。

そこにいてだけで賢明に抑えつけねばならない異常な高揚と興奮をもたらすのもこれまでと同じ。

でも、一つだけ違うことがある。

小屋から離れたところで、彼女は大きな切り株に腰掛けていた。待っていてくれたのだろうか。

「いやあ、道に迷ってしまっただけ」

切り株からぶら下げた足には衣装と同色の黒の草履。

「!?」

そして信じられないものが。

袴の裾から覗いた垂氷の左足首には無骨なザイルがくくられている。結び目は長く大きく、偏執的なほどにしつこい結び方がなされているようだった。あれをほどくのは女の子の力では難しいだろう

「何だ、それ!」

嘉納は駆け寄ろうとしたが、

「近づかないで」

小さいがびしりと鋭い声によって、押しとどめられた。

「誰にやられた?」

「勘違いしないで。これは主様が私のためを思ってなさったこと」
平然としている。

視線でザイルをたどってみると、先端は扉の隙間から小屋の中へと消えていた。

「何だよそりゃ!」

「危険だから。寝ぼけてでもこの森から出ないように」

「何が、どういう風に危険だって言うんだよ!?!」

「他人と接触しないように。わたしの手綱は主様以外の手には余るから」

さっぱり意味は分からないが、一つだけ分かったことがある。

お前など役立たずだ、と言いつ放たれたのだ。

「おやすみなさいまし」

黒い巫女はザイルを引きずり引きずり、小屋の中へと消えていった。

彼女に突っぱねられた以上、追うことは出来ないが……

その主様とやらには是が非でも会わねばならない、と決意した。

さらに翌日。

「これは私の養女だよ。嘉納龍介君」

さも山椒大夫のようなのが出てくるかと思ったが、

垂氷の主様というのは、灰白色の髪をオールバックになてつけたダンディーな壮年男性だった。

「というのは表向きだが、私が垂氷の庇護者である事は間違いない」

彼は「星の御光教」主宰、「昂師」と名乗り、

「垂氷は御光の巫女として人々に星の英知をもたらす者だが、同時に諸刃の剣でもある。悪人の手に落ちればこの国どころか世界を揺るがすことになる」

そんな大風呂敷を広げ始めた。

「このような真似を好きこのんでやっているわけではない。本当に危険なのだ。垂氷自身が自分を制御できないのだからね。資格のない者が彼女に触れる事のないようにせねばならなかった」

「彼女は闇雲に人を惹きつけ、不相応な力を与える。恥ずかしい」

話だが、私自身、就寝前には足を母屋の大黒柱に結びつけねばならん。今でこそ何とか抗えるが、数年もしたらより確実な隔離方法を考えねばならないだろうな」

「星の英知を得てしまったがゆえに、私は彼女を管理すべき事を知った。そのために作ったのがこの御光教だ」

このオッサンは無茶苦茶な妄想に突き動かされるまま、女の子を動物のように紐で繋いだのか？

しかし、そう語る昂は正気であるかどうかはともかく、これ以上なく真剣に見えた。

挙げ句、

「私の正気を疑うのは当然だ。だが、私の言葉が一字一句真実である事を証明する準備がある」

などと言いつ出した。

「君には是非味方になってもらいたい。何の予備知識も持たなかったというのに、垂氷に触れたいという衝動を抑え続け、彼女の言葉に従って距離を置き追うことはなかった。そういう精神の強さこそが、大切な資格だ」

昂師は、嘉納に向かって手を差し伸べた。

「さあ、星の英知を得て、我々とともに歩む覚悟はあるかね？」

そして現在。嘉納は垂氷を前にしていた。

御光教本部の地下、それだけで一つの家と言えるまでの規模を持ち、快適な生活のための設備が整えられた空間に封じられた彼女が鉄格子と防弾硝子の向こうにいる。

あの頃より背丈が伸び、体つきも女らしくなり、容貌も大人びた。性格は相変わらずだが。

放たれる魅了の衝動も格段に強烈になった。彼女がただそこにいる事を知っているだけでも自然と足が向かいそうになるが、それは死と同義だ。

地下室への入り口に配された警備システムはちょっとした軍事拠点以上。警報装置のみならず、いささか非合法な方法で入手した対人地雷や自動機関銃までもが仕掛けられている。これは昂師が作り上げたものであり、嘉納も少なからず協力している。

これを解除して中に入るためには垂氷自身ともう一人の高位信徒による承認を必要とし、それは教祖たる昂とて同様である。

昂に認められた者だけが垂氷に目通りを許され、基幹信徒として祝福を受けられる。

彼らは資金や技術あるいはコネクションを提供し、御光教をさらに大きくする。

そしてそのすべては、垂氷と世界を守るため。

あの日、垂氷の手に触れることで、嘉納は啓示を得た。

というのは正確ではない。彼女に触れた瞬間、今後数十年を経て得るはずの知識が既に脳内にあったのだ。

そして彼は医学部受験を決めた。

また別の日、右手に垂氷の口づけを受けることで、今後の自身に何が起こるかを知り、選ぶべき選択肢を知った。

そして彼は会社を興した。

また別の日、額に垂氷の口づけを受けることで、今後得る害の技能のすべてを身につけた。

会社の経営も含め、何もかもが順調だった。

「これは想像でしかないんだが……前借りした知識や能力の習得

の辻褄はあわせただろうが良からうな。さもなくば世界の歪みが不必要に拡大し、何らかの揺り返しを生むかもしれない。どれだけ上手くやったとしても、少なくとも死ぬときには借りを返す羽目になるだろうがね」

と昂は言ったものだ。

嘉納自身もその意見には賛成して実践してきたし、これまで観測された現実の出来事と彼の知識との間には大きなズレはなかったはずだ。

あの日、未来の記憶にない要素。垂氷にそっくりな少女を見つめるまでは。

成長した垂氷は、昂師と嘉納の庇護下にあった娘は、躊躇無く

彼の元へと歩み寄り、

「本当は、出会ったときからずっと、こうしたかった」

彼女の口づけを唇に受けたその瞬間、彼の世界観は豹変した。

時計は午後十時を回ろうとしていた。

最初こそ気合いが入っていたものの、いつしか暇を持て余すあまりトランプ大会になってしまった（緊張感ねえ！）。

「さっきから一枚も交換してないくせに、なんでことごとくでかい役が出来てんだ!？」

非常識な引きの良さによるじゅらの一人勝ちに一矢報いるべくムキになってきていたところで、

当のじゅらが突然びくっと頭を上げ、振り返って窓を見た。

見れば小暮君や、意外なことにいかにも鈍そうな明日香さんま

でも同じようなことをしている。

「なんだあ?」

あたしの耳にも何十もの野太い悲鳴が聞こえてきた。

おわ、だの。ぎゃあ、だの。うおー、だの。

窓越しでもはっきり分かるぐらいだから、よほど大音量の絶叫だ。

そして、すぐに静かになった。

一同窓際に寄って、覗いてみる。

玄関の灯りや校門脇の街灯が届く範囲には何も見えない。室内の明かりに慣れた目にとっては月明かりだけでは暗闇も同じだ。

なんだかわからないが、とてもやな感じがする。

ちょうど、あれだ。ホラー映画で単独行動を取った登場人物が殺人鬼や怪獣に襲われるシーンのような感じ。

今まさに、扉の向こうの廊下にはそういうのが忍び寄ってたりして。

ガラリ!

「おー、やべえぞ。おまえら……って、どうした?」

心臓に悪い!

一同の冷たい視線にたえかねたヒゲ兄が後ずさる。

「外で動きがあったらしい。今警備が警察に連絡入れたところだ」

「籠城一夜目で実力行使ですか。思ったより早かったですね」

そういう会長氏はあまり慌てた様子はない。予想はしていた、と言わんばかりだ。

まあ、会長やヒゲ兄の話によれば味方も多数居るというから、それなりに非友好的グループの情報が入手しているのだから。

「少しは慌てる。外を経過していた連中、佐倉理事に雇われた私

設警備員達、うちの現役連中も含めて一切適切連絡がなくなってるんだ」

現役連中って何？ とは思ったが、尋ねるタイミングを失ってしまった。

「嘉納の息の掛かった連中にしても、逆恨みの組関係の暴発としても、敵方が勝ったにしては誰も突入してこないのは解せんだろう。相手にしてみればまだ前哨戦だし、とにかく警察が来る前に扇戸をつかまえて落とし前をつけんことには始まらんはずじゃないか？」

確かに、うちの構造上は屋上から見えないように校舎にとりつくのは不可能だ。

「何ですって？」

さすがの会長の表情にも焦りが浮かぶ。

「僕は内側に対する警戒を主にと考えていた。周辺に出没してる連中も嫌がらせ程度と判断していましたが」

「うちの警備主任さんは元自衛官で近接戦闘のプロフェッショナルだし、人数も揃っている。彼らを突破するためには暴力団の抗争レベルをこえて、ちょっとした戦争になるでしょう」

小暮君の言うとおりだ。チンピラ程度がそんな彼らをあつという間に無力化できるだろうか？

「彼らが裏切った可能性は？」

織絵が嫌なことを言い出す。それはある意味最悪の目だろう。

「馬鹿馬鹿しい仮定だよ。それなりの家庭の令息令嬢を多く擁する我が校の警備員は思想信条に至るまで徹底的に選りすぐりだ。そんな彼らの大多数を抱き込む、あるいは浸透させた子飼いに置き換えるのにどれだけの手間とコストがかかる？ 僕なら政治家

子息の誘拐に用いるね。こんなつまらない事のためにまとめて切っていくカードじゃない」

「ええ、浅井さん達は信頼できる方々ですよ」

天然ボケのお人好しである明日香の意見はともかくとして、会長が人間を見る眼力は十分信用に足ると思う。言ってることは物騒だが。

それに、連中はサクラ姫親衛隊を公言してるしな。この娘、おっさんにはやたら受けがいいから。

大体、誰がそこまでやるってんだ、ハリウッドなアクション映画じゃあるまいし。

「となると、どちらにも与せず無差別攻撃、しかも良く訓練された兵士を圧倒できるだけの手練れを大人数ですか？ そこまでさせておきながら、こんなところで手をこまねいている。黒幕の人物像がちょっと想像できませんね」

織絵がプロファイリングを始めるが、そんな悠長なことやってる場合じゃないだろう。インテリってやつはこれだから。

警察が間に合わなかった場合に備えて部屋をあさり、掃除用具入れに入っていたモップを得物に選ぶ。

あの人たちがあつさりやられたんじゃああたしらじゃ歯が立たないだろうけど、ちょっとぐらい抵抗してやろう。

「あり得るとすれば……知らず知らずのうちにテロ組織を抱えた怪しい宗教団体でも敵に回してたか？」

と、ヒゲ兄はまだ考察中だ。確かにそれなら一般人から見て行動に一貫性がないのは説明できるかもしれないけど、ちょっと唐突で強引な気がする。

「くだんの嘉納龍介氏が『星の御光教』なる新興宗教に傾倒して

いるのはそれなりに知られていますが、そこまで大規模な組織ではなく、行動規範もごくごく緩い。あのオウムですら警察と真っ向から戦うことは出来なかったのだから、さすがに無理があると思う」

会長氏はそれについてもちゃんと調べていたらしい。

「では、今もこの学校を取り巻いているのは、一体何者なのでしょうね？」

小暮くんが一同を代表して疑問を呈した。

「そりゃもう」

じゅらが人差し指を立て、にっこり笑って言った。

「モンスターしかないよね」

《あー、あー》

アホな発言に一同脱力した直後、キーンというハウリングとともに、大音声が響き渡った。

《俺は嘉納龍介という者だ、話を聞いてもらおう》

一斉に窓際に駆け寄ると、校門に立つ青年の姿。拡声器のマイクを手に入れている。

《扇戸丈司君、そこに居るんだろう。この学校にはもう誰も入ってこれん。邪魔者の居ないリングで片をつけようじゃないか。レフリーはお姫様、チップは命。さあ出て来たまえ。得物は何でも構わん。矢でも鉄砲でも持つてくるがいい》

「あれのどこがモンスターだ」

やたら物騒なことは言ってるけどな。

「バケモノは見ただ目じゃないよ、ローラ」

とか言って、じゅらはちゅちゅちゅ、と人差し指を振る。

「想定していた為人とかなり違うな」

会長さんはしきりに首をひねっている。

《君が応じないならば是非もない。解毒のタイムリミットは三十分だ。それまでに俺を排除して病院に連れて行かねば、勇敢な警備の方々はおろか暴力団や警察の皆々方にもこの世からご退場いただくことになる》

その嫌な単語に、一同たちまち渋面になる。

「なんじゃそりゃあ!？」

ヒゲ兄、格闘漫画の驚き役ですかい。

「毒って……やはり宗教関係ですかね？」

「宗教Ⅱ毒は偏見でしょ。だいたいあの人ガスマスクとかしてないわよ」

小暮君がそう言いたくなる気持ちも分かるが、織絵が指摘する通り嘉納はただのスーツ姿。武器らしい武器を持っているようにも見えない。

「くそっ、読めなかったぜ! こままで無茶をやった時点で未来がないだろうに。勝負を捨ててもブライドと一時の勝利をとったのか? 俺には全然わからねえよ」

「まあ、人間らしい合理的な判断ができなくなってるのなら、ある意味怪物と同じだものねえ。大さんと会長さんに行動がはかれなくても仕方ありませんよ」

ぽやくヒゲ兄をサチ姉が慰める。

って、いつの間に居たの? いや、こんな状況じゃあ合流してくれていて幸いだけど。

「とにかく、見るからに畏だね。早まないとで会長さん、相手が一人の筈がないんだから。学生にとっては知り尽くした校舎内

が絶対有利、わざわざ校庭に身をさらすなんてバカな事は考えないようにね」

と忠告してみたが、

「をい」

会長氏は椅子に腰掛け、悠々と紅茶などすすっている。

「何か？」

「早まるつもり……全然ないようね」

織絵も非難めいた視線を向けている。

「立ち位置が主人公の方には、もうすこし『らしい』行動をとっていただきたいと思いますね」

その言い分もどうかと思うが。

「どうして僕が行くなど？」

「どうして、って……人質をとられてるんだぞ」

会長氏はソーサーとカップを持ったまま器用に肩をすくめてみせる。

「状況に流されず冷静に考えたまえ。残念ながらこの人質は有効じゃない。僕の大切な人々には未だ害は及んでいないんだ」

こ、こいつはっ！

「責任あるだろ？ 最初に喧嘩売った立場上。あと正義感とか人類愛とかないのか？」

「このような暴挙は主が許しません。あとハリウッド映画の神様も、それから担当編集者も」

織絵がなんか言ってるが、後半の意味がわかりません。

「君らは非人道的だと言いたいのかもしれないが、僕としてはらわたが煮えくりかえっている」

とてもそうは見えないけどな。

「正義感で勝負に勝てれば苦労はしない。すべてを捨てて掛かってくる相手に対しては警戒しすぎてもし過ぎという事はないと思うがね」

《あと二十四分》

どうしてあんなに正確に時間が分かるんだろう。個人差もあるだろうに。

というツッコミは無料なんだろうな、きっと。

「ああまでして僕をおびき出そうとするんだ。彼には校舎内に入ってこれない何かの都合があるとは考えられないか？ 何を好きこのんでアドバンテージを捨て去る必要がある」

「俺の可愛い後輩どもの命も風前の灯火なんだが、ちっ、どうしたもんか……」

それ何の後輩なんですか？ ヒゲ兄。

「三十分の根拠すら分からないのに？ 三十分以内で決着をつける必要があるんでしょよ、彼の側の都合で」

なるほどね。あり得る。

しかし冷静だよなあ会長殿。いくらそう看破しても、普通の間はそうそう平然としてられるもんじゃない。

「きつと会長さんの仰るとおりです。でも、少しでもそうじゃない可能性があるのなら、私は助けたいと思いますよ」

会長の隣に座っていた明日香が、すっと立った。

「だって、もともとは私の都合なんですし。私を守ってくれようとした人たちなんですから。行かないと」

ぐっ、と右拳を握るが、お嬢様ではないささか迫力不足。

いやそりゃまずい。彼女の身柄を奪われればジエンド。王将自ら前線に出てどうするって感じ。

「そうか。わかった」

一同啞然とする中、会長氏は紅茶の最後の一口を飲み終わると、机に立てかけてあった木刀を手を取った。

物わかり良すぎ！

あたしらが理を尽くして説いても耳を貸そうとしないのに、お姫様だと一発なのな。

「おいおい、なんか策があるのかよ、会長っ！」

「ない。誰が彼女を止められるっていうんだ……」

ごもつとも。マイペースこそが最強なのは、サチ姉あたり見るとよく分かる。

「大さん、あなたの後輩もいるんでしょう？」

「へいへい。久々に運動するか」

悲しそうな眼差しは脅迫と同じだな。

「徒に戦力分散するのは問題ね。小暮くん」

「はい」

こっちのカップルも、ツーカーというか、尻に敷いてるといえるか。

全力出撃かと思いきや。

《あと二十三分》

約一名余裕を決め込んでるのがいる。

「ローラにはまだ害は及んでないから」

「……あたしゃ行くからな」

「あ、ローラの居るところ私ありだからね」

慌ててついてきた。

「あと二十分だ。思ったより決断が早かったな、誉めてやるよ、

扇戸丈司君」

「こうしてお目に掛かるのは初めてですね」

「ああ」

本当に一人きり、丸腰であたし達の前に立った嘉納は意外にも冷静に見える。

貴族的なハンサムで。いかにもやり手といった雰囲気を持っている。会長氏はまだまだ少年らしいところがあるが、もう何年かしたらこういう感じになりそうだ。

ただ一つだけ決定的に違うのは、彼の瞳が帯びる狂気の色だ。正直あまり鋭い方ではないあたしにもはっきり分かるぐらいだから、見た目はともかく中身はイッチャっててわけだ。

全面的に壊れてるわけではなさそうだけど、それが危険性を否定する材料にはならないわけで。何をやらかすかわからない上に、それをやり遂げる能力は備えてるってのが始末に悪い。

「嘉納さんですね、ここは引き下がっていくわけには参りませんでしょうか？」

明日香が進み出ようとするが、その前に会長が立ちふさがる。

「佐倉君、下がっていたまえ」

「でも、私ならもしかすると……」

「いや、彼の目的はもう君じゃない。会ってみて確信したよ」

二人とも、本気で一対一でやる気らしい。

あくまでも今のところは、だが。

他に何人引き連れてるのか、何か隠し球を持ってるのか。

すでに未来のことは考えてない相手だから禁止手はない。ここでききなり狙撃してきてもおかしくはないわけだ。それこそ自分を巻き込んで毒を使うことも無いとは言えない。

……なんてただの女子高生のアたしが、こんな生きるか死ぬかの状況に巻き込まれてこんな物騒なこと考えてるのやら。

と呆れるが、自分の心のどこかがこれを当然自然な事と認識しているのだろう。不思議なほど落ちついて適応できているし、状況を認めず否定しようとするような気持ちは全く起こらず、目の前の出来事に各個とした現実感を感じられている。

確かに、本番に強いタイプとかよく言われるけど……ここ数ヶ月というものの非常識な連中ばかり相手にしてるか耐性がついたんだらうな。

他の非常識な連中も、緊張の表情こそ見せていても現実逃避している様子はない。これを心強いと喜ぶべきか、それともあきれるべきか。

目には目、歯には歯、非常識に対抗するには非常識。これはもう、どっちがより非常識かつそれを気にしないか、って争いじゃなからうかと思えてさえる。

こういう状況だと会長や織絵やじゅらのぶっ飛びっぷりさえも頼もしい。小暮君とならぶ少数派常識人としては、珍しくも非常識派を応援したい気分になっていた。

その小暮君すらフェンシングフォイルを持ち出してるのだから、他は推して知るべし。

あたしがモッポ。

会長氏が木刀。

ヒゲ夫妻も木刀。どちらも鉛色に光って妙に年季が入っているのは何故だろう。ああしてるとサチ姉の白衣も特攻服に見えてくるから不思議なもので、背中に「満床」とか墨書きしたくなる。

じゅらに至っては、柄に銀細工の施された年代物のサーベルを

手にしている。

「ん、ひいおじいちゃんの形見」

だそうだが。こんなもの無造作にロッカーに突っ込んであったとは。

あと織絵だが……なぜか十字架の下がったロザリオだけを携えている。

呆れをこめてじろつと見ると、

「アンデッド対策よ。常識でしょう」

と宣った。そういや、仕事人ばりに首に巻かれた事が何度かあったっけか。一応は「手になじんだ得物」、ってことではあるんだらうか。

そういう観点で言うくと、

戦士（小暮君・ヒゲ兄・じゅら）、侍（会長さん）、ロード（サチ姉）、僧侶（織絵）って感じか。宝箱どうする気かと問い詰めたい。あ、あたしはプレイヤーで明日香っちはお姫様係。

さて冗談はさておき。

無手の一人に凶器持ち六人ではいかにも一方的で卑怯そうな絵面に見えるが……本能が「まだ足りない」と言っている。

不敵な態度はイッちまつてるゆえと仮定しても。そんなものは関係なく、嘉納龍介というこの一人が「危険だ」と感じられてならない。

皆も同じなのだろう。それぞれがそれぞれの構えで嘉納に武器を向けている。

「みんな、佐倉君をお願いします」

「おお、恐ろしい。集団で武器を持って取り囲むなんて、それが客をもてなす浅葱谷流のやり方なのかな？」

その言葉が終わるまえに、会長が動いた。
速い！

しかも初動の瞬間が分からなかった。

青眼の構えから一足飛びに間合いに入った会長の木刀は、軽く振り払った左手の甲で流された。

どすん、という踏み込みとともに繰り出された反撃の右拳は、会長の制服の胸をかすめるにとどまる。

……凄いや今の攻防！

格闘ファンの血が騒いできた。

素手で達人級の木刀を相手取れるって、一体どういうバケモンだろう。

「ヒットアンドアウェイ、さすがに慎重だな。この状況なら俺でもそうするよ」

嘉納が、にやり、と笑った。

またしても、会長があり得ないタイミングで踏み込む。三段突きから急に身を低くして足を刈りにいく。

嘉納は突きのすべてを首を傾けてかわしつつ、一歩下がって足払いをも回避、身を伏せた会長を蹴りつけに行く。

会長はそれを崩れた前転受け身で辛うじて回避、再び間合いを取る。

「おっと危ない危ない」

「さすがにやりますね」

ああ、マジでバケモンだね、あれ。

「本気の扇戸を初めて見たが、あれは普通避けられんな」

「突き一回ごとにタイミングが違いますね。呼吸や脈拍のリズムを外して動く、いわゆる無拍子です。リズムが無く予備動作も少

ないとなれば、対応は至難の業です」 ヒゲ兄は感心しきり。小暮君は解説役と化している。

「ふーん。で、それを避けるあいつは何者？」

腕組みして傍観モードの織絵が尋ねる。

「予期してたというよりただ反射神経だけでさばいてるように見えたけど」

はげしく同意。嘉納は素早い動き一つ一つは意外ときこちない。生まれ持った才能というか、身体の性能だけであれだけの戦いをしているのだ。

対する会長は相手の反撃パターンを先読みして回避してるように、動きがなめらかで無理がない。

うーん、とサチ姉は首をひねる。

「それでは達人には対抗出来ないわ。訓練で処理の効率は上がっても、神経伝導速度は神経繊維の構造で決まっているものだし、極端に速いはずはないのよ」

つまり、相手の動きが見えてから自分の身体が動き始めるまでのタイムラグはある程度以下には縮めようがないってことだ。

「とすると強化人間？ なら不安定なものも分かるわ、あははは」
織絵は一人で納得して、しかも何かがツボに入ったかウケまくっている。

大物になるよ、こいつ。

「一撃で昏倒させようと思っていたのですが、正直貴方を見くびっていた。謝罪します。最初から殺すつもりで全力で行くべきだった」

「ああ、来いよ。本気のお前を潰さないと意味がないんだからな。お姫様の前で無様にはいつくばらせてやる」

会長の呼吸が変わった。

こうっ。

今度は真っ向からの唐竹割り。だが、出だしがあたしにもはっきり見えたのだから、嘉納の反応が間に合わないはずもない。

ミスったか、会長!?

が、これまでになく大袈裟に飛びすぎた嘉納の顔からは余裕が完全に消えていた。会長の一撃は彼のスーツの胸を斜めに切り裂いており、胸の傷からは血が滴っている。

斬った!? 木刀で?

しかも、会長は回避されそうになった木刀の軌道を途中で変えてみせた。

たとして言えば、ストレートを狙ったフルスイングを途中から変化球にあわせるようなものだ。

「普通は間に合わないはずんだけどね、扇戸君だしね」

サチ姉はあっちこっちと首をかしげている。

「……そういう技術があるんだよ、その筋にはな。とにかくあるもんは仕方ねえの」

教育者とは思えない大ざっぱさと投げやりな態度。似たもの夫婦だ。

「ってことは何か、会長は身体能力を強引に引き上げたってことか? 怪しい薬でも使ったか?」

あんなことをやらかすには、少なくとも組織の強度や運動速度、神経伝導速度とおそらくは思考速度まで引き上げる必要がある。

後の副作用が怖そうだ。

「んー、ちょっとした呼吸のコツだよ。気合いっていうか」とじゅらは簡単に言ってくれる。

ってことは、

もしかしてアレが出来るのか? こいつも。

嘘だろう、おい。

「なるほど。つまり○王拳ね」

それでお手軽に納得できるんか、このメガネ女は。

まあ、会長にしろじゅらにしろ、存在自体が漫画みたいな連中だからな。

「不完全ながらこれかわすとは、なんて反射神経と筋力だ。今より貴方を文字通りの怪物と認定させていただきますよ」

「何故だ! 何故ついてこられる!?」

嘉納は傷を増やしながらも器用に致命傷を避け続けているが……会長がおしている事には間違いなく、嘉納は次第に追い詰められて行っている。

あと数分でカタがつく。

……いや、ちょっと待て。

「おいおい、まさか」

嘉納の頬にさっきまであった傷が消えている。

ポロ同然になったスーツからはいっしか血の染みも消え去っており、その切り口から覗くのは……

「鱗?」

「そのなまくらではもう無理だな」

嘉納は得意げに胸を張った。

「さあ、次は何だ、どんな芸を見せてくれる?」

なんだよ、ありゃあ!?

木刀を日本刀並みの切れ味で扱える会長が達人なら、見る間に傷を再生してしまい鱗まではやした嘉納は文字通りの意味でのモ

ンスターだったわけだ。

結局、じゅらの言ったとおりになったな。

「仕方ねえな」

ヒゲ兄がざっと一歩進み出る。

「教育者の端くれとして、ここは決闘って事にしといてやろうと思っただが、ヒト対ヒトの尋常の立ち会いじゃなくなっちゃったからな……幸子、頼んだ」

「はい」

「ヒゲ兄いっ！」

思わず胸ぐらひつつかんでぶん回してしまった。

「俺は基本的に荒事に向いてないんだよ。この場合幸子の方が適任だ。何しろ人体を知り尽くしてるからな」

「そういう問題かあ！」

サチ姉は別に疑問は感じてないようだ。大丈夫なのかな、この夫婦。

しゅらあん。

……あ、抜いた。

えええっ!?

仕込みかよ、その木刀!

白衣の養護教諭が日本刀、凄い絵面だ。

「んじゃ、お願い」

「了解」

織絵の指示で小暮君が会長氏のもとに進み出、フェンシングフ

ォイルを構える。

やっぱりね。
そして、動こうとしないのが約一名。

「心配しないで。私はちゃんとローラを守るから」

そういう奴なんだよな、じゅら。

「それに私、モンスターよりはどちらかというと対物向きなの」
物を壊す方が得意、ねえ。

こんな事をやってる間、嘉納氏と会長氏は呆然と固まっていたよう。

ようやく我に返った嘉納氏が、

「ちゃんと話を聞いてたか? 日本人ならちゃんと空気を読んで、一騎打を観戦していたまえ」

と主張した気持ちも分からなくもない。

「いいえ、怪物相手ならフクロもオーケーなんですよ」

「貴女は養護教諭なんだろう? その発言は問題じゃないか?」

サチ姉はなんでバケモノと漫才やってるんだろう。

あの人は緊張感削ぐからなあ。

「で、どうする? 僕はハンディキャップマッチでも構わないが」

そして会長は実利主義だ。

うちらじゃどうあっても少年誌っぽくはならないわけね。

「余裕ね。さてはもう二段階ぐらいは変身を残してるんじゃないの?」

織絵の発想は明らかに漫画の読み過ぎだ。

「ふん、試してみるかね?」

嘉納の瞳孔が縦長に変じたと同時に、虹彩が金色に輝き始める。むくり、と身体がふくれあがり、漫画ばりにばりばりとスーツがちぎれ飛ぶ。

筋肉がパンプアップ、で済めばいいのだが。嘉納の身体はカッ

コイイでは済まないレベルまで際限なく大きくなり続けている。
質量保存の法則って何だったかな。

嘉納の成れの果て、目の前に立つ四つ足の生物をなんと説明したらいいか。

一言で簡単に表現できるんだが、あまりにも非現実的で、その単語を口にするのに抵抗がある。

こういうの挿絵とか漫画とか映画とかでさんさん見たことある、
とだけ言っておこう。

「では今度こそ全員まとめて相手にしてやろう」
うへえ。

こんなんが日本語話してると違和感あるな。しかもまた、若山弦蔵ほい洪い声になっちゃって、まあ。

この状況でそんなことを考えてる自分に呆れた……意外と適応力あったんだな、あたし。

「はあ、先祖返り、って奴かしら」

サチ姉は頬に手を当てて首をかしげ、そんなことを至極真面目に言う。

それ用法違う。しかも明らかに恐竜と違う。

「これは、まさに生ティベット、生ILM！ 主よ、感謝します！」
いらんこと言った織絵さんは変な感激の仕方してるな。しかもその感想は自己矛盾してないか？

「いいえ、まずったわね。これはとんだ藪蛇、もとい藪蛇と言ったところかしら」

あ、正気に戻った。

「言っとくけど、つづいたのはあんただからな」

まさか校庭で竜退治する羽目になろうとは、数時間前には想像

もしていなかった展開だ。

「よおし、今こそ我々仲間の力を結集して強大な敵に立ち向かう時だ、いいか、野郎ども！」

ヒゲ兄が木刀を高々と差し上げ、皆を見回した。

「「応！」」

さすがはロイヤルストレーツの伝説のヘッド、ハートのキング。
こういう時の貫禄は立派なもんだ。

応じたのは基本的に真面目な会長と小暮君だけだね。

「ノリ悪いなおい」

男の子的にはこんな人も燃える展開なんだろうが、残念ながら
半分以上女の子だったりするのだ。

「女の子は現実的なもの。やるべき事がわかっていれば、気合い
なんて入れなくても動けるのよ」

サチ姉が物わがりの悪い男性陣に親切に解説してやってる。

女性陣は誰に指示されることもなく、元嘉納氏（ああ、もうドラゴンでいいか）を包囲している。

あたしたち、即席だけど結構いいチームじゃないか。

……うーん。

だが、対峙してみて分かる。こりゃ洒落にならない。

チームワークが云々じゃない。相手が大きすぎて、どう間合いをとつていいのかわからないのだ。そもそもリーチが違いすぎる
だろ。

尻尾の一発で蹴散らされそうだし……ああ、火いとか吹くんかな、やっぱ。

仮にこっちの攻撃が届いたとして、ちょっとした瓦ぐらい厚みのある鱗を木刀やらボン刀でどうこうできるとは思えない。

どーすんの、こんな。

「さて、そろそろ作戦会議は終了かな？」

ほら、余裕だ。

恐竜のボディーに人間の知能か。畏にかけるのも無理っぽいなあ。

「俺はフェミニストだ。生意気な男どもを片付ける間、ご婦人方には大人しくしていただくか」

前脚で首筋を引っ掻くと大判の煎餅ほどある分厚い鱗が束になつて抜け落ちる。

凄まじいまでの再生力でたちまち新しい鱗が生えてくるが、抜けた鱗はそれぞれが赤黒白三色の横縞模様の蛇に変じてあたしらに迫ってくる。

「そんな真似までできるんですか」

小暮君が唸った。あまりの想定外の連続に、いつも冷静な彼も呆れぎみのようだ。

会長はいえ、さきほどから硬直したように動かない。あたしでさえ無理すればなんとか平静を保てるのに、あの彼がすくみ上がるとも思えないが……

それぞれの蛇はあたしら一人一人から二メートルほどおいて停止し、一斉に鎌首をもたげた。

うわ、こわっ。

一糸乱れぬ群れてのは爬虫類でなくても不気味。個人的にマステームとか虫酸が走る。

「大丈夫ですか、皆さん？」

竜から目をそらさずに、小暮君の背中が尋ねてくる。

「今のところはね。愛しの織絵さんも無事よ」

「……誰一人悲鳴をあげないとは。意外と肝が太いな、お嬢さん達」

いきなり蛇の群れが出てきたらショックだけど、さすがにドラゴンの後だとかかなり見劣りする。

ああ、でも毒蛇だったら嫌だな。毒……毒と言えば、

「警備の人たち、これにやられたんじゃないか？」

そう考えると腰が引けてくる。さすがのサチ姉や織絵もちよつと後ずさつてるようだ。

「さすがに保健室に血清は置いてないわねえ」

「主よ、我らを蛇の穴より救い出し給え。ついでのあつちのでっかいのもちよいちょいっとお願いします」

「ああ、それが賢明だ。そのままお祈りでもしてたまえ」

ん？

じゅらがつかつかと蛇の群れに歩み寄る。

ひょいと無造作に手をのばすと、蛇の首をつかみ上げ、うつとりと眺めた。

「これは *Lampopeltis* よ。猛毒の *Micurus* に似てるけど無毒。色も綺麗でベットに最適」

「詳しいな」

感心してるわけじゃない。むしろ呆れている。念のため。

「有毒生物の知識は乙女のたしなみですもの」

「それはない。断じて違う」

につこりするじゅらに、一応のツッコミだけ入れておく。

「警備員どもにけしかけたのは俺オリジナルのパライズスネークだが、女の子を傷つけるのは忍びなくてな」

「オリジナル？ 洗神行為もここにきまわりつてとこかしら。」

いっそ石化とエナジードレイン能力でもつけたらどう？」

織絵が吐き捨てるように言う。あいつそういうの毛嫌いしてるからな。

「遺伝子操作なんかするような輩は創造物に喰われて死ぬのがお約束よ」

そりゃまたずいぶん偏ったお約束だ。

「ゆゆしき自体ねえ。地球の生態系への影響が案じられるわ」

これまたサチ姉らしい壮大なボケ。外来魚か何かですかい。

そして織絵は、びしっと竜を指さして宣言する。

「人の恋路を邪魔する奴はイカに……いいえ、いっそトマトにでも食われて地獄に堕ちるのがお似合いだわ」

「トマトで……トマトに喰われる竜……想像出来ん」

ヒゲ兄の疲れ果てたような声。いちいち考えるな。感じるな。おとなしく棚上げしとけ。

“……”

竜もいささか呆れた様子。ふうん、意外に表情出るな。

こうなると会長さんのほうが作り物みたいだ。先ほどから発言もなくじっとしている。この場の主人公の筈が、今や蚊帳の外。姫さんが固まってるのは仕方ないとしても。

あー。

ここでピンと来た……あたしや鈍い方かな？

選手交代。こんどはじゅら。

「そこにいるのはちょい悪だけど実はフェミニストのドラゴンさん？ それとも悪ぶってみせても女の子は傷つけられない大きな鶏さん？」

あいたー。実に痛いところを突く挑発。

“む”

これにはさすがに気を悪くした様子。

よし、あたしも。

「きつと本体も無害な可愛いトカゲちゃんじゃないのか？」

その気になればあたしら全員を一瞬で蹴散らせるであろう巨竜が、あくまでも女性陣には手を出さないでいる。つけ込む隙があるとしたらそこだろ？

“では、こういうのはどうだ？”

巨竜はばきりばきりというモノスゴイ歯ぎしりをしてから、大きく口を開いて十何本かの牙を吐き出した。

へー、サメの歯みたいになんて幾重にもなってるんだ。

さて、牙が変化したものは今度は蛇ではなく、

成人男性ほどの大きさの、つやつやした磁器のようなのっぺらぼうのヒトガタ。

関節のないデッサン人形、とでも言ったらイメージが伝わるだろうか。ただ人形と大きく異なるのは、その両腕は鋭い刃になっていること。

そんなのがひょこひょこ歩いてきて、あたしらの前に立ちふさがる。

“こいつらは動くものを攻撃する。人の首など一撃で斬りとばすぞ”

「……通販のセラミック包丁？ 今ならお値段据え置きでもう一丁とか？」

「伝説に聞こえた『竜牙戦士』^{スバレット}とは小娘相手に大した大盤振る舞い、と申し上げたいところですけど……。結局自分の手は汚せないのね？」

かちん。と音が聞こえた気がした。

竜の目が据わりまくってる。

織絵、じゅら、ちょいやり過ぎ！

ずん。

竜が一步踏み出す。

「駄の悪いお嬢さん方にはお仕置が必要だな。どうやら一人ぐらいは殺さねば分かってもらえんようだ」

視線とともに猛烈な殺気がこちらに向けられた。

やっべー。

……感謝する。

気闘法を初めて見せたばかりというのに、彼のやろうとしていることを察し、最大限のサポートを行ってくれた。まったく何という少女達だろうか。

女性陣の決死の時間稼ぎのおかげで、彼に可能な限界、師匠の言うところの「十倍」級までの練気を終える事が出来た。

この状態であれば、木刀の突きであっても120ミリAPFS DS弾に劣らぬ破壊力を発揮、すなわち主力戦車の正面装甲を貫通しうる計算だ。さしもの竜の鱗であっても食い止めることはできないだろう。

そして今、考えられうる最大の隙さえ作ってくれた。

……あだやおろそかには使わん！

一撃必中！　そして必殺！

練り上げた気を解放、木刀に集中する。

「せえええええいっ！」

前脚の付け根、心臓のあるとおぼしきあたりをめがけて、超加速での突進からの突きを放つ。

とった！

勝利を確信した瞬間、背筋を冷たいものが走り抜けた。

こちらを振り向いた竜の表情に余裕があるのは何故だ？　どうして頬が膨れている？　口元から漏れる小さな火花は!!

局限まで加速された思考のうちででなお本能の命ずるまま、瞬間的に術式を切り替える。攻撃から防御へ、炎から雷と風へ。

竜のはき出した光球は当たりを真昼のように変えつつ、直径数メートルに及ぶ放電球となつて丈司を襲つた。

木刀の周囲に展開した電磁場で即席の加速器を形成する要領。辛うじて直撃コースから逸らしてやる事に成功。

球体は校舎の一部を削り取っていき、虚空で炸裂する。単純なプラズマ球ではなく、何らかの魔術的な修飾が加わっているようだった。

何しろ竜の代名詞とも言える炎の息だ。人の身でドラゴンブレスの一撃をかわせただけでも御の字だろう。

「くっ」

猛烈な疲労感が意思に反して丈司に膝をつかせる。

「ふん、何か企んでいるとは気づいていたがな、面白そうだったのであえて乗ってやっただけだ」

竜は爬虫類じみた顔に人間くさい嘲笑を浮かべた。

なんと腹立たしい顔だろうか。

「今のをかわすとは驚いたが、次はないぞ。さあ、そこにひれ伏して彼女をさし出すと言え」

力づくでならいつでも奪える。だが竜は、嘉納は、あくまでも

丈司に負けを認めさせたいのだ。

“大切な友人達を一人ずつ殺していくかね？”

竜牙戦士達がびくりと動く。

“さて、何人目で根を上げるかな？”

こいつは最初から、ただ丈司をなぶって楽しんでるのだ。

“まずはそちらの眼鏡娘からか？”

「敬虔な眼鏡っ娘を殺すと百代祟るわよっ！」

……折部くんのは演技でなくて素なのかね？

いや、つきだしたロザリオが震えている。この期に及んでなんと気丈な娘だろうか。

彼女にしても小暮君にしても、狩谷君や三条君にしても、たいした義理もないのによくここまでついてきてくれた。

狩谷夫妻の助力もだ。教師の立場にあることを考慮してもたつぷりおつりが来る。

命懸けで意地を通そうとするのは（無駄死にと同義語だが）簡単だ。

だが、彼らどころか佐倉君にすら危害を加えない保証がないのだ。

「わかった。彼らに危害を加えないでくれるなら、降伏の準備がある」

“貴様、条件を口に出来る立場か？”

憎き丈司を黜れるのが楽しくて仕方ない、と言わんばかりの表情。竜面であっても吐き気がするほど醜悪だ。

“いや、この通りだ。佐倉君、約束を守れず悪かった”

無条件降伏の表明のため土下座しようとした時、

「いや、あきらめるのは早いですよ、会長」

小暮君がそう言った。

「そもそも竜になったのは間違いだったわね、残念でした」

「そうね、そして彼を破っちゃったのが運の尽きかしら」

三条君が、狩谷教諭（細君の方）が、苦笑しつつ顔を見合わせている。

どういう意味だ？

生物としての格が違いすぎる。奥の手を破られてしまった以上、誰にも怪我はなくとも、刀折れ矢つきしていると同じだ。

ただ一撃をしのぐだけでこのさまだ。彼らにどう見えても、もはや勝負は決している。

“黙れ、お前達に発言を許した覚えはないぞ！ ん？”

視野の端で動くものを見いだした竜は、

“おお！ ようやくその気になってくれたか！”

歓喜の声をあげた。

「なんで……」

ポニーテールに赤いリボン。最後尾で守られていたはずの彼女が、ゆっくりと竜の前に向かっていった。

“よし、道を空けろ”

竜牙戦士の垣が割れ、護衛のように彼女の両脇を固める。

いつものぼけーとした彼女にはない凛々しさと決意に満ちあふれ、おそろしく整った容貌も相まって本物の王女か巫女のような印象を与える。

まさか。

「だめだ、明日香！」

きつと彼女は会長氏とあたし達を守るために、自分から竜に身を捧げるつもりだ。

「何がダメなのでしょう？」

彼女は制服のワンピースのウエストに手をかけ、ベルトを引き抜いた。

「ここまでされて今さら情けをかけるとでも仰います、ローラさん？」

……は、い؟؟??

がしやがしやーん。

明日香がベルトを鞭よろしく横なぎに振るうと、数体の竜牙戦士が殴り飛ばされて衝突。床に落ちた瀬戸物の壺のような音を立てて砕け散った。

ありや、意外と脆いなー。大陸製の激安コピー品か？

あんまりといえばあんまりな展開に、一瞬どうでもいいことを考えてしまった。

「ああ、あれはいいものだったのに残念」

織絵は織絵でいい感じに錯乱してるなあ。

「なぎ払え！」

がしやがしやーん。

「ひびが入ってやがる、早すぎたんだ！」

がしやがしやーん。

「どうしたそれでも世界で以下略！」

がしやがしやーん。

相手が攻撃してこないのをいいことに、明日香は具現化した伝説を壊して壊しまくる。織絵もノリノリでぶち切れまくってる。さっきのよっぽど怖かったんだな。

それにしてもなんていうか、この音は爽快感というかカタルシスがあるよね。一発逆転、ブラボーって感じで。

あつという間に、あたりは頑固な焼き物職人の窯の前のような有様になってしまった。

嘩然とする竜なんて初めて見た。いや、正確にはドラゴン自体初めてだけどさ。

「あ、あの、佐倉さん？」

女の子におそろのおそろ声をかけるドラゴンってのもなかなか見られるものじゃない。

「嘉納さん」

「はい……」

「真剣な申し出であれば考慮にも値したのでしょけれどね。貴方にとって私は性悪ヴァンパイアの代用品でしかないというのに。わたしが会長さんを選ばない筈がありませんでしょう？」

「それでも俺はあらゆる点でそいつより優れて……」

「お黙りなさい！」

「……」

凄い迫力。美人が怒ると余計に怖いな。

あの明日香にこんな一面があるうとは。

「まずは毒に中てた方々を治療なさいまし。会長さんにこれまでの無礼の数々をよくよく謝罪して十分な賠償をした上でこの件から手を引くと約束なさるなら、命だけはたすけてあげなくもありません」

竜の身体が震えてる。一喝が堪えたかな。

今後はくれぐれもこの娘に逆らうのだけはやめようと思う。

「ちょ」

竜は血走った目を見開く。

“調子に乗るな、このガキがあ！”

巨獣は一声咆吼すると、革の翼を開き、両の後ろ足で立ち上がった。

やべ。いくらなんでも今のはちょっと調子乗りすぎだ、明日香っち。

「佐倉くん！」

会長のせっぱ詰まった声。

“この俺をコケにしおって！ 貴様らまとめて皆殺しだ！ いや、この町ごと焼き尽くしてくれる！”

キレた。完全にキレた。ぶち切れた。

はばたきと突風。巨体が宙に浮き上がる。

「上から来るぞ、気をつけろ！」

言わずもがなのじゅらの忠告。

が、

ずどすん。

竜はそれ以上上昇することはできず、轟音とともに地面にたたきつけられる。

明日香が竜の足指にベルトをからめて引きずり落としたのだ。

「はあ、さすが本職」

意味分からん。

サチ姉は感心したように言うが、本職がどうかかバイトがどうかという問題じゃない。

今の物理的におかしいだろ、質量差どんだけあるよ。また気とかいうやつか？ そんな適当で便利なもんなのか？

“げふう”

「もう謝っても許しません」

指をばきばきと鳴らしながら、明日香が宣言した。

「お仕置きです」

“ひい！”

火を噴こうと息を吸った直後のアップパーカットが巨体を反り返らせる。

無理矢理口を閉じられた形になり、口中でプレスがはじけてスパーク。白煙が頭部を覆う。

竜は仰向けに倒れ、意外に華奢な造りの翼が太い胴体に押しつぶされてめきめきと嫌な音を立てた。

竜の腹から胸、首の上を駆けていった明日香は、起きあがってきそうな下顎を蹴り上げ、再び頭頂部を地面に打ち付けさせた。

そのまま喉の上にのしかかり、両膝でがつつりと押さえ込む。

「勝ったな」

織絵がやたら低い作り声で言った。

ああ、そこで首を押さえられると起き上がれないのか。人間で言うところの仰向けで寝てる状態でおでこを押さえられるのと同じだ。

しかも竜の首は頭の後ろについてるから、明日香は顎の下にいる事になるわけで、噛みついたり火を吹いたりするどころかきちんと視認することすら難しい。

両拳によるラッシュが次々と下顎から鼻面、横っ面にたたき込まれる。

竜は前脚の爪を振り回してとらえようとするが首を伸ばされきった位置までは届かず、そのままマウントポジションで顔面タコ殴りされるがまま。

いやあ、なんともシュールな光景だ……

「ま、待ってうぐっ」

あ、しゃべろうとして舌嚙んでる。

フルボッコってのはこういう時に使う言葉なんだな。しみじみ最初こそドカン、ボゴンという打撃音だったが、途中からグシヤ・メキッという何かが押しつぶされ、砕けるような音に、そして水音混じりになっちゃった。

うへえ。

「が、ぐ、げ、ひ、び、べ、ぼ」

詳しくは描写したくないなあ。グロ注意。

攻撃や抵抗の目的をもって動いていた手足がやたらめったら振り回すだけになり、そして動かなくなり。

しばらくは四肢の先がびくびくと痙攣していたが、ついにそれさえもなくなり、完全に無反応になった。

それでもしばらくはだめ押しの攻撃を続けていた明日香であったが、ようやく首から降りてくると今度は首筋に手をあてて脈を確認したり、ポケットから出したペンライトで目玉をてらしたりしている。

あ、十字切った。

……

嘉納氏改めドラゴン氏もまさか女の子に素手で殴り殺されようとは思わなかったろうなあ。

一同言葉もなく啞然としていたが、明日香はばんばんと手を打ち、宣言した。

「私たちの勝ちです。みなさんのおかげです。本当にありがとうございます」

いや、あたしもじゅらも織絵も小暮君もヒゲ兄夫妻も何もして

ないけどな。

会長さんも結局竜にダメージを与えられてないし、明日香がほとんど一人でやったわけで。

つか実感ねえ。

「警備員の方々をお願いしますね。魔法の毒なら術者が死ねば消えているはずですから」

いかにもご都合主義的な設定だが、そうあってほしいものだと思う。

「狩谷先生？ ちょっと血がついてしまいましたので、宿直室のシャワーを貸していただけませんか？」

ちよっとって……両拳は当然として、全身返り血まみれなんだが。ジークフリートばりに不死身になってたりしてな。でももともと似たようなものか。

ヒゲ兄は口を開けたまま、こくんこくんと首を縦に振るのみ。

「じゃあ、私の着替えを貸してあげる。一緒に行きましょう」

さすがサチ姉、マイベースだな。

それにしても、街灯の薄明かりの中とはいえ黒髪に黒の制服とのコントラストにはある意味凄絶な美しさがある。美少女にはどんな格好でも似合うのですね。

佐倉君が竜を倒すや、五分とおかず警察が駆けつけ、自衛隊が駆けつけた。

後になって思えば、竜が何人払いの結界のようなものを張っていたのかもしれない。古い特撮で悪役が何とか空間と称する採石場に主人公を引っ張り込むようなものだ（この例えは……師匠

に毒されてきた気がする)。

「報道には既に手を回した。アレを片付け終わるまでは現場に民間人を近づけるな。視線が通る高層建築にも気をつけるように」

「了解。現場を封鎖、視線の遮断に十分注意します」

その先頭に立って指揮をとっていた制服でも迷彩服でもないボブカットのオシャレ眼鏡は、丈司がよく知っている人物で、

「丈司君、やってくれたわね」

その名を新川さおりという。

市内の大学附属高の教諭というのは表向き。大きな声では言えないが、ここいら一体を統べる旧家群の現当主だからで、事実上珠坂を取り仕切っているに近いというところでもないお人だ。

「僕は何もやってませんが」

「拗ねるな拗ねるな。同じ事よ。君の相棒の仕業なんだから」

と、見てもいないのにそんな事を言う。

「プレスによる校舎小破は屋上にヘリコプターを降ろしたときの事故って事で処理しておいて」

「はっ」

部下(?)に指示をだしながら、雑談に興じる。

「それにしても素手の打撃で魔竜を撃破とは」

この人に掛かるとちらっと残骸を見ただけでそれが分かるらしい。我が後見人ながらつくづく底知れんヒトだ。

「分かっていたとはいえ、実際に見せられると呆れるしかないわね」

後ろから大きなため息。

「……クイーン、あんたが絡んでたのか?」

「ご挨拶ね、キング。ああ、貴方の後輩達の命には別状無いから

安心なさい」

今度は安堵のため息。

「それは幸いだが、教え子の前でその名前を呼んでくれるなよ。今の俺は教師なんだから」

と狩谷教諭。

「あなたもね」

この二人、ずいぶん昔からの知り合いらしい。

ハートのキングとクイーンという二つ名を持つ二人だが、別に色っぽい関係ではなかったようだ。

「私がハートの女王なら、貴方はさしずめハートの王様か」とか師匠が言ったと言わないとか。

出会った当時の彼の立場、長身と立派な髭や名前の語感がとある歴史上の人物を彷彿させる、というだけの事らしい。

師匠の方は留学時代に友人につけられたあだ名らしいが、由来は言わずもがなだろう。

閑話休題。

「動物園から逃げ出したニューギニア産オオトカゲが警備員に怪我をさせた挙げ句学校に逃げ込み、合宿中の女生徒を襲おうとした。それを丈司君達が機転を利かせて化学室ごと爆破してやつけた。そういう事でよろしく」

相変わらず有無を言わさないが、偽装としてはそんなものだろう。

さすがに「夜の学校にドラゴンが出たので女子高生が殴り殺しました」とは報道できないからな。

「はあ、そんな映画ありましたね」と折部君。

「でも個人的には今もまだ映画見てる気分だわ」

「人生はすべからく映画のようなものですよ」

「人食い怪獣はスクリーンの中だけで結構。自分が喰われない保証があるから楽しいのよ」

「そこは同感です」

小暮君とは不思議な組み合わせに見えるが、性格的には実にお似合いだ。

「で、説明していただけますか？」

「何を？」

と、師匠はすげない返事。

この人はやたらと腕組みが似合うな。

「あの、お姉さん関係者ですか？ 詳しそうですけど」

おそるおそる、といった感じで狩谷君が質問する。

「とりあえず、收拾の責任者だと思っておいて。後のことは任せておいてもらっていいわ」

「じゃあ、分かっていることだけでいいので、教えてもらってもいいですか？ あの竜とか、明日香っちが無茶苦茶強かったのとか、正直わけわかんないんですが」

「何も見なかったことにしておいて……って言っても無駄よね」

一同頷く。

「俺からも頼む。完全に理解の限界をこえてるんだが」

師匠は、仕方ないといった表情で頷いた。

「私にも分かっていることはごくわずかでしかないけど。丈司君が使ったであろう気闘法なんてのはただの技術だけど、魂の持つ回路としか言えない、生まれつきの特殊能力の持ち主が結構居るのよ。そんな超能力の一つに、時間を超えた存在である魂を紹介し

て過去や未来の自分との混線を起こす、というものがあるわ」

「えっと、それはつまり、未来の知識を知ったり、若返ったりできるわけですか？」

狩谷君は適応力があるというか、突拍子もない話に対しても意外に理解が早いな。

「ええ。前世の記憶を知る、というのはこれの一種だと考えられる」

師匠は頷いて肯定する。

「ははあ」

と、折部さん。

「それで分かった。若返れるのなら、遠い前世の姿を取り戻すことも可能なわけね」

「そういうこと。あの竜はあるいは遙かな未来の彼の姿なのかもしれないけど、それは些細なことね。ま、こういうのは口外しない方が身のためよ。脅しとかじゃなくて、壊れたと思われるのがオチだから」

「オーケーだ。そこまでは分かったという事にしとく。では佐倉のあれはなんだ？ 訓練なぞ受けてるはずのない女子高校生がものすごい戦闘能力で終始竜を圧倒してた。相手の弱点も何も知り尽くしたような戦いっぷりだったが、やっぱり過去や未来と関係があるのか？」

「そこはわからないけど。おそらく、竜がいなければ発動しない、ただ竜を殺すことにだけ特化した、彼女自身の能力だと私は考えてる。まさに『屠竜の技』なんだけども、それが役に立っちゃったと」

そこまで言って小暮君を見た。

「そんなところじゃないの?」

「ええ、同意見です」

そういえば、佐倉君があなる直前、彼や三条君、養護の狩谷教諭が言っていた。あきらめるのは早いと。

それをここに二人に問うてみると、

「理由は定かではありませんが、突然『わかった』んですよ。佐倉さんが『そういうもの』であると」

「右に同じですよ」

と、何の参考にもならない。『わかる』人間とそうでない人間にはどうい違いがあるのだろうか?

「……今思い出しました。以前彼女の話をしたときに、『相性はバッチリ。でもドラゴンにだけは注意』と仰った事がありましたね。それも直感ですか?」

「え、あのジョーク分かってなかったの?」

ジョーク?

「丈司君は自分が誰で、何を彼女にしたのかも認識してなかったと見えるわね。まったく不肖の弟子なんだから」

「はあ?」

「言霊よ言霊。名前つてのは大事だと何度も言っただけなんだから」

師匠はいつもこうだ。はぐらかすような物言いが多い。

「さて、私は事後処理が残ってるからこれで失礼するけど、貴方たちは佐倉嬢が戻ってきたらさっさと退散した方がいいわ。もう噂は広まってる頃だし、すぐにもお迎えが来るでしょうよ」

「また借りが出来たな、さおり」

「いいってことよ。このために珠坂に戻ってきたんだから」

狩谷教諭の礼を適当に流した師匠は、三条君の方を見やり、微妙なことを言い残した。

「議長さんは今回は大人しくしてくれてたようだけど、他の姉妹にも伝えておいてほしいわ。ほどほどにしておいていただけると有り難いって」

「よく分かりませんが、ご期待に添えるように努力しますね」

「ではアデュー、サンジョルディー君」

そう言い残すと、師匠は右手をひらひらさせながら行ってしまった。

また状況に不相应な単語を。

サンジョルディーの日というのは、互いに本を送りあう四月のばつとしない記念日。確か守護聖人たる聖ゲオルギウスの名前から来ているはず。

聖ゲオルギウスといえばドラゴン退治の英雄。ドラゴン繋がりで。

いや、何かが引っかかる。

……

……………

……………

くらくときた。

「扇戸丈司、すなわちセント・ジョージか!」

「あー」

折部君がぼん、と手を打つ。

「その聖ジョージの剣の名前が、『アスカロン』だわ」
呆れたような笑みを浮かべて付け加える。

「ふざけた話ね」

「まったくだ」

シャワーから戻ってきた佐倉君はほとんど何も覚えていなかった。

「竜をやつたんですね。さすが会長さんです」

おい。

「でもこうなってしまうと可哀想ですね」

やはり彼女はこうでない。

もうあんなふうになる事はないだろうが、珠坂近郊に別の竜が棲んでないことを祈るばかりだ。

龍神伝説のあるような土地には近づかないようにさせねば。

修学旅行先とかでアレをやったら大事だから。

その後、丈司は明日香とともに迎えの車で佐倉邸へと向かった。

「お明日香、良く無事だったな！」

「会長さんがたすけてくださいましたから」

くすぐったいというか後ろめたいというか、複雑な気分だ。

「君には感謝してもらいな。娘を守ってくれてありがとう。」

この通りだ」

と、佐倉理事は三度も頭を下げてくれた。

「いえ」

「新川殿から話は聞いた。公式にはトカゲは逃げたことになっているが、実は嘉納君がわざとやらせたらしい。彼は既に逃亡して現在行方不明だそうだよ」

「はあ、悪い奴ですね」

なけなしの良心が痛む。

「しかし新川殿の弟子なら、なぜそれを先に言わなかった？ 反対などしなかったものを」

「師と結婚するわけではありませんすまい。自分の力でやらないと意味がなかったのですよ」

「いや確かにその通りだ。君は十分に以上に手腕を示してくれた。恐れ入ったよ。ゆくゆくは会社も学園も継いでもらうつもりだ。是非よろしく頼む」

「いい、こちらこそ身に余る光栄です」

握手に応える。

「そうそう、その後の展開によつてはこの学園の買収まで考えていたのですが、無茶をせずにすんで幸いでした」

その瞬間の理事の表情はちょっと見物だった。

「……いやまったく、君を敵に回さなくてよかったよ。明日香、

いい男を見つけたな」

「はい、自慢の会長さんです」

星の御光教本部地下。垂氷の間。

「予定通りの展開だ。これで辻褄が合う。まだ私の祝福は続いているようだよ」

男が言うと、黒い巫女が鉄格子越しに応えた。

「はい」

垂氷は暗い喜びをたたえた微笑を浮かべ、言った。

「あの方では、やはり及びませんでしたね、くすくす」

「彼はもう居るのかね？」

「ええ、ここに」

彼女は豊かな胸に手を当てると、

「嘉納様は既にわたしのもの。わたしの一部。これからずっと、一緒です」

「お前の姉妹達に対抗するにはまだまだ力をためる必要があるな。予定通り、もっと信者を集めねば」

「ええ、主さま」

珠坂大学医学部付属病院にて。

「やはり油断ならん。じゅらが無事で本当によかった。今後は安否確認と送り迎えを徹底しよう」

昨夜の出来事を話題にすると、三条君はぐっと拳を握ってそう言ったものだ。

「……少しは嘉納君の事も心配してあげたらどうかかな？」

「心配はしているが、俺に出来るのは早いところ出頭して罪を償うように祈る事だけだ。だからこそ手の届くところにいるか弱い妹を気にかけているんだ」

うーん、あの娘は三条君が思ってるほどか弱くないんだけどなあ。少なくとも大トカゲに食べられたりするタマじゃないよ。

「……あはははは」

あれから約二週間が過ぎた。

噂をさんざん利用したこの僕が言うのも何だが、事件にはたっぷりと尾ひれがつき、近隣で口の端に上るようになっていた。

なんでも、遺伝子操作で作り出された尻尾までたっぷり十メートルはある巨大トカゲが学園を襲撃。毒を吐き、破壊の限りを尽くしたが、生徒会活動で泊まり込み作業中の生徒と宿直の教師を率いた丈司がこれを迎え撃って倒した、というのだ。

せっかく伝える内容をデチューンしたというに、伝達の過程ではほとんど元に戻っているのが笑えるというか笑えないというか。

『『竜殺しのセントジョージ』だ。この僕が』

皮肉なものだ。核心だけが違っている。

「実際にはたいしたこと出来なかったのにな」

ポニーテールの少女は不思議そうに彼の顔を見、続いて自分の両手を眺め、ちょっと首をかしげた。

少しぐらいいはあれを覚えていたのだろうか？ でも彼女は何も

言わないし、何も尋ねない。

このゆるい女の子はいつも自分の思いに素直で、信じたい事を信じるから。だから僕はこの娘のための英雄であり続けねばならない。

「いいえ、会長さんはとてもかっこよかったですよ。だから皆さんが褒めてくれると、わたしも鼻高々です」

と、明日香はウインクして笑った。

「ありがとう」

竜殺しを飼っていても、やっぱり彼女は彼女、ゆるくて頼りなくて使えない僕の婚約者なのだ。

だから、屠竜の技でもいい。師匠の元でもっと腕を磨こう。二

度と聖剣のお出ましを願わなくて済むように。彼女が僕の好きな
明日香でいられるように。



一つの世界、だから――

Fukapon

真つ白。窓の外は目も眩みそうな景色だった。

対してここは別世界。日は当たらず暗く、風がよく通る社会科準備室。

「杏子、気持ちよさそうだなあ」

全開にした窓枠に寄りかかり、眼下を眺める彼の独り言。まさかそれが届いたわけでもなからうが。

泳ぎ終えてプールから上がろうとする彼女は、上方が五階にある彼を目敏く見つけた。

「こらーっ、そこーっ、覗くなーっ」

戯けた大声と満面の笑みで両手を振る彼女に、彼もまた、小さく手を振った。しかし彼は苦笑い。

「目立つことはやめてくださいよ……」

それでもやはり彼女の笑顔には抗えず、首を引っ込めようかと、ましてやあとで注意しようなどとは思いつけない。

神田輝一は彼女の去ったプールを、まだぼーっと眺めていた。

「きいーくーんっ、たっだいまー」

開け放たれたままのドアに全速力で突っ込んできたのは泳いでいた彼女、上野杏子。輝一は慣れたもので、穏やかに窓外から目を離し、振り向いた。

「お帰り、杏子」

そして待ち侘びていたことを控えめに迎えるのがお決まりの光景だ。が、しかし。

「はあ、なんて格好をしているんですか……」

今日の彼は口をぽかんと開けんばかり。

「だつてー、きいくん早く会いたかったんだもんっ」

「……わかりましたから、着替えてください」

昨日と変わりなくはしゃぐ彼女をさもありなんと受け入れそうにもなったが、彼の立場上、ここは一線を引きたい。溜息は半ば自制のためだった。

「えー、実は嬉しいくせに。水着だよ？ み・ず・ぎ・っ！」

しかし残念ながら彼の努力は通じなかったらしい。彼女はその場で「見て見て」と身体をくるりと回した。

水泳部員とは言え競技に興味の薄い彼女が着ているのは、昨今のハイテク水着ではなくベーシックな競泳水着。高めのレッグカットと大胆に開けられた背面が、すらりと伸びた身長と相まって美しいプロポーションを際立たせている。

しかし動きがどうにも子どもっぽく、故にか輝一の理性も引き続き保たれている。

「ダメです。とにかく着替えてください、ね？」

「仕方ないなあ。きいくんって意外と堅いよねえ」

「そりやそうですよ。ここは学校なんですから。ただでさえ生徒と軽いノリで接していると目を付けられているわけで……」

お説教でも始めそうな彼に対し、ぶくうつと頬を膨らました彼女はあっさり着替え始めた。

「はいはい、今すぐ着替えませう」

着替え始めた、その場で。右腕をアームホールから抜き。

「つき、きよこ、何してるんですかっ」

状況にあたふたして目を逸らす彼を見ながら、杏子は何食わぬ

顔で続行。次は左腕をアームホールから抜いた。

「何って、着替え。脱がなきゃ着られないでしょ？」

「あー、ちょっと待ってっ！カーテン閉めて出てくからっ、ストップ！」

対する彼ははいよいよ大慌てで動き出すが、まさに手遅れである。すでに両肩を露出、一枚も纏わぬ杏子が一枚上手だったようだ。

「えー、きいくんに見せてあげようと思ったのに！」

「ああああああもうっ、見せてるじゃないかっ！僕は出てくからっ！」

たとえ手遅れだろうと流されるわけにはいかない。輝一はピシヤリと扉を閉じ、部屋の外で崩れ落ちた。

「あんまり困らせないで……」

抱える頭の中が日焼けから逃れた真っ白な胸で占拠されていることに、彼はまた一段と深く、溜息をついてしまう。

「うん、学校の外に出たね。手繋ごー」

「まだ学校のそばでしょう？」

「ほらあ、その言葉遣いもやめてよー。恋人っぽくなーい」

「はあ、もう、バレたら大変なんだよ……」

「うんうん、よしよし。ご褒美にこうしてあげるーっ」

校門を出て行く、一組のカップル。

高校ともなれば珍しい光景でもない。しかし、制服姿の女の子が抱き寄せた腕の持ち主が、制服ではなくスーツを着ているパターンは稀少だと言えよう。

「せめて電車に乗ってからにしない？」

「やだー」

生徒と教師のカップルである二人はご多分に漏れず、極めて難しい問題を抱えていた。二人の関係を学校に知られるわけにはいかないのだ。そこで校内では仲のよい生徒と先生として生活することを約束していたが……。仲のよい、の程度が……。

「私はバレたって平気だもん。きいくんだって大丈夫だと思うけどなあ？」

杏子の方はこんな感じだ。今も注意などどこ吹く風で、人並み以上ある胸に愛しい腕を埋めている。

「大丈夫じゃないって……」

「そかなあ？　だって保護者がおっけーしてるんだよ？　今日だって一緒にお夕飯だし？」

「それは、そうだけど……」

彼はまたあえて溜息をつきながら横を向くと、まん丸の瞳が投げる視線とぶつかった。

「私だって、少しはわかってるつもり。でも、きいくんといると止まらないだもん……」

幼さの抜けない、イチゴミルクのように甘ったるい口調。照れることなくまっすぐ放たれる言葉に、彼の頭やら心やらは撃ち抜かれそうにもなる。しかし今のところ、彼は辛くも交わし続けている。

「……うん、でも、ダメだよ？　あと一年半だから、さ」

「長いなあ、卒業まで。でもでも、電車に乗るまでだったらすぐだもんねっ」

ふわっと甘い香りが彼の鼻をかすめる。

「きいくん早くう」

杏子はショートヘアを跳ねさせ数歩先に出ると、輝一の方を振

り向き手を引つ張る。

「うあつ、危ないって」

「大丈夫大丈夫。さ、電車来ちやうよつ」

繋がれた手は改札を抜け、ちやうどやってきた電車へと乗り込んだ。

「ただいまーつ」

「お邪魔します……」

杏子は彼の腕を抱いたまま自宅の扉を開け、心も開けて元気に挨拶。

対して輝一の声は、様子を見るかのようにそろりと出された。いくら家族に知れたこととは言え、教師がこの状態で生徒宅に伺うのはいかがなものだろうか。後ろめたさは隠しきれない。

だからこそ彼とくっついて入ることが、杏子にとっては大切なイベント。彼が自分を意識してくれている証を確認すると、彼女は満足げに、達成感に溢れた顔で出迎えを受ける。

「お帰りなさい。ふふつ、相変わらずの仲良しさんねえ」

現れた杏子の母、桜子^{さくらこ}もまた、彼の面持ちに喜んでいる。

輝一が初めて杏子の家に招かれたとき、杏子の無邪気さはこの人譲りなのだと実感させられた。あれからいつだって、桜子は混じりけのない笑顔で現れる。

「先にきいくん借りるね？ さ、私の部屋に来てっ」

「ちょ、杏子、靴ぐらい揃えなきや」

すっかり上機嫌の杏子は、奥の階段へとずんずん歩み出す。左手に繋がった彼が制止するのもお構いなしだ。

「んーいいっていいって、ほらー」

「済みません……」

輝一は腕を引かれる中でも何とか二人分の靴を揃え、形だけでも頭を下げる。

対する桜子は、むしろ朗らかに今日も言う。

「気にしないでください。もらい手が決まれば、おてんばでも問題ありませんわ」

「もらい手って……」

「ふふつ、どなたでしようねえ？」

杏子を御しきれない彼が、我が娘たる杏子向きだと思っていることは、彼女の常々の言動から明らかだった。

全く裏のない、言葉通りの桜子の科白に、輝一は反応を迷いかけたが。

「はいはい、行くよー」

「あーつ、あ、引つ張るなああつ」

反応する余裕すら与えられず、二階にある杏子の部屋へと連行された。

桜子が二人の後ろ姿に改めて笑みをこぼしながらリビングへ戻ると、一人の女性がソファーに収まっていた。

「上野さん、上野杏子さんのお友達ですか？」

彼女は日常そうであるように、桜子を瞳の真ん中で捉え淡々と問うた。

「ええ。でも友達じゃなくて彼氏、ね。せっかくですからみんなでお食事と思ってっ」

「教師が生徒の恋人を認めるというのは、少々複雑なのですが」
対照的な二人のやりとりは硬さが抜けずにいたが、方や杏子の

母、桜子である。会話に困ることはない。

「あらまあ。教師同士はよくつても？」

「……………」

彼女の視線が揺らめくのを認め、桜子は頬を崩した。

「なあんて冗談はさておき。今時珍しくもないでしょう？ 高校生ですもの」

そして年甲斐もなく、スキップしながらキッチンへと立ち去った。

「今日は、あなたにとつて忘れられない日になりますわ」

杏子とそっくりの笑顔はあからさまに「いたずらを用意している」と言っていたが、今の彼女には気付けるはずもなかった。同じ「上野」姓であることを知りながら、階上の元氣すぎる女子生徒が、桜子の娘だとは思いつかなかった彼女なのだから。

杏子の部屋では今まさに、元氣すぎると形容されるにふさわしい口論が起きている。

「お姉ちゃん！ なんでこんなところで水着着てるのっ！」

輝一を連れて自室に飛び込まんとドアを開くと、予想外の光景が二人の目に飛び込んできた。

小中学生っぽい女の子が、上半身肌色のまま、そこに。

「えー、だってえ、試着は部屋でするものじゃないの？」

その正体は、共用の自室にてプライベートタイムの真っ最中だった杏子の姉、桃子。

「……そ、そうだね、試着は部屋だよ。で、でも、鍵かけるとか！」

「桃子たちの部屋、鍵ないよう？」

「……そ、そうだった、鍵ないね。……もうっ！ とにかくお姉

ちゃんが悪いの！」

ルールにしていたノックもせずに入ったのだから非は杏子にあるが、彼女はもはや冷静な議論ができる状態になかった。一番の問題である桃子の上半身をはだけさせたままにしていることから、それは明らか。

おかげで彼女の後ろに控えていた輝一には、しっかり見えてしまふ。白いブラウスを着た杏子の背中と、白い素肌が曝された桃子の胸。身体だけでは何から何まで似ていない姉妹、見えるのは真っ平らな胸だ。

故にか溜息をつくこともなく、彼は声をかけた。

「あのー、せめて何か着た方が——」

「あつ、早く服着て！ それとっ」

くるりと振り返った杏子は、部屋の前で突っ立っている輝一に命じた。

「きいくんは見ちゃダメっ！ あっち向いてて！」

「あ、ああ、そうだよな、ごめん」

輝一が一八〇度ターンするのを見届けて安心した杏子だったが、背後の桃子から一言。

「杏子ちゃん、それは可哀相よ？ 私は全然構わないだから」

そして彼女はトントンと軽いステップで杏子を通過し、輝一の隣まで歩むと。

「輝一さんはこーゆーのがお好きと見ました！ どうです？ スクール水着。マニア好みの旧スクにつるべたっ娘ですよ？」

「い、いや、僕は……」

横にいる少女、と言うには年を過ぎている彼女は、これだと言わんばかりにすり寄ってくる。透けるように白い上半

身を、露出したまま。

杏子がいる手前、たとえいなかったとしても彼の道德観によれば、今、この状況においては絶対に僅かでもちらりとでも見るわけにはいかない。彼は間違いないきようにと堅く目を瞑って上を向いていたが、それが却って仇となった。

「べた、水抜き、さらにはつるの魅力までも実際に触って――」

固く握られていた左手を小さな両手が拾うと、いとも簡単に自身が、たと称する胸に――

「きいくんっ！……私が見せたときは冷たかったくせに」

「ち、違うっ――」

杏子は大慌てで二人の間に入り、発せられた鋭い声を反射的に否定する輝一。

しかし桃子は余裕綽々でいたずらを続けている。

「あらあら、杏子ちゃんっては何を見せたのかしら。私の妹が変態さんだったなんて」

「あーもうっ、お姉ちゃんは部屋で着替えてっ！」

もはや姉のいたずらに付き合いきれないと、杏子は桃子を部屋に押し込み、閉じたドアに寄りかかった。

「……きいくん、お姉ちゃんみたいなのが好きなの？」

突然静かになったこの場で、彼女のこぼした声は少し寂しげに響いた。

「ち、違うって。違う、本当に違うから……」

こんなとき輝一は、彼女のことを抱きしめられたらと思う。しかし、ましてや彼女の家でそのようなこと、できようはずもない。冷静に伸ばした両手は彼女の両肩を捉え、彼は努めて穏やかに。

「僕が好きなのは、杏子だよ。ね？」とにかく今は、着替えてお

いで」

「……うん。わかった」

同じ高さの視線が交わされると、彼女は再びノックなしにドアを開き、ドアの向こうへと隠れた。

そしてすぐさま漏れてくるはしやぎ声に、輝一は安堵する。

「きゃっ、お姉ちゃんっ、何するのっ！」

「杏子ちゃんってば、また胸が大きくなったの？」

「な、なっでないよう、はうあ、揉まないでよう」

訂正。安堵の後、少しだけまた、盛る己を抑えるのに苦労している。

彼にとつての苦難の時を数分経て、部屋の中が静かになると同時に杏子が出てきた。

「お待たせ。お姉ちゃんの服選びは長いから、先に行こ」

彼女はすっかり機嫌が直ったのだろうか。屈託のない声とともに、勢いよく輝一の手を取り階下へと向かった。

「お母さん、お茶あー、……ふえっ!?」

「お邪魔します。……っ！」

リビングで二人を迎えたのは、予期せぬ人物だった。

「か、神田先生、どうして……」

「神保、先生……」

「……………」

迎えた彼女も同じく、驚きのあまり二の句が継げない。

しかし多少の沈黙を経て、先に落ち着きを取り戻したのは彼女だ。

「私は上野さんのお母様にお招きに預かり、参りました。あなた

こそ、なぜこちらに？」

「いや、あの、それは……」

「杏子ちゃんの彼氏、だもんね？ 恋人の家を訪ねるのに、理由はいらないと思いませんか？」

輝一が言い淀んでいるところに助けを出したのは、そこかしこにフリルがあしらわれたドレスを纏う少女。不敵な笑みを浮かべ現れた桃子だ。しかし彼女の科白でいよいよ「上野杏子と神田輝一が恋人」という関係は鮮明となり、不測の事態に陥った神保早苗は捲し立てる。

「神田先生っ、あなたは教師なんですよっ！」

「そ、それは、そうですけど……」

「許されると思ってるのですかっ？」

「いや、あの……」

矢面に立たされることとなった輝一は防戦一方どころか、為す術なしと言った状況だ。

「わからないのなら教えて差し上げます。許されせんっ、こんなこと！」

「……………」

容赦なく飛ばされる非難に、杏子も彼の腕をぎゅっと抱きしめ立ち尽くすが精一杯のようだ。

状況に対し予想通りと言わんばかりの呆れ顔をしながらも、桃子は再び助けに入ることにした。

「杏子ちゃんの彼氏はいまいち、押しが弱いよねえ」

さらには加えて、キッチンから出てきた桜子がおっとりとして

「素直になれただけですよね？ 早苗ちゃん」

「べ、別にっ、そんなんじや……」

彼女の一言になぜか狼狽する早苗を見て不思議に思いつながらも、多少胸をなで下ろしている輝一と杏子。加えて変わらざる楽しそうな桜子を見て、桃子は苦笑いととに言葉を漏らす。

「うわあ、なんて嫌らしい……」

「ふふっ、一撃必殺よ。あとは桃子ちゃん、お願いね」

「はい。さ、二人とも座って。お茶は桃子が入れるね」

こうして、恋人や教師や生徒や母親や姉や、様々な事情の混ざった難しい晩餐が始まったのだった。

楽しい時間はあっという間、苦しい時間は永遠とも言える長さを感じさせる。果たして今日の晩餐は、どちらだったのだろう。

「まさか神保先生が、桜子さんの親戚だったなんて……」

「と言っても、凄く遠いみたいだけど。お母さんも会うのは初めてだって言ってたし」

桜子と桃子とが氣を利かせて二人をリビングから逃がしてくれなかつたら、拷問のような時間はいつ終わつたのだろうか。輝一にとつてその時は、永遠だったかも知れない。

「はあ、視線が痛かったよ……」

「神保先生は完全に、きいくんを悪者だと思ってるみたい」

「彼女はなんて言うか、優等生だから……。『年端もいかぬ子どもを誣かして』って考えてるんじゃないかなあ」

「そりやそうだよ。子どもに手を出すきいくんは犯罪者だし？」

姉妹の部屋のベランダで、杏子は星空を見ながらにやついている。食卓での彼女とはまるで別人のような、いつもの天真な杏子だ。

一方の輝一は、庭の植え込みを見下ろしながら、難しい表情を

余儀なくされている。

「そう思ってるんだろなあ。月曜からどんな目で見られることやら……」

「悩まない悩まない。これで学校での味方が一人増えたと思えば」

「だから、味方かどうかは怪し――っ」

「っ――」

杏子は隣でうつむく輝一を覗き込むと、まっすぐに唇を重ねた。「前向きに考えようよ？ それに、バレたっていいじゃない？」

トンと一歩下がって瞳を向ける杏子に、呆氣にとられていた輝一が返す。

「バレるのは困るけど、そうだね……」

苦笑混じりの不器用な笑みに、杏子は安心してまた一歩間合いを詰めると。小さく倒れるようにおでこ同士をあわせ、彼の首を抱き。

至近に迫った頬に輝一は両手をあてがひ、唇を結ぶ直前で静止した。

「これ以上はダメだよ」

「どうして？」

「……おうちの人もいるから」

不満をぶつける視線に、彼はありがちな理由で応ずるほかなかった。たとえそれが、この場に不適當な理由であっても。

「お母さんもお姉ちゃんも、ダメなんて言わないよ？」

「それでも……」

たびたび起こる小さな衝突。

原因も、解決法も彼にはわかっていたが、今はごまかすしかない。そう決めていた。

今日もとにかく彼女の願いを拒み続ける苦い決断をすると、光差すように声がした。

「はいはい、そろそろいいかしらあ？」

部屋の中で月明かりに照らされ、人形のように佇むは桃子だった。

「……お姉ちゃん、いつからいたの？」

「んー、突然のキスシーンから？」

「うー、意地悪」

桃子は自らもベランダに出て、わざと膨れっ面を見せる杏子の頭を撫でている。同時ににやりと、視線を横に送る。

「この貸しは高いですよ？ 輝一さん」

「ありがとう……」

「あらあら、すっかり弱ってますねえ」

今度は空いていた左手で輝一の頭も撫でながら、ここに來た覗き以外の理由を述べた。

「早苗さんが帰られるそうです。杏子ちゃん、地下鉄の駅まで送ってあげて」

「えー、お姉ちゃんが行ってよお」

心から嫌そうな顔をして拒否するも、桃子は用意してあったかのように退けた。

「桃子はバイト。それに、二人は早苗さんとよく話すべきだと思うの。でも輝一さんは逆方向だし、無理に一緒に帰ってもらうのも……」

「それは絶対、嫌」

「なら決まりね。さて、背伸びが疲れるから撫でるのおしまい。今度は桃子の大切なところを、心ゆくまで撫でてくださいねっ」

彼女は視界の端で杏子を捉えながら、輝一に上目遣いで軽口を叩く。そして長いスカートを翻しベランダから、部屋から出て行った。

「もうっ、お姉ちゃんったら。……撫でていいのは私のだけだよ？」

「それもどうかと思うんだけど……」

桃子が残した小さな波紋に乗って、二人は軽やかにベランダをあとにした。

「またね、早苗ちゃん」

「はい、お招きありがとうございました」

「またいらしてください」

「き、気を付けて……」

「それは私に？ それとも彼女に？」

「それは——」

「もちろん二人に、でしょうか？」

「あ、ああ。神保先生もお気を付けて」

「あらら、早苗さんがおまけだって言っちゃった」

「ああっ、余計なことを言わないでくれ……」

「まあいいわ。それでは、失礼します」

「じゃ行ってくるねー。きいくんも気を付けて帰ってねっ」

「ああ、じゃあな」

杏子と早苗を見送るべく、残る三人も上野家の玄関先に出ている。

歩き出した二人に、三者三様の気持ち手で振っていた。

「本当に、どうなるんだろう……」

「何とかなりますって。桃子はとおっても楽しみなってきましてよ」

「私は早苗ちゃんの肩を持つちゃおうかしらねえ」

三名中二名は喜びやら策謀やらに忙しく。残り一名はこの様子を見てさらに、気が重くなるばかり。

歩いて行った二人が見えなくなると、桃子がツンツンと輝一の落ちきった肩をつついた。

「ちよっと待っててくださいね」

彼女は「さて仕事だ」と背伸びをして、着替えるために家の中に戻っていく。

その姿をまじまじと観察して、にやにやと笑う桜子に、輝一は嫌な予感がしてしまう。

「な、何でしょうか？」

「ふふっ、モテる男は大変ね」

「いえ、そんな。大変なのは事実ですけど……」

どんよりする輝一とは対照的に、桜子は景気よく彼の背中を叩いた。

「がんばって。私も桃子ちゃんも、応援してるから」

「はいっ」

「よろしいっ。桃子ちゃんに飛ばされないようにね、お休みなさい」

「お休みなさい」

桜子に「がんばって」と言われると、不思議とがんばれるような気もする。勢いで出た返事も、何となく本物のような気がしてきた。輝一は扉の向こうに戻る彼女を見ながら、「ありがとうございます」と頭を下げる。

多少軽くなった胸を張り星空を眺めていると、程なくして桃子が戻ってきた。お人形さんのような可愛らしさは影を潜め、擦り傷すらある硬そうなジャケットとパンツで身を固めている。

「じゃ、行きましようか。はい、どーぞ」

「ありがと」

輝一がヘルメットとグローブ、裾止めベルトの三点セットを受け取ると、彼女は彼に背を向けた。

眼鏡を外し、ヘルメットを被る。そしてまた眼鏡をかける。着替えずら見せてしまう彼女だが、この過程だけは見せたくないらしい。「眼鏡を外した姿は、大切な人しか見せないの」とは彼女の冗談かと思っていたが、ずっと続けているところを見るに本気なのかも知れない。

グローブも着け、流れるようにバイクに乗り込んだ彼女がエンジンのかけた。道路沿いに止められたライムグリーンのバイクは、小柄な彼女と比べれば余程大きく見える。

「普段とは別人だよね」

彼女がバイクから再び降り、バックするように引つ張ってくる姿を見て、輝一は今日も感嘆してしまふ。

「あらあら、将来のお義姉ちゃんなんですから、いい加減慣れてくださいね？」

「……そういうの聞くと、桃子さんなんだなって思う」

輝一の反応に、シールドそして眼鏡越しの眼はキラリと輝く。

「意外性は女の子の武器、なのです。さ、乗ってください」

「うん。今日もよろしく」

準備を終えた彼が高く位置するパッセンジャーシートに乗り込むと、車体が揺れる。左足を自宅のフェンスにかけて車体を支え

る彼女なので、さすがに止まっていたは安定しないようだ。

輝一が目の前の腰を掴み、お尻を膝で挟むと、前傾姿勢を取った彼女がアクセルを開けた。滑るように走り出したバイクは、五分とかからず、二人を杏子たちとは逆の最寄り駅へと運ぶ。その間会話がないだけに輝一は当初落ち着かなかったが、もうすつかり慣れてしまった。

「お疲れさまっ。ごめんなさい、後ろ、乗りにくいんですよ……」

小さな駅なので人気も少ないロータリーに停車すると、桃子はシールドを上げ、同時にしゃべるのを再開した。

「ううん、大丈夫。それより、桃子さんが倒れそうなのが……」

「端から見たら危なっかしいのでしょねえ。でも、重さは前のとトントンなんですよ？」

「へえ、案外軽いんだ」

言葉とあわせて三点セットを返すと、いつもならここで「バイバイ」だが、今日は違う言葉が戻ってくる。

「突然ですが、ちょっとした提案があります」

「ん？ 何？」

「夏休み、杏子ちゃんと一泊旅行に行きたくありませんか？」

「えっ？」

本当に突然に、桃子は切り出した。

輝一がうまく反応できないのは見込んでいたのだろう、彼女は淀みなく続ける。

「一夏の思い出、輝一さんだって欲しいでしょう？」

「い、いや、まあ、その……」

「うんうん、素直でよろしい。でねっ、交換条件で桃子が両親を

説得するってのはどうかなって」

「交換条件？」

聞き返した輝一に、にやりと聞こえてきそうな眼光が刺さる。ヘルメットに妨げられ確認はできないが、口元は相当ゆるんでいるに違いない。

「そう。桃子と一日、デートして欲しいの」

「……僕を試してる？ 桃子さんとは絶対ダメだよ」

当然にあつさりノーと答える彼。予想通りの回答ではあった。

「桃子とだけは、なんですか？」

それでもあえて首を傾げる桃子に、輝一は続ける。

「杏子はお姉ちゃん大好きだし、憧れてるから。お姉ちゃんとの浮気なんて、形だけでもいけなかなって」

「あらあら、他の子ともダメですよ？ ま、杏子が好きな輝一さんは、桃子の身体に惹かれるわけありませんよね。ちよっと退屈な瀬踏みでしたの」

「やっぱり試したのか……」

彼の面持ちに苦みが走つたのを見るまでもなく、彼女はバイクに乗り込んだ。

「合格のご褒美に、両親は説得しておきますね？ お楽しみに」

「えっ？」

「杏子ちゃんの愚痴を聞く桃子の身にもなってくださいな。それでは、ごきげんよう」

桃子はシールドを下ろすと、闇に溶け込むかのように走り去った。

「これは親切なのか試練なのか……」

遠のくテールランプを見ながら、輝一は端から見れば贅沢であ

ろう悩みに頭を痛める。

桃子にはその様子が容易に想像できてしまい、おかしさで開けそうになるアクセルを抑え込むのに苦労していた。

§

桃子が自宅に帰るのは、深夜と言うより早朝に近かった。

帰宅後は風呂に入り、髪を乾かし、と一時間程度かかってしまうのだが、こんな時間だけに眠い日も多い。

「んー、もういいや、寝よ」

乾いたとは言いや髪からドライヤーを離すと、音を立てぬように階段を上がり、部屋へと入る。

「……あら、珍しい」

杏子の寝顔を覗くのが桃子の楽しみだったが、今夜見えるのは形のよい後頭部。

「お休みなさい、杏子ちゃん。素敵なプレゼント、待ってるね」

桃子は静かに頭を撫でると、二段ベッドの上段であつという間に眠りに落ちた。

「お姉ちゃんっ、起きてっ！ ねえ、お姉ちゃんっ！」

「んー？」

桃子が目を開けると部屋の中はすでに明るく、目の前には杏子の顔がある。

「何？ こんな早くに……」

午前九時。朝方の就寝だった彼女には早すぎる起床時刻だ。まだいつもの十五時には遠いだろうと、時計を見るまでもなく感じ

るほど眠い。

しかし。

「ごめん、ごめんね……」

杏子のその言葉とともに頬に落ちたきた雪が、彼女を叩き起こした。

「な、何っ？ どうしたの？」

彼女を跨いで膝立ちの杏子をそのままに、桃子は上体を起こした。

「なんで泣いてるの？」

「あのね、きいくとね神保先生がね、っ、デートすることになっちゃった……」

「え？ どゆこと？」

泣いている理由はひとまずわかったが、それこそ形だけでも、輝一が早苗を選ぶことはあり得ないだろう。いったいどうして輝一と早苗が繋がるのか、桃子には解せない。

しかし涙目の杏子に彼女の疑問を冷静に察することなどできるわけもなく、要領悪くも事の成り行きを説明するのが精一杯だった。一通りの説明が終わると、桃子は簡潔に要約する。

「――杏子ちゃんと輝一さんの一泊旅行の引き替えが、今日の早苗さんとのデートってこと？」

「うん……」

目の前ですっかり泣き崩れている杏子を見ながら、どこかで聞いたことのある話だと、桃子の心は少し痛む。

(……本気でやる人がいるなんて)

誤解されて杏子の気落ちを深めてはならないと、その一言は飲み込み、眼前にある傷心の乙女を抱きしめた。

「大丈夫、お姉ちゃんが何とかしてあげる」

「うん。ごめんなさい……」

「あのさ。もし今、桃子が『二人のデートを阻止する代わりに、輝一さんを一日貸して』って言ったら、どうする？」

桃子は腕をゆるめて杏子との距離を少し取り、彼女を見つめた。上目遣いになってしまうのは状況に似つかわしくないと思いながらも、身長差から致し方ない。

そんなことを考える桃子の余裕は、杏子からの回答がわかりきっているからだった。実際に返ってきた回答は、やはり、確信の通り。

「お姉ちゃんなら、いいよ。だから……」

「わかった。でもね、大切なものは、たとえお姉ちゃんにでも渡しちゃダメよ？」

「……うん」

「よろしい。さ、顔を洗ってらっしゃい。桃子も着替えなくっちゃ」

涙付きながら笑顔になった妹が部屋から出て行くのを待って、彼女は小さく苦笑せざるを得ない。

(全然懲りてないのね。そんなところが可愛いだけ……)

ベッドから降りると笑みは不敵に変わる。

「さてと、王子様を攫いに行きましょうか」

彼女はクロゼットから、普段着とはかけ離れた服を取り出した。

十数分後、ちぐはぐな二人が玄関に並んだ。

「お姉ちゃん、その格好ってまさか……？」

着衣における最重要方針が「可愛く、可愛く、女の子らしく」である桃子が、唯一パンツ姿を見せる。目的は言うまでもないだろう。

「ええ、バイクよ」

「私、も……？」

一方の杏子は逆に珍しい、ロングのフレアスカートを着ている。桃子の後ろに乗るとなれば、この格好は不許可だろう。ただでさえ暗かった彼女が、おめかし禁止令を予期して輪をかけ暗くなりかけたとき。

「ううん、杏子ちゃんは電車。はい、これ」

彼女に手渡されたのは、ラブレターでも入っていないような淡い色の封筒。

「中に行き先が書いてあるから、寄り道しないで行つて。いい？」

「うん、わかった……。開けていいの？」

「いいよ」

中身は特別なものではない。場所を正確に示すため、地図を入れただけ。しかし封筒に入れたことには意味がある。

杏子の意識はすっかり開封、そして中身に向かっており、ジャケットで太った腕が伸び迫ることなど気付きもしない。

「あの子、杏子ちゃん」

「何？」

次の瞬間、真つ白な掌がコバルトブルーの生地をひつつかみ。ひよいと、いとも簡単にスカートの裾を持ち上げた。

「ふえ？」

桃子の視界に、クリームイエローの布地が出現。

「配色は合格、けどもう少し色気のあるデザインのはないのか

しら……」

いかにも落胆した風に、彼女はスカートを解放。そして一呼吸おいて。

「お、お姉ちゃん、何するのぉっ！」

「下着チェック？」

「そんなこと頼んでないよう！」

悪びれもせず答える桃子に、杏子は大声で反論、ぶうっと頬を膨らましてそっぽを向いている。

（素直なのよね、本当に）

期待を裏切らぬ反応に桃子は満足すると、ポケットから携帯電話を取り出し、手早くダイアル。

突然無言になった姉が気になり杏子が振り向いたときには、すでに通話していた。

「おはようございます。今、どちらにいらっしゃいますか？」

相手の声は聞こえなかったが、杏子にも電話先が誰かはすぐわかった。

「はあ、殿方は言い訳が多くていけませんわ。待ち合わせ場所と時刻を教えないさ」

「え、ええっ？ お姉ちゃん、それはあつ」

故に、桃子の命令には慌ててしまう。

今日のデートを許可したのは、杏子自身。それも「本当にいいの？」と何度念押しされたことだろう。ここで出て行くのはずるい気がして桃子に助けを求め、桃子もそれをわかっているはずなのに。避けて欲しかった真つ向勝負を挑んでいるではないか。

杏子は反射的に電話を奪おうとしたが、キッと桃子の睨みが飛

んできた。

「杏子ちゃん、おとなしくしてて。――あ、今のはこちらの話です。えっ？ そんなの間に合うわけありません。電車の事故を理由に十五分遅らせなさい」

「――」

「このチキンがつ、言う通りになさい。彼女の路線とは重ならないのだからバレません」

「――」

「ええ、桃子は無茶が大好き。何でしたら愛車で轢いて差し上げましょうか？」

普段の桃子からは想像もできないような言葉と口調に、隣の杏子もぼかんと見ていることしかできない。

「――」

「結構、上出来です。さ、とつとと行きなさい。――はい、準備完了つと。杏子ちゃん、行きましょう？」

パタリと電話を閉じた桃子は、いつも通りのふんわり笑顔。

本当にいつも通りで、杏子は今し方の姉が信じられず、ぼかんとしてしまふ。しかし、桃子の一言で我に返った。

「悪い子にはお灸を据えないと、ねえ？」

眼光に再び射られた杏子は小さく身震い。

（やっぱりお姉ちゃんだけは怒らせないようにしよ……）

一方の桃子は足取り軽く、杏子の手を取り扉を開け放った。今日も真夏の空が広がっていた。

昨晚同様、杏子が地下鉄の駅へ歩き出し、姿が見えなくなるのを確認した後、桃子は路上に出したバイクに乗り込み、アクセル

を開けた。

走り慣れた道路は空いている。

「ちょうどいい時間に着けそう」

寝不足を意識して、心の声をあえて口にしながら安全運転。

「早苗さんはやっぱり、遅刻を喜んでいるのかしら。一石二鳥の待ち合わせ場所だもんねえ」

浮気などするはずもない輝一を誘うとしたら。早苗は当然、仕事の話を持ち出したろう。ならば待ち合わせ場所として適当なのは、ここしかない。

「日曜とは言え、部活に行く生徒の目がある。既成事実を作るにももってこいね」

杏子が通う高校の最寄り駅。高校へ向かう出口の目の前。

「学校で待ち合わせないことに気付きなさいよ……」

桃子の視界では、生徒に手を振る早苗の元に輝一が歩み寄っている。

「びったり。さあてと」

ウィンカーを点滅させ車体をごく浅く傾け、歩道ギリギリ、二人の目の前にびたりと止めて。

「神田輝一つ！」

桃子は人に聞かせるための声を飛ばす。

目を見開いて振り向いた早苗は、声の主が誰か気付いていまい。

ツカツカと迫る桃子はヘルメットのシールドも下ろしたままで輝一を引きずり出す。間髪入れず彼に乗ってきたバイクを顎で示し、有無も言わず先に行かせた。

「ちょ、ちょっと――」

彼女の傍若無人な振る舞いに呆気にとられていた早苗は、彼が

押し出された後、一拍おいてやっと口を開く。しかし言葉は続けられなかった。

「人の恋人寝取るうなんて、いい性格ね。……嫌いじゃないわ」

対峙した桃子が言葉を被せると反応も待たずに、彼女の目の前から去る。近くにいた幾人かの生徒の声は聞こえていたが、今更に留めても仕方がない。無言のまま大きな車体に乗込み込むと、

「ハイスクハイリターン、か」

早苗に駆け寄る生徒たちをサイドミラーに見て、独り言をこぼし、杏子の待つ場所へと向かった。

同乗させられた輝一は、自分の置かれた状況にわからぬこと半分、心当たり半分。早苗の誘いに応じた時点では、疾しい気持ちなど全くなかったが。今朝の電話から、薄々感付いていた。

「なんで気付かなかったんだろう……ごめん……」

輝一の言葉は桃子に聞こえることなく、桃子の言葉は輝一に聞こえることなく。言葉を交わすことがないまま、それでも何となくどこにいます、三十分ほどでターミナル駅のロータリーに停車した。

「きいくんっ?」

降車しヘルメットを外す桃子に、杏子が駆け寄ってきた。しかし、その声と呼んだのは輝一であったことを聞き逃す彼女ではない。

「あーあ、お姉ちゃんがんばったのになー。興味があるのはきいくんなんだねー、ふーんだ」

「そ、そんなことないよっ。お姉ちゃん、ありがとう」

「どういたしまして。それじゃ、お姉ちゃんからプレゼント」

桃子は一步後ろにいた輝一を引っ張り出すと、杏子と並べる。

「はい、輝一さん」

「うんっ」

杏子は桃子の期待通り、今朝とは打って変わっての表情を見せた。もう一つ用意しているプレゼントを渡したら、彼女はどんな顔をするのだろう。

一方の輝一はスッキリしない顔だ。何か言われるだろうという予期はもちろん、今となつては杏子に申し訳なさを感じていた。無意識であろうと罪は罪、しかし彼は十分に反省をしただろう。あえて何を言う必要もない、桃子はそう判断して、待てなかった次の科白を発する。

「せっかくの夏休み、二人で出かけてらっしゃい。外泊許可付きよ?」

「えっ?」

「っ!」

二人は一樣に驚いている。杏子はあつさり喜ぶかと桃子は思っていたので、ちょっと肩透かしを食らった気分だが、これはこれで悪くない。

「あららん? 驚いた? 行きたくて仕方なかったんでしょ?」

ぬうっと杏子を覗き込みながら問うと、案の定の反応だ。

「えと、うん、そ、そうだけど……」

「なら、よかったねっ」

「うん、ありがとう……」

きつと今朝の続きなのだろう、うつすらと涙を浮かべる杏子にハンカチを渡して。次は輝一に視線を流す。

「説得してから持ちかけたんです。女の子は思慮深い生き物なんですよ？ だから時に狡猾かも知れませんが」

「……その、今朝のことは」

伏し目がちに小声を発する輝一を見て、桃子は少しからかおうかとも思ったが、杏子の貴重な時間を奪うのは本意でない、スバツと言いつけることにした。

「いい勉強だった、と言うことにしましょ」

「ありがとう……」

しかし沖を漕がすに必要な小言もある。間合いをもう一步詰めると、まっすぐに伝えた。

「ちなみに桃子はああいうの、好きです。どんなことをしてでも手に入れようなんて、されてみたいじゃないですか？」

「された方は大弱りだよ……」

彼の応答に、彼女はにやりと笑って最後の一步を詰める。

「杏子ちゃんにも、私と同じ血が流れているんです。……思い当たる節もありましょう？」

平らな胸をべたりと彼にくっつけると。

「あーっ、お姉ちゃんダメーっ」

感激から還ってきた杏子が引き剥がしにやってきた。

「あらあら、杏子ちゃんつてばケチなのねえ」

「ケチでも何でもきくんは渡さないもんっ」

もう取られまいと引き戻し、彼の腕を抱く杏子。

桃子は彼女の行為に満足して引き下がりが、餞別を渡した。

「これはお母さんからの伝言。子どもは二十歳を過ぎてから」

あっけらかんとした科白ともに、ポケットから取り出した小さな紙袋を妹の手に乗せる。

意味と中身に気付いた二人が頬を赤らめるのを認めると、桃子は踵を返した。

「行つてらっしゃい」

背中越しに軽く左手を挙げヘルメットを被ると、眼鏡をかけることなしにシールドを下ろした。

桃子の姿が見えなくなる頃、二人は落ち着きを取り戻し、嬉しい難題に直面していた。

「……どこ、行こうか？」

「きくんとならどこでもいいよ」

隣にある、うっすら紅潮した互いを見つめて。

「じゃあ、とりあえず電車乗る？」

「うんっ。でも、その前に——」

重ねられたのは、喜びと、驚き。

難解辛苦 テーマが悪いと思いました

春屋アロツ

前回の3ヶ月前のライブのお話。今回は出そうと思ってた人全員出せました。ちなみに今回のライブの曲、言及したものはすべて実在の曲を演奏しています。このセットリスト作成が楽しいです。そして激しく時間を喰うのです。

<http://third.system.cx/>

Lagado

古代エジプトにおいてヘビは神聖な生き物だった。脱皮を繰り返す様が、沈んでは昇る太陽を想起させ、再生・復活を示すシンボルと思われたかららしい。

古代エジプトにおいてフンコロガシは神聖な生き物だった。家畜の糞を丸くして転がす様が、太陽を使役する神なる存在と見られたかららしい。

いずれも流れに無理があると思うのだが。

<http://www.k3.dion.ne.jp/~lagado/>

川鵜鶏肋

舞台はいつもの珠坂市です。一発から大仕掛けなものまで、相変わらずネタを大量に入れています。本編中での経済行為は、現実世界では何かしらの法律に触れそうな気がしますね、きっと。物語世界ではギリセーフってことでひとつご容赦を。

Fukapon

来年はがんばります。って言うしかないよね、この時期。本誌掲載作は段々悪くなってよーな。まずはパツとしない恋愛ものをやめるよ！ 今日までの作品を全否定ですね。でも、それぐらいしないと次に進めないのかなって思うの。

<http://www.fukapon.com/>

レイアウト

半年に一度だと前回の経験なんてすっかり忘れちゃうよねと思っていたのですが、じわじわ効率が上がっているみたい。これで再びの早朝入稿にも耐え……たありません。

印刷・製本

新しいステープラを買えずにしょんぼり!? いえいえ、そんなことっておりません。

<http://www.projectkaigo.org/>

mnfikmyhk
CREATURE MIXING 4
baishu

2009年11月15日 初 版 発 行
2010年 3 月22日 第 2 版発行

発行所 まにふいくみやはか
<http://www.projectkaigo.org/>

印刷／製本 project KAIGO

Copyright © 2009 春屋アロツ，川鵜鶏肋，なぎ，Lagado，Fukapon，
まにふいくみやはか

この本は Creative Commons「表示 2.1 日本」ライセンスに従い頒布されます。
詳細は <http://creativecommons.org/licenses/by/2.1/jp/> をご覧ください。

in wonderland

不思議の国の——

まにふいくみやほかでは次号mCMX5の参加者を募集中。
テーマ「in wonderland」のオリジナル作品、エロ可能。
種別やジャンルは問いません。そろそろ表紙絵欲しいです。
詳細はウェブサイトをご覧ください。心待ちにしています。

次号掲載作品募集中
2010年5月発行予定
www.projectkaigo.org